

鬼滅の刃 覚悟を背負え

アテナDAI

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【あらすじ】

これは、最強の剣士を目指すための物語

これは、最愛の人と共に在りたいと願う物語

もし宮本武蔵が鬼殺隊にいたら？

もし胡蝶さん大好き人間がいたら？そんなi f物語です。

始まりは時系列で言うところが多蜘蛛山に行く直前からです

この時代での宮本武蔵は初代宮本武蔵が直々に育て宮本武蔵たり得ると判断された弟子が宮本武蔵という名を襲名。二代目も同じように弟子を取り鍛え上げ、宮本武蔵たり得ると判断されたら襲名。それを繰り返して8代目まで来ています。初代もほかの鬼殺隊の呼吸法を教わっており独自の呼吸法・二天の呼吸を編み出しています。

だいたい宮本武蔵の生きていた年代から三百年弱なのでだいたい8代目あたりかな、と思っっています。

初代のみは鬼殺隊ではありませんでしたが二代目からは鬼殺隊に入りました。

ちなみに、宮本武蔵を襲名している人、まったく血の繋がりがありません。そして、養子にしている弟子には宮本伊織の名を与えています。

今回出てくる武蔵は、F G Oの武蔵の黒髪バージョンをイメージすると思います。要素は本当にそれくらいでF G O宮本武蔵はほとんど関係ありません。

毒露シノエについて。

ひよんなことから胡蝶家に転がり込んだ眼が特徴的な男。

元々胡蝶家とは交流があり胡蝶しのぶとは同年代。

薬学に強い興味を持っていてしのぶと知識の競い合いをする毎日を送ってたごく普通の男。

蟲柱であるしのぶの継子（柱の後継者みたいなもの）であり、蟲の呼吸と花の呼吸から毒の呼吸という独自のものを編み出した。

剣を毒液に漬けており、そこからのしのぶ考案の鞘の中に毒を複数入れていて調合を変えている。

しのぶは藤の花由来の毒だがシノエは生物由来の毒を使っている。

貿易の場にツテがあり、海外産のものも使っている。

本人のお気に入りには蜂の毒である。

アンチヘイトは念のためです

のんびりまったり投稿していきます

【オリキャラの簡易紹介】

8代目宮本武蔵の簡易プロフィール

宮本伊織の簡易プロフ

毒露シノエの簡易プロフ

P i x i v にも掲載しています

目次

プロローグ 1

壱・蜘蛛が嫌いになりそうですby武蔵

17

弐・毒つてすごいんですよbyシノエ

32

参・特訓？特別なことは何もby武蔵

48

肆・一番すごいと思う生物は蟻ですby

シノエ 68

伍・才能の差を見せつけられましたby

しのぶ 82

陸・天才？んな訳。私は凡人ですよby武

蔵 94

漆・絶対に誰も死なせないby煉獄杏寿

朗 112

捌・ずるい人ですよbyしのぶ 126

玖・もつと強くなりたいby炭治郎

140

拾・偶にはお館様と一緒にby武蔵

156

拾壱(11)・特訓開始by武蔵

167

拾弐(12)・みんなで山籠りだそうです

by炭治郎 185

拾参(13)・それでも私は宮本武蔵なの

です
y
武蔵
ちゃん



プロローグ

江戸時代・初期

「ほう……久しぶりに良い剣士を見た」

「俺もだ。こんなな気が昂ぶったのは久しぶりだ」

とある場所で2人のヒトが向かい合っていた。

1人は一本の刀を。もう1人は二本の刀を。

「名を聞いてもよろしいか。妖怪あやかしの武士ものごふよ」

「無論だ……宮本武蔵よ。私の名は……黒死こくしほらう牟。さあ……すぐに朽ち果ててくれるなよ？」

「はっ、それは俺のセリフだ。頼むからすぐに斬り伏せられてくれるなよ？アヤカシよ」

そして2人はぶつかり合った。

く大正時代く

この時代には、夜になると鬼が出るという噂がある。

鬼は人間を喰うと言われており、その伝承が根強く残っている所では夜は絶対出歩いたりしない。

「あーもう！人使い荒いつてーの！ねえ、伊織もそう思わない？？」

「うるさいです8代目。良いですからさっさと行きますよ」

「酷っ？！ねえちよつとくらい慰めてくれても良いんだよ？！？なんでこうも引つ張りだここにされなきゃいけないのさ！私はこれでも二天柱だぜ？」

「柱だからこそ他の方よりお仕事をしなければならぬでしょう？」

「あーもう！親父の言うこと間に受けて継子つぐことかなるんじゃないわ！なんでこうも私の青春邪魔されなきゃならぬのだ！」

「8代目に青春があつたとは驚きです」

「どう言うことよ？？」

「8代目は剣が恋人で家族なのかと」

今は亥の刻（大体午後10時ごろ）。太陽もすっかり隠れて明かりは月の光のみ。そんな山道を歩くのは2人の女性。

1人は20代前半の風貌で青い道着に紅い帯を巻いている。そして腰に帯びるは二本の刀。黒い艶のある髪をポニーテールにしている。瞳の色は、鮮血のような鮮やかな赤。

名を8代目・新免武蔵守・藤原玄信

しんめんむさしのかみ・ふじわらのはるのぶ

もう1人は紅い道着に青い帯を巻いている。腰に帯びるは同じく二本の刀。黒よりの茶色い髪を肩までのショートヘアにしている。瞳の色は、深い藍色。

名を宮本伊織。

そして両者の道着の背に『斬』と大きく書いてある。

2人とも『鬼殺隊』の一員である。

鬼殺隊とは読んで字のごとく、鬼を殺す隊である。

平安の時代からこの世にいると言われている鬼を殺すための、政府非公認の隊である。

「はぁー。さっさと終わらせて藤の花の家に泊まろう…。てか、鴉によると近くに突みずのの階級の人が数人いたんでしょ？なんで私たちが向かう必要があるのよ…今日、前からずっと頼んでようやく食べれる超繁盛してるお店のうどん食べれたのに…この任務のせいで全部水の泡よ…」

「8代目。その辺で」

「わかってるわよ。こんな気配も殺しきれない鬼。私が気づかないとでも？」

そんな2人をじつと息を殺してみていたのは1人の人間の形をしたナニカ。それを2人は鬼と言った。

「ですが、強いですよ？」

「んー。気配的に下弦の使い回しじゃない？単に上弦の部下か下弦の壺か弔あたりが縄張り近いから監視させにきたか。まあ、多分後者でしょう。あのクソ親父とやり合った鬼はそんなことするはずないし」

「育ての親をクソ親父呼ばわりはどうかと」

「事実よ」

2人は呑気に会話を続けてはいるが、常に鬼からの攻撃は続けられている。

攻撃の悉くを2人は避け続けている。

「あーめんどくさ。とつとと終わらせよう」

「はい。それが良いと思います」

「はあはあ…俺を…ナメ…」

「伊織、やっていいよ」

「はい。……二天の呼吸」

最後に鬼が聞いたのは伊織の放ったその言葉のみだった。

「はーっ、これ、絶対近場の癸でも事足りたでしょう。てか、経験積ませるためにもやらせたほうがいいでしょ」

「仕事に文句を言う口実を作るのはやめたほうがいいですよ。貰い手がどんどん減りますよ」

「うるさいわっ！」

「それでは8代目。私は別の用事がありますので。それでは」

「はいはい…。夜道は気をつけなよ？ちゃんと…」

「はい。藤の花のお香を焚いておけ、ですね。わかりました。それでは8代目…いえ、師範。任務お疲れ様です」

「うん。伊織もお疲れ様」

2人は最後に笑い合いながら別れた。

「あーーーーーー。疲れた…。次柱ちゆうちゆう合会議に行ったらやめるって宣言してやる」

私は任務の場所からしばらく歩いたところにある藤の花の家紋の家にたどり着いた。

そこでは報せを聞いていたのかお婆ちゃんが入り口で待つていた。

「お待ちしておりました。二天柱・宮本武蔵様。ようこそ、藤の花の屋敷へ」

「いーえー。いつもありがとうございます」

こき使われるとはいえ、このお屋敷にお邪魔できると思えば安いものでは？と思つてしまうことが時々ある。

だつて、ご飯がものすごい美味しいんですもん。

「本日のご夕食は、こちらで御座います」

「え!? うどんだよつた! ありがとうございますお婆ちゃん!」

「宮本武蔵様はうどんがたいそう好きとお聞きしておりますので、こちらに来られると聞き急遽取り寄せいたしました。お口に合えよろしいのですが」

「何を言いますか! どんな出来だろうともお婆ちゃんのその気持ちが一番嬉しいのです! 本当にありがとうございます!」

お婆ちゃんを優しく抱きしめながらそう伝える。

めいっばい抱きしめた後にお婆ちゃんが退室したのを確認して私はうどんをたらふく食べた。

「あー食つた食つた。……で、何よ」

食べ終わつたのを見計らつたかのように鴉が部屋に入つてきた。

また任務だろうか。

「カアー！ シバラク！ 休ミヲアタエル！ 次ノ任務ハ一週間後ニ言イ渡ス！」

「……………へ？」

この時の私は、ひつつさしぶりの休暇に、思わず阿呆な声を出してしまった。

「…暇は暇でやることないわね」

よく考えてみれば刀を振るうのと何かを食べる人生しかなかった気がする。

ドタバタギャーギャードタバタ

「……………うっさいわね。夜なんだから静かにしてほしいわ」

隣の部屋からドタバタ走り回る音とギャーギャー騒ぐ音が聞こえる。

まあすぐに寝てくれるでしょう。もう子の刻になったし。

数十分後

ドタバタギャーギャードタバタ

よーし、ぶっ飛ばす。

慈悲はない。

「うるさい！静かにせんか！……つて、は？なんで…」

「あん！なんだお前！」

「いや待て伊之助！他の人に…」

「おらあ！」

「…」

猪の頭を被った子がこっちに勢いよく突撃してきた。

半分めんどくさくイラついていたので足を引つ掛けて浮かばせ、そのまま力を加えて空中一回転させてやる。

「あだっ！！？」

「伊之助！！？」

「ええ…え、ちよ、あんな綺麗なお姉さんが…あんな鬼のような怒りの音だしてる…」

「何すんだこのババア！」

「バツ、ババア！！？よーし喧嘩売ったわねこの野郎！」

「ちよっ！伊之助謝るんだ！この人まだまだ若くて綺麗だろう！」

「そ、そうだぞ！ちよつと怖いけど綺麗だろ！」

「うるせええ！コイツ相当強いぞ！俺の踏み台にしてヤラア！」

「…ちよつと黙つてろ、害獣。踏み台にしたいなら、もつと強くなつてから言え」

猪の被り物をした子の後ろに回り込み頭を持って軽く脳を揺らした。これにて無力化完了。

さて…隠してはいるだろうけど、鬼がいる。

「ねえ、その…痣？のある子」

「は、はいっ！」

「名前は？」

「俺は竈門炭治郎です！こんな夜更けに起こしてしまいごめんなさい！」

きつともものすごい礼儀正しい子なのだろう。でも、それは関係ない。この子の後ろにいる女の子、この子は鬼だ。

鬼に対しては私情を持ち込んでほならない。持ち込んでいいものは、絶対に鬼を殺すということだけ。

見た目はすごいストライクなんだけど、それとこれは話は別だ。

「今すぐ、その女の子から離れなさい。その子は鬼です」

「いい、いや待ってください！禰豆子は人を喰いません！」

「信用しない。私と同じ時期に剣士になった子もやたら友好的な鬼に騙されて殺されたからね」

「でも！今まで禰豆子は人を喰ってません！」

「だーかーら。それを信用するほどお人好しじゃないのよ。私は。人を喰ってないのは本当なんでしょうね。でも、これから先のことはわからない。それに鬼である以上無惨の手の内にあるのは間違いない。わかる？君は今、自分と友人、それにこの宿を危険に晒しているのよ？」

「それは……」

ガラッ

一触即発の空気の中、入ってきたのはお婆ちゃんだった。

「お待ちください二天柱様」

「お婆ちゃん。悪いけれど待てないわ。私自身を危険に晒すのは構わないんだけど、お婆ちゃんを危険に晒すのは私が許せないの。だから……」

「そのお二方は『お館様』と水柱様、元水柱様が御容認されていると聞いています」
「……あつそう。ならいいわ。水柱達だけならともかく、お館様も容認してるなら、まあ今はいいでしょう。悪かったわね。竈門少年」

黄色い髪の少年は気づいたら気絶してるし猪の子はさっき私が気絶させたし。さてはて、どうしようかねえ。

「とりあえずお前ら。夜中に騒ぎまくった罰ね。全員叩き起こして竈門少年」

「は、はいっ!」

それとは別で私の安眠を邪魔した罪は重い。

とりあえず気絶させた子と気絶してる子を叩き起こしてもらった。

特に猪の子には慈悲はない。

「ふっふっふ……ババア呼ばわりは絶対に許さん」

後日にこのことを伊織に話したら『だからおよめにもらつてくれないんですよハハハ』と笑われた……。ちくせう……。

ちなみにこの物語の本当の主人公である竈門炭治郎、かまどたんじろう我妻善逸、あがつまぜんいつ嘴平伊之助は武蔵に

苦手意識が芽生えたという。

実はこの五代目宮本武蔵さん、怒らせたら怖い柱、堂々の1位です。

超スパルタの筋トレを課されながらお説教をされていた。

〜次の日〜

「那由多蜘蛛山？ねえ、鴉。昨日任務ないって言ってなかった？」

あれから八つ当たりと言う名のストレス発散を終えた後お酒を飲んでいーい気持ちで寝て次の日も爆睡してやろうと思ってただけど、卯の刻（大体朝6時頃）に鴉に叩き起こされた。そして言ってきたのは、任務がある、とのこと。この野郎、焼き鳥にしてやろうか。

「カー！ー！予定ヲ先延バシニスルトノコト！共ニ那由多蜘蛛山へ向カイ鬼を滅セヨ！チナミニ、伊織カラ任務ガ終ツタラ例ノウドンヲ食ベサセル用意ガ出来テル！」

「よっしややるわ。いこー！」

「癸ノ劍士3人ヲツイデニ鍛エテヤレ！」

「ねえあんた？ 鶏肉使った焼き串、食べたくなあいな？」

そう告げると鴉は慌てて飛び去っていった。

「はあ…これでもやりたい事は沢山あるのに。何故こうも使われるのか…」

それを色んな人に聞いても同じことしか返ってこないのは分かりきつてゐる。ていうか、何回か同僚に聞いた。

答えはみな『乗せやすい』と言ってくる。私、そんなちよろい女じゃありませんことよ？ (泣)

「あー宮本さん、おはようございます！」

「うー、おはよう。めっちゃ頭痛いけど…」

「大丈夫ですか？ お水持つてきましようか？」

「お願い…」

竈門少年が私に気づいて駆け寄ってくれた。そしてお水を持つてくるように頼んだ。

「…二日酔いやば」

まさかこれで任務に行けと言うのか。十二鬼月に出会ったらどうしろと言うのか。十二鬼月っていうのは鬼の中でも破格の強さを持つ12体の鬼のこと。

負ける気はしないけどなんかこの気分ではやるのはやだ。

水を飲んだ後に軽くストレッチを重ねて体の調子を整えた。
あとはあの3人が来るのを待つだけ。

「うん、全員揃ったわね。それじゃあ行きましようか」

「はいー」「は、はい……」「……」

道着を着て、二天の館から届いた紅い羽織物をはおり3人が来るのを待ち、やってきたので出発をした。明らかに我妻善逸と嘴平伊之助はこちらを見て恐怖していたが。

「あ、3人も。向こうに行く間にも特訓ね。いつ、どんな手段でもいいから私から一本取りなさい。真剣、木刀は構わないから。もし取れなかったらこの依頼の後に罰として昨日のような特訓を課します」

「「え」」

「あと、特訓とも思わなくていいわよ。鬼だと思つてやりにきなさい」

「いやいやいや！お姉さん言ってる意味わかってる!?？」

「そうですよ！それに鬼と思えつて……」

「あん？面白そうじゃねえか！」

「うん、その意気よ！それじゃあスタートね！」

伊之助だけはやる気十分ね。うんうん。向上意識がある事はいいことです！

親父殿や伊織ともよくこの特訓やったなあ。

「あれ？　そういえば武蔵さん。日輪刀はどうしたんですか？」

「え？　ああ。うん。屋敷に置いてる」

「へー、そうなんです……って、ええ!?？」

素手での戦いも鍛えよとのご命令がクソ親父殿からきたから急遽刀を屋敷に送りました。

親父殿曰く、『まあ、お前ならできるよな？　（笑）』と言ってたらしいのでやったらうと。

つか、歴代宮本武蔵もやったとかいうが親父殿よ、私は知ってるぞ。お前、剣を手放した事ないだろうが。

まあいいや。

さてはて、那由多蜘蛛山での任務をとっと終わらせて、おうどんおうどん！

（蝶屋敷）

「…産屋敷へ？」

「ええ。お館様へご報告に。一緒に来ませんか？」

「構いません。ですが、なんのご報告で？」

「貴方を柱にしても良いという判断がつきましましたので。その事についてのご報告です」
「それなら私はいららないのでは…？」

「あら、そうですか。でしたらちようど義勇さんもいらつしやるので義勇さんと…」

「俺も行きます」

「そう言ってくれると思っていました♪」

蝶屋敷では2人の男女が話していた。が、2人して手元を持っているのは様々な薬品。

数十を超える粉や液体があるがそれら全てが毒。

「毒柱となるる日がようやく来ましたね」

「その名前はすごい嫌ですけどね…」

壱・蜘蛛が嫌いになりそうです by 武蔵

「うえっ…名前を通り蜘蛛山じゃん…」

数時間歩き戌の刻（大体午後8時くらい）になってようやくたどり着いたのだが…蜘蛛が多い。多い多い！

右を向けば蜘蛛、左を向けば蜘蛛、上を向けば蜘蛛、下を向けば蜘蛛！

まさに蜘蛛の楽園ですよ！はっ、燃やしたるか。

「おっと、はいい3人とも。特訓終わり。誰一人として一本取れなかったかあ。全員でかかってきたらもしかしたら取れたかもしれないのにね」

立ち止まった瞬間に伊之助（猪の頭の毛皮？を被ってる子）から気配を消して（消しきれないが）背後から切りかかってきたので必要最低限だけ体を逸らして避ける。

「だぁー！…なんでだ！」

「うんうん、ちゃんと考えることよ。それじゃあ…この任務終わったらマンツーマンで特訓したげるから感謝しなさいね♪」

「いやだあああ！まだ俺死にたくないよお！」

「クツソー！おいバ……」

「それ以上言ったら首刎ね飛ばすよ？」

「……これが終わったらまた挑んでやる！そんな時には俺が勝つて見せろア！」

「……（ただただ凄いという感想しか出ない。いったいどんな特訓をしたんだろう。俺もなれるかな！）」

唯一前向きでない善逸は遺書を書くのを決意したとか。

「さーてと、あんたら。ここからは鬼の巣窟。気を引き締めなよ？でない……すぐ死ぬよ。いい？まずは死なないことを第一に。万が一格上に遭遇したら迷わず鴉を飛ばしなさい」

「はい！」

「んなことしなくても俺が全部狩ってやる！」

「あのー、どうせなら俺ここでもう帰りたいなー、なんて」

「……」

「いやつ、あの！嘘です嘘です！」

「別に良いわよ。やりたいかやりたくないかはその人次第。ていうか、それならなんで鬼殺隊に入ったのよ。鬼を狩るために鬼殺隊に入ったんじゃないの？」

善逸（髪が黄色い子）は私の返答にキョトンとした。私が強引に連れていくような鬼にでも見えたのだろうか。

別に私はそこまで鬼じゃない。やる気のない奴には時間を割かない。それだけだ。

「さーて、ここからはバラけましょ。私一人、伊之助と炭治郎でペア。善逸君は…まあ、お好きにしなさい。」

一刀三拝。修練の果てに無限に至る」

「「？」」

最後の言葉で意識を切り替える。

仕事モード、とでも言えば良いか。

「それじゃ、またねえ」

「はい！武蔵さんも気をつけてください！刀ないんですから！」

「ほいほーい」

別れ際で炭治郎君だけがちゃんと挨拶をしてくれた。うん、ええ子ヤア。

伊織の許婚にどうか？

（わたしのを探す前に自分のをお探してください）

「…うん、絶対そう言われる自信があるわ」

それにしても刀の実物無しでの任務はさすがに初めてだからいつも以上に気を引き締めなければ。

「…初代は剣の道はやがて無刀の道へと至ると言つてたらしいけれど、どういう意味なんだろう」

にしても、くつつつさい。炭治郎が行つた方向から？マジで臭い。

「まあ臭い程度はどうでも良いとして…刀のカケラ？」

鉄の塊を見つければ近寄ると刀が細切れになつていた。

…ナマクラ作つたなあ。鍛冶氏の皆さんを罵倒する気は無いけど、腕落ちた？それとも新人の子が作つたのかな？

「つてえーマジで蜘蛛多い！纏わり付いてくんない！これお気に入りなんだから！蜘蛛の糸はつつけてくんない！」

入る前から確信はしていたがこの蜘蛛全部鬼の手先だ。多分そういつた血鬼術なんだろう。あ、血鬼術つてのは鬼の使う技のことで色々ある。私が見てきた中だと地面に水のように潜つたりだとか腕を自由自在に伸び縮みさせたりとか、まあ鬼によつて千差万別な技だ。

「…？なにこの繭」

さっきの刀の残骸からしばらく歩くと今度は人一人は余裕で入りそうな繭が大量に

木にぶら下がっていた。

うわあ悪趣味。しかも中身入ってるし。液体？え、なに。血のジュース？

「えーと、きた道がこっちで、この繭は…西に向けて多いってことは鬼が入ってきた人たちを繭にしたと見て。だから…うん東こっちのほうかな！よし行こう。素手でも生き残ってやりますっての！」

この数十秒後

8代目宮本武蔵は迷った。

「おつかしいなあ。同じところぐるぐる回ってる気がするわ。…気配的にはいるのはわかるのに。なんで出会えないんだろう」

ちゃんと人の気配と鬼の気配の混同してるところは避けるようにして鬼単独の気配のほうへ向かってるのね。なんでなんだろ。

ていうかさ、今時間どのくらい？もう丑の刻（大体午前2時くらい）になったのかな？

ていうか聞いてよ。蜘蛛の糸のお陰で羽織物がですね…あられない姿に…。こんなくしよう、この元凶絶対許さん覚悟しやがれ。

「…あ、鬼の気配消えたし。うーわ！私まじで何しに來たの？？あんの鴉カラス、次きたら焼き鳥にしてやる！慈悲はない！」

諦めて人のいる方向へ向かう。するとそこに二人の見慣れた人が。

「何してんの二人とも」

「……」

「あら、武蔵さん。お久しぶりです」

一人は男。一人は女。そして体は密接めくちしている。

男の方が水柱（鬼殺隊の階級の一番上）の富岡義勇。表面上はすごい冷たそうな人で黒髪をポニテみたいにくくってる。

女の方が蟲柱の胡蝶しのぶ。数少ない女性鬼殺隊で仲良くしてもらってる。めっちゃニコニコしてて優しいけど怒らせたらマジで怖い。黒髪を…どう言えば良いんだろう。結ってる？かな？わかんないや。

特徴的なのが蝶のような羽織物と蝶の髪留め。

さて、この二人が來てるからにはこの山の鬼が相当強かつたんでしようけど…なんで絞め技？

「もしもーし。聞こえてますか武蔵さん。富岡さん隊律違反しているので富岡さんを取り押さえて欲しいんですが」

「んなこと言われなくてもなんとなくわかるわよ。ドーセ口足らずな義勇君による勘違いの嵐でしょ?」

「いえいえ、そんなことはありませんよ。鬼を狩ろうとした私の邪魔をし、鬼を連れた隊士を庇った。これは明確な隊律違反ですよね?」

「……ん?」

しのぶちゃんの言った鬼を連れた隊士つてのになんか既視感が。てか、つい最近見た気がする。

「ねえ、それって……」

「カーー! 伝令! 伝令! 伝令アリ! 炭治郎・禰豆子! 両名ヲ拘束! 本部へ連レ帰ルベシ!」

「「!!?」」

鴉の伝令聞いて納得した。……でしようなあ。そりやそうなるわ。……めんどくさくなりそう。帰ってもいいかな?

「カアアアア！二天柱！オマエモ本部へ共ニ帰ツテクルベシ！柱合会議ヲ！サボるな！伊織ガ！言ツテタゾ！」

「デスヨネ」

こうして結局柱合会議には出なきやならなくなつたと。

ていようか義勇君や？そろそろしのぶちゃんを離してあげなよ。

く辰の刻（午前8時ごろ） 産屋敷く

「お、杏寿朗に天元じゃん。ちーっす」

「うむ！武蔵殿も元気そうで何よりだ！」

「おう武蔵。また派手な試合しようぜ！」

産屋敷に到着するともう炎柱えんぼしちの煉獄杏寿朗と音柱の宇髄天元がいた。

それからすぐに恋・岩・霞・蛇の柱の方々が揃つた。そして…柱じゃない子が一人。確かしのぶちゃんのところの継子つぐこだったかな？たしか…シノエ君。

「おい！起きろ！いつまで寝てんだ！」

柱が風を除き全てが集結したのに炭治郎はまだ昏睡してた。それを事後処理部隊及び何でも屋の隠カクシの人が炭治郎を叩き起こしていた。あとごめんね。柱の皆様方は

ちよつと詳細省く。

「いつまで寝てんだ！早く起きろ！柱の前だぞ！」

最後の掛け声とともに炭治郎もようやくやく目を覚ました。

うん、さーてとめんどくさくなりそうな予感。

「(柱：!!? 武蔵さんの言つてたやつだけ何だ!!? この人達は誰なんだ? ここはどこだ?)」

「(ここは鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ。竈門炭治郎君)」

「裁判の必要などないだろう！鬼を庇うなど明らかな隊律違反！我らのみで対処可能！鬼諸共斬首する！」

「ならば俺が派手に頸を斬つてやろう。誰よりも派手な血飛沫を見せてやるぜ。もう派手派手だ」

「(ええ…。こんな可愛い子を殺してしまうなんて。胸が痛いわ。苦しいわ)」

「ああ…。何というみすばらしい子供だ。可哀想に。生まれてきたこと自体がかわいそうだ」

「(…あの雲なんだっけ)」

「うーん、裁判云々は置いといて、お館様のご意見なしに勝手に判断しちやダメでしょ。お館様の策かもしれないよ?」

言葉を放った順番は蟲↓炎↓音↓恋↓岩↓霞↓二天である。

「策ならば事前に我らに通告するはずではなからうか」

「うん悲鳴嶼ひめじまの言う通りなんだけど…私としては無闇矢鱈に剣士を減らしたくないと言
うか」

きつと炭治郎は不安になったんだろう。顎を動かして必死に何かを探し始めた。ま
あ多分妹の禰豆子ちゃんなんだろうけど。

「そんなことより富岡はどうするのかね」

そして次に意見をしたのは蛇柱。木の上に座ってるが…おいコラ、とりあえずその木
の上から降りてこい。

「拘束もしてない様に俺は頭痛がしてくるんだが。胡蝶めの話によると隊律違反は富岡
も同じだろう。どう処分する。どう責任を取らせる。どんな目に合わせてやろうか」

「まあいいじゃないですか。大人しく付いてきてくれましたし。処罰は後で考えましょ
う。最悪武蔵さんがとらえてくれるでしょう」

「ええ…そこで丸投げ？いや別にいいけどさ」

「ーゲホゲホゲホッ！」

炭治郎君は何かを喋ろうとしたけど声が出ずむせた。うん、可愛いなこの子。

「水を飲んだほうがいいですね。顎を痛めますからゆっくり飲んで話してください。

鎮痛剤が入っているため楽になりますが怪我が治ったわけじゃないので無理はいけませんよ」

しのぶちゃんから水を飲ませてもらって（役得いいね）炭治郎君はゆっくり喋り出した。

「……俺の妹は、鬼になりました。だけど人を喰ったことはないんです。今までも、これからも。人を傷つけることは絶対にしません」

「くだらない妄言を吐き散らすな。そもそも身内なら庇って当たり前。言うこと全て信用できない。俺は信用しない」

「あああ、鬼に取り憑かれているのだ。早くこの哀れな子供を殺して解き放つてあげよう」

「いやあんたら、殺すしか能がないの？重要な手がかりになるかもしれないのに」

「お前もお前だ武蔵。鬼は全て斬るのではなかったか。なぜ斬っていない。お前の覚悟とはその程度か。貴様の父親の仇ではないのか」

「うっさいわね。それとも何？伊黒、私とやる気？別に私は構わないわよ？アンタのその態度、前から気に食わなかったのよ。あとあのクソ親父はまだ生きてるっての！両腕と片目失ってるだけだわ！」

蛇柱の伊黒おぼない小芭内と睨み合う。相変わらずコイツのネチネチした言い回しは嫌いで

す。

「聞いてください！俺は禰豆子を治すための剣士になったんです！禰豆子が鬼になったのは二年以上前のことで、その間禰豆子は人を喰ったりしていません！」

「話が地味にぐるぐる回ってるぞアホが。人を喰ってないこと。これから喰わないこと。口先だけじゃなくド派手に証明してみせろ！」

「あのお、でも疑問があるんですけどお館様がこのことを把握してないとは思えないです。勝手に処分しちゃっていいんでしょうか。とりあえず待ったほうが……」

天元の言うことも最も。んで恋柱の甘露寺蜜璃かんろじみつりちゃんがとりあえず待とうと案を出す。うんうん、いいこと言った。てか私たちが決めたらめんどくさいぜ。だからとりあえず待とうや皆さん。

「妹は俺と一緒に戦えます！鬼殺隊として人を守るためにたたかえるんです！だから！」

「オイオイ、なんだか面白いことになってるなあ」

「困ります不死川様しなずがわ！どうか箱を手放してくださいませ！」

そして最後に現れたのが風柱の不死川実弥^{さねみ}。身体中に傷があるのが特徴なんだけど……また増えた？

その手には例の禰豆子ちゃんの入ってる箱（炭治郎がいつも連れ歩くのに持ってたもの）を持っていった。

ただ、勝手が過ぎる。アレは私自ら誰にも触らせるな、と言っておいたはずだ。隠の人から取り上げてくるから聞いてないはずがないだろう。

「鬼を連れてきた馬鹿隊員はそいつかい。一体全体どういうつもりだあ？」

「しのぶ様、武蔵様、申し訳ありません……」

「うん、いいわよ隠の人。……不死川、勝手がすぎる。今すぐその箱を地面におけ。身の程を弁えろ」

「勝手なことをしないでください。不死川さん」

「ハッ！かの宮本武蔵ともあろうものが腑抜けたなあ！おいボウズウ鬼がなんだって？鬼殺隊として人を守るために戦えるう？そんなことはなあ……」

不死川が抜刀しようと手にかけてのを見て全力で脱力をした。

「ありえねんだよ馬鹿があ！」

「生まれ、不死川。私の言いつけを破った挙句に、勝手なことをしすぎだ」

「アン？お前も鬼を庇うのカイ？なあ、宮本武蔵さんヨオ」

脱力した状態から踵で勢いよく踏み込み一瞬で不死川との間合いを詰める。剣で貫かれる前に刀身を驚掴みにする。

「庇うわけじゃない。私はお館様の御意見を伺ってから決めたほうが良いと思ってるだけ。それに…好き勝手にしすぎなんだよお前は。隠の人から聞いてるよな？その箱に触れるな、つて」

「ああ？」

不死川と一触即発の空気になる。うん、久々にキレた。てめえ不死川。お前がこれ以上やるとなあ

めんどくさくなるでしょうが！つと、ゲフン。有益な情報を自ら手放すなんて馬鹿の極みですよ？

「お館様の御成りです！」

「よく来たね。私の可愛い剣士たちこしも。お早う皆。今日はとてもいい天気だね。空は青いのかな？顔ぶれが変わらず、そして新たな柱を迎えて半年に一度の柱合会議を迎えられたこと。嬉しく思うよ」

屋敷の中から一人の男が出てくる。それを見た全員が一斉に並び跪く。

「お館様におかれましても御壮健で何よりでございます。益々の御多幸切にお祈り申し上げます」

「ありがとうございます」

「畏れながら、柱合会議の前にこの竈門炭治郎なる鬼を連れた隊士について御説明いただきたく存じますがよろしいでしょうか」

相変わらずお館様が前だとまともに喋るね。ほんとその切り替えすごいわ。

さーと、ドーせこつちに火花飛んでくるし。ドーしよーかねえ。

弐・毒つてすごいんですよbyシノエ

初めてお館様を見た。…僕のような毒に頼るような剣士がこんなすごい人達に並んでしまっているのだろうか。

特に…宮本武蔵？え？実物？あの戦国時代最強の剣士だったという宮本武蔵の後継者。しのぶさん曰く今は8代目らしい。

それにしても、鬼を連れたこの竈門炭治郎っていう剣士。普通なら切腹だと思っけど…まあいいか。僕はしのぶさんに従うだけ。

「そうだね、皆を驚かせてしまつてすまなかつた。炭治郎と禰豆子の事は私が容認していた。そして皆にも、そして勿論新しく柱に加わつたシノエにも認めてほしいと思つてゐる」

「「！！」」

「嗚呼…例えお館様の願いであっても…私は承知しかねる」

「俺も派手に反対する。鬼を連れた鬼殺隊など認められない」

「私は全てお館様の望むまま従います」

「僕はどちらでも…すぐに忘れるので…」

「……」

「僕は、しのぶさん達に危害を加えないなら構いません。もし仮に加えるのなら、殺します」

「…」

「信用しない信用しない。そもそも鬼は大嫌いだ」

「心より尊敬するお館様であるが理解できないお考えだ！全力で反対する！」

「私個人としては鬼殺隊に入ったのはとある鬼を狩るため。その障害とならないのなら構いません。そもそも鬼殺隊とは悪鬼を滅するもの。なれば竈門炭治郎の言い分を信じるならば二年も人を食わず鬼狩りの竈門炭治郎を助けている禰豆子は滅する対象ではないと考えます」

「鬼を滅殺してこそその鬼殺隊。竈門・富岡両名の処罰を願います」

話した順は岩↓音↓恋↓霞↓しのぶさん↓僕↓水↓蛇↓炎↓武蔵さん↓風。

意外だったのは武蔵さんで、肯定的だった。

「では、手紙を」

「はい」

そう言ってお館様の横にいる白髪の子供？が手紙を読み上げた。僕が柱になるのをお館様が承認したことを伝えたのもあの子だけ…。

その手紙の内容は竈門炭治郎と鬼の禰豆子が共に在ることを許してもらいたいという事と禰豆子の事について。どうやら飢餓状態で二年過ごしたのは本当らしい。

そして、禰豆子が人を襲った場合は元水柱の人と水柱の人、そして竈門炭治郎も腹を切るらしい。

「……。切腹するから何だと言うのか。死にたいなら勝手に死に腐れよ。何の保証にもなりはしません」

「不死川の言う通りです！人を喰い殺せば取り返しがつかない！殺された人は戻らない！」

「確かにそうだね。人を襲わないと言う保証ができない。証明ができない。ただ、人を襲うと言うこともまた証明ができないね

「……」

お館様の言葉に風柱の人の反論が止まる。……まあ、確かにそうだね。

「禰豆子が二年以上もの間人を喰わずにいると言う事実があり、禰豆子のために2人の者の命が懸けられている。これを否定するためには否定する側もそれ以上のものを差し出さなければならぬ」

「……」

「……。むうー！」

風柱、炎柱の両名とも黙りこくってしまった。

「それに炭治郎は鬼舞辻と遭遇している」

…わあ。それは凄いです。

それを聞いた他の柱…武蔵さん以外だけど全員が竈門炭治郎に質問攻めをする。

「……全員、黙れ。お館様の御前だ」

今日一番の、風柱さんが木箱を刺そうとした時以上の武蔵さんの怒気。

それを放った瞬間に寒気が止まらなかった。僕が標的な訳でもないのに、斬られた筈という事実を突きつけられた。

一斉に全員が黙った。

「失礼しましたお館様。お話の続きをお願い申し上げます」

「ありがとうございます。ヒナ」

「お館様…どうか幼名で呼ぶのはおやめください。私の今の名は新免武蔵守・藤原玄信です。長いので宮本武蔵で通しておりますが」

「そうだったね。でも先代も宮本武蔵なんだしややこしくないかな？」

「あのクソ親父のことはもうお忘れください。お館様、話がズレております」

「ああ、そうだったね。」

鬼舞辻はね、炭治郎へ向けて追っ手を放ってるんだよ。その理由は単なる口封じかもしれないが。私は初めて鬼舞辻が見せた尻尾を掴んで離したくない。恐らくは禰豆子にも。鬼舞辻にとって予想外の何かが起きているのだと思うんだ。わかつてくれるかな？」

確かに、悪く言えば2人を餌にして鬼舞辻無惨が……鬼の頂点が食いついてくれるかもしれないんだ。

それは容認せざるを得ないだろう。

でもそれ以上に、しのぶさんに危害を加えないというのがある。

「(ギリ…) わかりませんお館様。人間ならば生かしておいてもいいが鬼は駄目です。承知できない！」

そして風柱の人は自らの腕を切った。

…何してるんだ。庭が汚れる。

「お館様！ 証明しますよ俺が！ 鬼という物の醜さを！」

「実弥…」

「オイ鬼！ 飯の時間だぞ喰らいつけ！」

垂れる鮮血を木箱の中に垂らす。

「不死川、日向では駄目だ。日陰へ行かねば鬼は出てこない」

「お館様、失礼、仕る」

風柱の人は箱を持ちお館様の屋敷内へ入る。

「禰豆子オ！やめ…」

竈門炭治郎が叫ぼうとした瞬間、蛇柱の人に抑えられる。…あれ、肺を押さえつけてない？怖っ。

風柱は箱を更に三回刺し箱をこじ開ける。その中から現るは、女の鬼。口元には竹を噛ませてある。息を荒くし傷だらけの腕ごと風柱の人を見つめている。

「伊黒、押さえつけすぎだ。少し緩めろ」

「動こうとするから押さえつけてるだけだが？」

「竈門くん、肺を圧迫されている状態で呼吸を使うと血管が破裂しますよ」

「血管が破裂！いいな響き派手で！よし行け破裂しろ！」

「可哀想に、何と弱く哀れな子供…南無阿弥陀…」

武蔵さんにより蛇柱の人へ緩めるよう進言するも蛇柱の人は無視。竈門炭治郎はしの方さんの助言も聞かず、強引に拘束を解こうとする竈門君をみて破裂しろと言う音柱と可哀想という岩柱の人。

…正直、今でも戦力不足なのにその戦力を減らそうとしてるのが…なあ。うん。鬼嫌

いは分かるけど。

いや、しのぶさんを襲う姿想像したら僕も無理だ。躊躇なく殺す自信がある

「ガ……………ア……………ア！」

竈門君は強引に力を込め縄を引きちぎった。それと同時に水柱の人がいつのまにか移動していて蛇柱の拘束を解いていた。

ウワオ、すごい。

「禰豆子！」

「……………っ……………フン！」

今にも襲いそうだった鬼の子は竈門君の声で急に我にかえったのか顔を背けた。

「どうしたのかな？」

「鬼の女の子はそっぽを向きました。不死川様に三度刺されていましたが目の前に血塗れの腕を突き出されも我慢して嘔まなかったです」

「ではこれで、禰豆子が人を襲わないことの証明ができたね。」

炭治郎、それでもまだ禰豆子の事を快く思わない者もいるだろうし証明しなければならぬ。これから。炭治郎と禰豆子が鬼殺隊として戦える事。役に立てる事。まずは十二鬼月を倒しておいで。そうしたら皆に認められる。炭治郎の言葉の重みが変わってくる」

そうして炭治郎の裁判については終わりを迎えたが、この後炭治郎が鬼舞辻を倒すと大声で宣言したがお館様がそれを無理と即否定したのが超面白かったのは内緒。

「さて、炭治郎の話はこれで終わり。下がっていいよ。そろそろ柱合会議を始めようか」
 その後は、炭治郎と禰豆子はまさかの蝶屋敷で治療することになった。：いやまあいいけど。

「さて、柱の新顔の毒露シノエ。皆に自己紹介をお願いするよ」

「御意」

お館様に言われ皆の前に出る。

「……この度、柱に抜擢されました。毒柱・毒露シノエ。ですが、僕が刃を振るう理由は二つ。胡蝶家をしのぶさんと共に守る事。もう一つは姉の仇を取る事。僕はしのぶさんと違い藤の花以外の生物由来の毒を使っています。一番身近のでは蜂でしょうか。：普通の毒は効かないと思われていると思いますが、しつかりと鬼を殺せる毒を僕は作りだしました。最後に一つ、任務とはいえ、しのぶさんに命の危機が迫った場合、迷わず僕はしのぶさんの命を取る」

そう宣言するとヒュウと口笛が聞こえてきた。

それは武蔵さんからで、馬鹿にされたように思つてムツとなつてしまつた。

「ありがとうシノエ。それじゃあ…次はヒナ」

「ですからお館様…」

「ああ、すまないね。武蔵。先代は元気にしているかな？」

「はい。あんのクソ親父は未だにピンピンしております。いい加減妻の1人でもとつて引退しろと言つてるのですがまだ現役だと言ひ張つてるので二天屋敷を出る際に一発蹴り飛ばしておきました」

「そうか。でも大事にするんだよ。唯一の肉親なんだからね。…それと、例の鬼はどうだい？何か、情報は掴めたかい？」

「十二鬼月の上弦の壺。初代が唯一引き分けた鬼ですか。正直、全く手がかりが掴めておりません。先代曰く、宮本武蔵の、私の実力が完全に熟したらあちら自ら私を襲ってくるということです、未だこないということは私がまだまだ未熟ということなのでしょう」

「先代を以てして完成と言われた君でなのか」

「私が無刀の道へと極められたら話は別でしょうがそれでは鬼の首を切れないという本末転倒になってしまいますので無刀への極みは将来の宮本武蔵へ任せるとしますよ」

「そうか」

その後は今後の方針などを決めて僕のはじめての柱合会議は終わった。

「蝶屋敷」

「へー。毒を」

「はい。鞘の中で調査をしているのもありますが刀身自体に毒が染み込んでいます。毒の液体に一年近く漬けてあります」

「長っ！」

柱合会議から数週間。言い渡された任務をしのぶさんと終えた後に蝶屋敷への帰還する途中で武蔵さん出会った。なんでも、暇になつてる予定だから久々に蝶屋敷へよりしたいとのこと。…? 暇になつてる予定ってどゆこと? というかさ心なしかしのぶさん怒ってる気がする。

「なので、ちよつとした雑魚鬼は首を切れなくとも、少し斬るだけで絶命します。さらに追い打ちで別の種類の毒を入れて仕舞えば余計に早く絶命します。毒っていうのは基本的に何か混ざればより強力になりますから。偶に中和されてしまいますが」

しのぶさんの藤の花の効力には遠く及ばないけど。あれはほんと即効性やばい。

「…あつ、着きましたよ武蔵さん。さあ、とりあえずご飯にしましょう」

「おっ！いいねしのぶう！私の扱いわかってきたじゃん！」

「それはそれは。次は食料食い尽くさないでくださいね？」

「…善処します」

まっつて、僕がない時なんだろうけど何があつたの。

食料食い尽くすて。

屋敷の中はうるさかった。特に一人の男の声が。

それを聞いた瞬間に武蔵さんは心当たりがあるのか心底めんどくさそうな顔になつてた。しのぶさんも珍しく怒つてた。

僕が何かを見てくるとお二人に伝え、食事の用意の方に行ってもらつた。

「うるさい…黙れ」

「うぎやあ！また誰かきた！」

「あつシノエさん！おかえりなさい！」

「ただいま。アオイ。……で、この黄色いのは？」

「薬が苦いと文句を言ってます」

「……わかつた。なんとかするからしのぶさん達のご飯の用意を手伝つて」

「わかりました!」

患者の世話をしていたアオイという子をこの部屋から離れさせる。

「……」

「ヒツ!?」

「…ねえ、それ以上、騒ぐなら、薬じゃなくて、毒にするよ?」

「怖いよ! 何毒にするよって!?」

「簡単だよ…薬っていうのはね、言い換えれば毒と表裏一体…。ちよつと、成分を弄れば、毒になる。簡単だよ…例えば君に与えられてるこの薬、この薬にちよつとだけこの液体を吹きかければ…」

「やめてくださいいわかりましたごめんなさい! しかも音的にあの宮本武蔵さんもいらつしやるよね! あー! やだ俺もう死んだわ!」

と、何かを叫んでやつと大人しくなった。…めんどくせえ。

「…で、他何か治療に文句あるやつは?」

他2人に問いかけるも帰ってきたのは首を横に振るといふものだった。

それを見て寝室を後にする。

「あ! シノエさんこちらです!」

「…今行く」

アオイに呼ばれて向かう。たどり着いた居間には食事が並べられていた。蝶屋敷にいる子達がみんな集結している。

…やつぱり、この時が一番いい。この幸せを壊すものは、誰であろうと許さない。特に叫びまくってるあの金髪。後で締め上げる。

「機能回復訓練？」

「はい。数日前から炭治郎君とあの猪の頭の人が始めています」

「…まあ、無理しないようにね」

アオイによると体のほぐし、反射神経を鍛える湯飲みの掛け合い、全身運動の鬼ごっこをやってるらしい。

他に相手してるしのぶさんの継子のカナヲが無双してるらしい。

「あー、ねえ、全集中の呼吸、四六時中やらせた？」

「？いえ、特に何も聞いておりません」

「あちゃー。それならあの子ら一生機能回復訓練から脱出できないよ」

武蔵さんがそうつげる。てか貴女、それ何杯目ですか。お米かなり炊いてたように見えたのは気のせいですか。10合くらい炊いていた米がもう2合しかありませんよ？

「…よしっ！明日からは私も参加するわ」

「それはそれは、また突然ですね」

「うん、よくよく思い出せばその3人に特訓を課すつてのを忘れてた」

「特訓？」

「ほら、アレよ。いつでも好きな時に寝首を搔きに来いってやつ」

「ああ」

…まつて、しのぶさんと武蔵さんの会話色々おかしい。何それ、好きな時に寝首を搔けて。

「あ、シノエもやってみる？簡単よ」

「…気が向いたら」

「うんうん。あ、しのぶもやる？」

「遠慮します。やるならカナヲをやってあげてください」

「はいよー。そんじやあ、今日の機能回復訓練はやった？」

「いえ、まだです。食後にやろうかと」

「それは好都合！そんじやあ…食べ終わったら行こっか！」

待つて武蔵さん。その前になんで米食い尽くせたの。貴女しかお代わりしてないですよね？

その後は武蔵さんに強引に機能回復訓練に連れてかれた。

「あつ！武蔵さん！武蔵さんもやるんですか？」

「うん、そうだよ。カナヲも私とやってみよつか。シノエも、ちよつと実力見てみたいしね」

「はい」「………はい」

まずは柔軟運動を徹底的に。竈門炭治郎と猪頭の人は痛すぎて泣いていた。

その間武蔵さんと反射神経訓練をやってみたんだが全敗。ありえないくらいこの人の反射神経ずば抜けてる。

その後の鬼ごっこも逃げる側になって全力出したのに一瞬で間合いを詰められた。明らかに一瞬脱力していたはずなのに。この人おかしい。しかも木刀を互いに使ってもやってみたのだがこの人の太刀筋も頭おかしい。

「はいつと。そんじゃあ次は…カナヲ、やってみよつか」

「はい。全力でやっついていいと師範に言われたので、全力でやります」

「うんうん。いいよいいよ。カナヲも木刀使おつか。私から一本取れたら甘味処連れてってあげるよ。もし失敗したらカナヲもこの2人と一緒に特訓しよつか」

「わかりました」

ねえ、武蔵さん。特訓はいいんですけど、竈門炭治郎、猪頭の人が怯えて震えています。
その辺で。

参・特訓？特別なことは何もb y武蔵

親父殿の振舞いが好きだった。

親父殿の笑顔が好きだった。

親父殿の刀を持つ姿が好きだった。

親父殿の言葉が好きだった。

親父殿の作ってくれる飯が好きだった。

親父殿が褒めてくれるのが好きだった。

親父殿に期待されてるのが嬉しかった。

親父殿が宮本武蔵の名を私に継がせてくれたのが何よりも嬉しかった。

そして

私の大好きな親父殿は死んだ。

あの日に。上弦の鬼複数と戦ったその日に。

カナヲとの機能回復訓練という名の勝負。湯のみと鬼ごっこで完封はできたけどいかんかなヲは感情の起伏がない。命のやり取りをする上ではそれはいいことだが悪いことでもある。

だから…

「おうおう。成長したねえカナヲ」

とりあえず褒める。撫でながら激しく褒める。まずは前向きな感情（この場合は嬉しいと言う感情）を自発的に出させてからだ。

「それに比べて…炭治郎！伊之助！那由多蜘蛛山で死闘したんじゃないの？成長してなさすぎるわよ」

まあそれは嘘だが。特に炭治郎は新しい戦闘方法？呼吸法？を身につけたのか相当技術に磨きがかかっている。でもこの子達の場合は、この子達の為にも甘やかさないほう

がいい。

「返す言葉もございませぬ…」

「…」

伊之助が黙りこくつてる。珍しい。もつと勢いとノリで次こそ勝つてやる！つて言
いそうなのに

「なんで私どころか柱でないカナヲに勝てないのか明日までにしつかり考えなさい。そ
したらきつと見えてくるはずよ。：最後に、炭治郎に助言。勝てない相手との違いをま
ずはハッキリと知りなさい。まずはそこからです」

「はいー」

さーて、そんなじゃあ私自身の特訓に皆を付き合わせるとしますか。

「はい武蔵さん。持つてきましたよー」

「いい時に来たねしのぶ。それじゃあ、はい。みんな一本ずつ持つて」

しのぶが持つてきたのは青竹。

竹の中でも一番硬い時期のものだ。

「…？今度は竹で試合するんですか？」

「まつさかー。みんなにはね、これを素手でささらにしてもらいます」

それを言うともんな固まった。え？何かおかしなこと言った？ちなみにささらって

のは竹とかをすんごい細かく割いたやつを束ねたもの。お茶を立てる時に使う道具に似てるわね。

「みなさん、これは武蔵さんがいつもやってる修行ですよ。かなりぶっ飛んだものですがいい機会ですからみなさんもやってみましょう」

「待ってしのぶ。これそんなぶっ飛んだもの?」

親父殿も伊織も岩柱の悲鳴嶼もできるんだけど。

「どんなもんか一回見せれば多分できるって思ってくれるよね?」

「まあ、どうやるかと言うと……こうやるの」

私は実演して見せるために竹を両手に持ち

思い切り素振りをした。

振った際の風圧、そして握力で竹を握りつぶし、ささらにする。

初代宮本武蔵もこの特訓をやっていたらしい。

親父殿曰く、握力と振る力、そして脱力。この三つが一番剣の道において重要だと言
う。

「ま、こんなものよ。私は二刀流だから両手でやったけど一本の子は片手でいいわよ。」

時間は…そうね、ひとまず制限時間は5時間。割れ目を入れるところから目指さない。ささらにできたら最高。できなくても振る瞬間に力を最大に込める感覚をつかめるわよ。休憩は…ささらにできた人からにしましょうかね」

ちなみにこれを聞いた善逸は失神しかけたらしい。

〔数時間後〕

「あらあら。誰もできませんでしたね。まあ当たり前なんですけど」

「そんなに難しいものかねえ。伊織の奴1回目で、しかも二本でやってのけたよ」

「伊織さんが特別すぎるんです」

「そう？でも私がやった時も4時間くらいで一本はできたよ？だからそんなに難しくな
いと思うけど」

シノエはどの口が、と言っていた。

ちなみにしのぶもどの口が、と思つてたらしい。かなすい。

「みなさん、できなくてもしょうがないです。これは尋常じゃない握力、腕力と刀を振る
う技術が必要です。武蔵さん一族がどれだけ規格外なのか一度その身に体験したほう
がいいでしょう」

「待って何させる気よ」

「単なる腕相撲ですよ。さあ、まずは炭治郎君からやってみましょう」

「は、はいー!」

まあ腕相撲くらい、いいか。

机を用意し、その上で炭治郎と右手で握り合う。

「では行きますよう……始め!」

「やつ!」「ふんつ!」

バギヤツ! (机が碎けた音)

確実にやりすぎたと思っただね、うん。

炭治郎腕を抑えてるもん。

しのぶちゃんに説教されました。とほほ…。

「竹をささらにする特訓はまたいつかに持ち越しとして、じゃあ次の特訓さね。ほい、今度は木刀。自分が普段扱うものを取ってちょうだいな。それにて協力して戦う能力を身につけましょう。私対全員で」

私対全員。

まあなんとかなるでしょう。

「全員呼吸使っていいわよ。私も遠慮なく使うし。誰でもいい。どんな手を使ってもいい。一発私に当てなさい。もしみんなが勝てたら私による甘味処での奢り。時間は：そうね。夕餉の時間まではやってみましようかね」

「まあ、妥当ですね。新人の子は協力しての戦いも学べますし、武蔵さんにとつても鍛えられるから良いですね」

「そゆこと。手加減とかそんな器用な真似できないから怪我増えるかもだけど許してね」

刀を持つようになって親父殿に初めてやってもらった特訓。やっぱりこの特訓が一番好きだ。

何も考えず、ただ刀を振るう。

他の何も考えず、敵のことだけを考える。

何をどうすれば斬れるか。どうすれば倒せるか。殺せるか。

今回はどうすれば戦闘不能になるかだが。

「ん、5時間経ったか。終了!」

「はい、それじゃあ少し遅いけれど夕餉にしましょうね」

「そうしましょう!あー腹減った!」

「はあ…はあ。なんだか、柱になれた自信が粉々に砕けた気がします…」

「…やつぱり、俺弱い…」

「どんな風に特訓してるんだ…俺もなりたいな…」

「……」

「皆さん、私からアドバイスです。武蔵さんと皆さんは純粋な剣技ならば天と地ほどの差があります。皆さんと武蔵さん、何が違うのかを考え、それを踏まえてこれからの特訓もやりましょうね」

「剣技だけだと思われたら心外だわ。私の武芸百般をナメちゃダメよ」

さてと、今日の夕餉は…匂的に牛鍋ですか!いいね!

「あ、悔しい人はいつでも再戦やってあげるからね」

シノエとカナヲがあの後に再戦申し込んできました。

あの?というかしのぶさん?何でそんなに怒ってらっしゃる?

え?患者への扱いが雑すぎる?いえいえコレでも死ぬ限界ギリギリは知ってるからそれを超えないようにちゃんと…アツハイ。正座ですわかりました。

「あの、武蔵さん」

夕餉としのぶの説教が終わったあと縁側で瞑想をしていると炭治郎君から話しかけられた。

別に話しかけられた程度で乱れるほど未熟でもないから普通に受け答える。

「どったの」

「その、特訓が終わった後に考えたんです。俺と皆さんで何が違うのか。思いついたのが一つあって。個人的に気になったことでもあるんですけど、武蔵さんが那由多蜘蛛山に入る前に言ってた言葉って何ですか？」

「言葉？」

「はい。確か…いっとうさんはい…」

「一刀三拝。修練の果てに無限に至る？」

「はい！それです！」

「別に大した意味はないわよ。私の反復動作のようなものよ」

「反復動作？」

「そう。海の外の国だとルーティーンとかって言ったかしら？決まった所作をして、決

まった動きをする。そうすれば動きというのはより洗練され、繊細になる。その繊細さをより底上げするためのものよ。何もそれは体の動きだけじゃない。私の場合には任務の：要は命を奪うのだからこちらでも奪われる覚悟をしないとさえいいかしらね。それと同時に、『必ず生き残る』という決意を胸に抱いてる」

「必ず…生き残る」

「そう、必ず生き残る。鬼を自分の命と引き換えにでも滅殺するという決意なんて私は生まれてこの方一度もしたことない。私の大切な人が悲しんで欲しくないから、自分が生き残るための決意を新たにするの。」

私の戦闘方法はね、言い換えれば鬼を滅殺するというのは前提なの。その前提で、必ず生き残る為の戦闘法。

さて炭治郎君に聞きましょう。夜に鬼と会ったら、どうする?」

「…斬ります」

「じゃあそれが1人だと絶対に勝てない相手だったら?逃げようと思えば逃げれる相手だとするね」

「それでも、命の続く限り俺は剣を振ります。逃げるときつと罪のない人々が殺されます。それが俺の命一つで助かるのなら俺は鬼と戦います。戦いの中でも成長をします!」

いい子だなあ。私みたいな卑怯者とは違う。

「まあそれも一つの回答だね。では炭治郎君に聞こう。鬼を殺すための手段は？」

「日輪刀で首を斬ることです」

「もう一つは？」

「それは日光に……あつ」

「そう、それよ。鬼殺隊のみんな剣で首を斬ることに執着しすぎなのよ。言い換えればそれは柱も同じこと。なんで首を斬る以外の方法を取ろうとしないのか。首を斬れる実力があるのに日光が出るまで時間を稼ぐのは愚策なのはわかる。でも相手の実力が上だと分かったら首を斬る。または日光が出てくるまでの時間を稼ぐかの二つの手段を取れるようになったほうがいいと思うのよ。そりゃあ簡単にはいかないだろうけど日光に当てることでできれば首を斬れる斬れない関係ない。

実際に剣で首を斬れない、実力に天と地ほどの差はないけれど絶対に勝てない。増援も呼べない。でもここで逃げたら大勢の命が失われる場面に遭遇したとする。

なら炭治郎はどうする？」

炭治郎は少しだけ考えてすぐに答えてくれた。

「俺は…それでも戦います。罪のない人々を守るために」

「うん、まあ悪くない答えね。私としても好きな答えよ。でもね、私は思うの。もし仮に戦いを選んで、その最中に成長できたとして、その後鬼に勝てたとして自分の命までも喪つたら、それは私からすれば単なる無駄な、勿体ない行為としか思えない。もし生き残っていたのなら多くの人の命を救える。

でも逃げたら本末転倒になる。ならどうすればいいか。

私の出した答えは朝日が出るまで粘ればいい。それに粘れば粘るだけ増援を呼べる可能性も出てくる。朝日が近づいてくれば鬼は絶対に焦って私を殺そうとしてくる。もしくは逃げて日陰へ移動しようとする。そうすれば動きがとて読みやすくなる。十二鬼月も下弦だったけどそれは同じだった。

良いこととしては朝日が近づけば首を斬るか日光に当てるかの、勝つための手段が二つに増える。鬼は夜中だと自由に動けるけど朝日が近づけば戦える場所が制限される。日光のことも注意しなきゃいけない。そうすればいくら相手が自力で自分より上だとしても勝機は格段に上がる。

今の炭治郎が十二鬼月の、特に上弦の鬼たちと単独で戦えばそんな芸当はできないと思うわ。でも下弦の鬼たち相手なら出来るかもしれない」

炭治郎は真剣に聞いてくれている。あーもう、いい子！マジで伊織の許婚で持つて

帰ろうかしら。

(5代目、奉行所へ行きましょう。大丈夫です、できる限り刑が軽くなるよう私も頑張ります)

アカン、人攫いで訴えられる未来が見えた。

「炭治郎、軽く胸の中にしまっておきなさい。勝つための手段を磨くのはとても大切なことです。でもね、確実に生き残るための技術も身につけた方がいいわよ。臆病と言われようが関係ないわ。臆病さは生き残るための大切なことです。世の中、生き残ったもん勝ちなのだから。

最後に助言。もし今、どうすればいいのか分からないのなら、基礎からみっちりやってみなさい。それと自分の成長に必要なだと思つたことは妥協しちやダメ。恥をかこうが、痛い目にあおうが、必要だと思つたことを、思つたその瞬間から実行しなさい。そうすれば…カナヲにもきつと勝てるわよ」

「……はい！」

炭治郎にもいいこと言つたし、さつきからうずうずしてるお二方の相手をしますか。

「終了!いやあ中々やるわね。あーとうとうやられた!やつば息が合ってるわね。それに毒の呼吸法もなかなか面白かったわ。こりや私もウカウカしてられませんかあ」

「はあ…はあ。よく…言いますね。初見のものを悉く避けておいて」

「そりや、毒の呼吸って花と蟲の複合技みたいなものでしょ?私はどっちも知ってるし似てるものもあつたから避けられたようなものよ。後はカン。それにしても、シノエはまるでしのぶの生き写しだね。戦い方がすごい繊細で速くて綺麗よ」

「そう言ってもらえると…僕としては嬉しい限りです」

「うんうん。毒を使った鬼狩りの方法もしのぶとは別方向で洗練されててよかつたわよ」

特に蜂ノ型とか荒々しくて私的には大好きな技でした。

蠍とらうノ型とかも中々でした。真似できそうなどころがたくさんあり私的にもいい特訓でした。

百足ノ型はちよつと怖い。

「カナヲはもう少し自分の意思を示すのを覚えよつか。途中何回かカナヲが斬りこめそうな場面あつたわよ」

「はい」

そう伝えるもカナヲは無表情に近い笑みのままで頷く。うーむ、好きな人とかできたら変わりそうだけど。その辺は胡蝶家の皆さんに任せましょうか。
さて、もう一回道場いきますか。

（次の日）

朝餉を終えた炭治郎、善逸、伊之助は道場に足を運んでいた。

シノエとしのぶはそれぞれ任務に出かけている。

3人は機能回復訓練のために道場に向かつてるのだが…しのぶが伝え忘れたことが一つ。

武蔵が1人で特訓してる時に近くに寄らない方がいいということ。

「あれ、武蔵さんもういるね。早起きだなあ。…あれ？怒りと憎しみの匂い？」

「え、なんか俺たちやらかしたっけ？」

「だーはっは！今日こそ昨日の雪辱晴らしてやる！」

三人が色々なことを思いながら道場の入り口を開ける。

それをみたアオイが見つけて慌てて向かってきてきているがもう遅かった。

「みなさん待つて…」

「武蔵さん!おはよ…」

「二天の呼吸・伍ノ型『狂乱』」

扉を開けた瞬間全員が感じたのは『斬り伏せられた』という感覚。実際に斬られていない筈なのに袈裟斬りにされたような痛みが全員に走った。特に一番近くにいた炭治郎、善逸、伊之助はその場に倒れた。

武蔵の周りにはどこから持ってきたのか大岩、大木が所狭しと並べられており、それらを道場内を暴れるように動きながらひたすらに斬っていた。

「式ノ型『穿ち裂き』」

しばらく暴れまわった後に武蔵は何もないところに突き技を繰り出し、そこから力の向きを変え左右に空気を切り裂いた。

だがアオイはハッキリと鬼のようなものの首が斬られたのが分かった。

「…空とは即ち、無の観念。無念無想すら断ち切らん…。…はあ、つつかれたー」
そしてその場に倒れこんだ。

「あらみんな。もう機能回復訓練？てか、なんで寝てんの」

「みなさんが武蔵さんの修行を見た瞬間に何故か…気絶しちゃって」

「……あー」

「私も武蔵さんの剣技を見た時、こう、左肩から袈裟斬りにされたような感じがして、実際斬られてないはずなのに、とても痛かったんです。後は何も無いところに突き技したはずなのに鬼の首を斬ったように見えちゃって」

アオイちゃんの言葉を聞いて思い当たる節しかない。伍ノ型と弍ノ型を見たか。よりによって一番最悪なものを見てしまったなあ。

「袈裟斬りされたように感じたところに関してはちゃんと医者に診てもらった方がいいわよ」

「え？でも傷とかは特に…」

「まあ外傷は無いかもだけど一応念の為ね。だからこの三人も今日の機能回復訓練はやめといった方がいいよ」

「は、はい。わかりました。でも、なんで私達がこんな感覚になったんですか？」

「うーん。まず最初に言っておくけど突拍子ないわよ？理屈だと結構簡単な話なんだけ

ど信用しない人が多いのよ。そうねえ…はい、アオイ。この中には何が入ってるか想像して答えてみて」

私は刀を納刀している鞘を見せる。

「え? 日輪刀では?」

「正解。じゃあこれは何をするもの? これも想像しながら答えてね」

今度はお金を見せる。

「買いい物をするものですよ」

「はい、じゃあ最後の質問。私達が使ってる呼吸法。アレは何をするためのもの? こっちも前二つと同じく想像しながらね」

「鬼を斬る為のものです」

「うん正解。それじゃ答え合わせと行こうか。アオイ達を感じたのはさっきのと一緒。何をするためのものかを決まり切ってるものを見たときに脳が無意識のうちになんかできるかを判断するように、私の剣技を見て、斬り伏せられたと体が、脳が、勝手にそう判断してるのよ。そうね…ちよつとごめんね。アオイ、私は絶対に仲間を傷つけないから、信じてね?」

「?」

私は大太刀を抜刀すると同時にアオイの横に振り下ろす。アオイは思わず横に飛び

退いた。

「な、なにするんですか!」

「ね? 私に斬られないとわかつていても斬られると思つて飛び退いたでしょ? それの究極系みたいなものよ。加えていうなら、私の呼吸法、正確には初代宮本武蔵が編み出した呼吸法はね、鬼を斬る為のものじゃなく敵を斬り伏せる呼吸法。敵が動物だろ? 人間だろ? が鬼だろ? が関係ない。自らの前に立ちふさがる相手を斬る為のものなの。だからみんな鮮明に感じたんでしょ? ね。いやあ、でも恥ずかしいねえ。一番見られたくない型を見られちゃった」

「見られたくない型?」

「うん、私らしくもなく、激情に身を任せる型なの。まあ: 任務では基本使わないから心配しなくてもこれで斬られる隊員はいないわよ」

余談だが、アオイが後に炭治郎達に話したら三人揃つて「なんじゃそりや」と言つたらしい。

ちなみに、お館様の前で全員が炭治郎に向かつて騒いだ時に黙らせたものさつきのを使つてます。

ていうか……ハラヘツタ! 朝餉じゃー!

あと伊織から早く帰つて来いって文が来たからそろそろ帰らないとマジで怒られそ

う。

肆・一番すごいと思う生物は蟻ですbyシノエ

「……シノエ、それはどうしたんですか？」

「任務で…拾いました」

「鬼がいるという山へ向かったはずでは？」

「そうなんですけど……なんででしょうね。鬼に託されました。…普通の子です」

「はあ…仕方ありません。今日1日は蝶屋敷に置いておきましょう。明日にでも寺小屋に預けましょう」

「はい。お手数をおかけします」

「で…なぜ拾ったんですか？」

「それは…」

さてしのぶさんにしかめっ面で怒られています。まあ僕の持つて帰ったものを見るとそうなるよね。

うん、勝手なことをしたのはわかっています。

「数日前」

「……」

任務を言い渡されたどり着いた場所は普通の名前もない山。周囲に住んでる人からは子育て山と呼ばれてる場所。名前が名前だが、まあ今は気にしない。何やら、子が生まれたらここの空気を吸わせると健康に育つって言い伝えがあるらしく、生まれたらここに来るらしいのだが最近人が失踪してるらしい。最初の始まりは何気無い親子。母親が産まれたばかりの子供を連れて行ったら帰ってこなくなった。それを探索する為に様々な人が入るも全員帰ってこなかったらしい。

癸などの鬼殺隊員も十人ほど入ったが誰も帰ってこなかったと。

「……」

嫌な空気だ。何となくとしか感じないけど嫌な空気なのはわかる。

「行こうか。早く終わらせてしのぶさんのところに……」

山の中に入るとまず感じたのはやたら静か。生物が何もいない。

動物ならまだしも虫すらない。

ひとまず登るしかないか。

「……また来たね。はあ……戦いたく、ないんだけど」

山の中にいる鬼。限りなく人に近い見た目。違うのは眼の瞳孔くらいか。瞳に刻まれるは、下壺。

「大丈夫。今回も誰にも手出しはさせないから。安心して」

鬼は傍にいるモノを撫でる。その手は、慈愛に満ちていた。まるで母のような。

「……人か、でも強い……？柱、かな？でも関係ない。柱でも何でも……ここに入る輩は、許さない」

「……変な、感じだな……。十二鬼月なら……手下鬼の一匹や二匹……居てもいいけど」
しばらく歩き回るも本当に何も居ない。

動物はまだしも鬼の一匹すら見ない。

……警戒を強めよう。

「やあ、こんな夜更けに何の用だい？」

「…すぐに出てくるとは思わなかったよ」

突然物音がしたと思うと堂々と前からソレは現れた。

坊主に近い短髪で、普通の着物を着てて見た目はほぼ人間。

それに雰囲気もほとんど人間と同じだけどあれは鬼だ。こんな鬼もいるのか。

それに、左眼に刻まれてる文字。下壺の文字に…バツ印？

「…十二鬼月か」

「違うよ。僕はもう数字は剥奪されてる。…もう下壺だったのは数ヶ月前まで。無惨様にお願いでこれだけの処置に留めてもらえてるんだ。…で、お前は鬼狩りだね。それも…今まで返り討ちにしてやった奴らとは違う。…柱だね」

「……」

「無視かい？まあいい。…この山に踏み入る者は、誰であろうと許さない」

「毒の呼吸…とうろう蠟螂ノ型・大蠟螂」

刀の柄を握り、すぐに斬りかかる。

が、避けられた。

…めんどくさいな。

「ねえ、一つ提案があるんだけど…聞く気は」

「毒の呼吸…ムカデ蜈蚣ノ型・トビズムカデ」

地面を這うように動き、首を狙って突きを繰り出す。が、それも避けられる。……？
何か変だな。よくわからないけど…変な感じがする。

「少しは話を聞きなよ。別に僕は誰彼構わず殺そうなんてそんなつもりはない。というか、できるのなら殺したくないんだよ」

「……」

敵意が一切向けられない。…調子狂うな。

…竈門少年の前例もあるし、ここは受け入れたほうが…いいか？

「鬼狩りを殺したのは、あいつらは人の話を聞かずに殺しにきたからだよ。僕は、危害を加えないのなら殺しはしない」

果てしなく謎だ。なんでこんなにも。…まあ、元々十二鬼月な時点で多少生かすのは…決まってたし、いいか…。

「…いいよ。で…提案って？」

「うん。聞いてくれて嬉しいよ。提案は二つだけ。一つこの山から帰って欲しい。勿論タダではやらない。何か…そうだね。無惨様以外のことなら、答えてあげるよ」

「…二つの扇を持つてる鬼を、知ってるか。柱を狩ることができるから多分上弦の鬼だ。僕は…そいつを探してる」

「扇？…悪いけど知らないな。僕があつたことあるのは上弦の陸ろくだけ」

「あつそう…。じゃあ、なんでこの山を守ってる。それに…鬼殺隊以外の、普通の人たちはどうした」

「ああ…その人達なら帰ってもらってるよ。僕は人間の味はあまり好きじゃないから好き好んで人間を狩ってる訳じゃない。それにこの山を守ってるのはね…ちよつと訳ありなのさ。ふふ、興味があるならついてくるといい」

「……」

日輪刀を納刀しこちらを微塵も軽快しない元下弦の壺の鬼の後ろをついていく。

…ほんと調子狂うな。

「……こ、やたら生物いないけど、なんで？」

「ああ、僕の食料にしてたら気づいたらなくなつた。虫とか大変だつたよ」

「……」

そういうことね。…鬼のくせに人間の味が嫌いつて…変な鬼だ。

「はい。……だよ。はいはい…ちよつと待とうね。すぐご飯にするから」

「…なんじゃこりゃ」

山の深い所に来るとそこは……まあ、うん。凄いいことになっていた。

そこにいたのは人間の赤ん坊。それと布団とか……まあ、幼子を育てるための物が満載だった。

……え、なにこれ。孤児院？

「はいはい。ちよつと待ちな。……はい、ゆつくり食べな」

元下弦の壺は慣れた手つきで離乳食……の様なものを食べさせている。

「……それ、育てるだけ育てて喰べる気じゃ……」

「だーかーらー、人間の味が苦手なんだって。それに喰べるつもりなら育てるなんて面倒な真似しないよ」

「……あ、そう」

「この子はね、親が死んでるんだ。僕が数字を剥奪された後にこの山に住み着いてしばらくした時、母娘が来たんだ。別に僕を殺しに来たわけじゃないから放っておいたんだけど母親が猪に襲われちゃってね。それを思わず助けちゃったんだけどその時に『この子をどうかよろしくお願いします』って頼まれちゃってね。……正直気は進まなかつたけど母親の方、それを言つて力尽きちゃってね。ひとまずは……どうせこの子達を探しに人間が来るだろうからその時に引き取つてもらおうと思つてただけど、どうやらこの子がいいた村は全員そんな余裕はないみたいでね。でも押し付けるのは……つて事で色々物

資を提供してもらってんの。それが…何が起こったのかは知らないけど何故か誰も帰ってこないという噂になり大規模な山狩りが行われてね、幼子を守る為に返り討ちにしたら今度は鬼殺隊。はーあ、嫌になっちゃうよ」

…よく喋る鬼だ。相容れないな。

「さてと、もう一つの提案なんだけどね。この幼子を引き取って欲しいんだ」

「…は？」

「柱ならそこそこ裕福だろう？だから…」

「断る。めんどくさい」

「じゃあ無理矢理にでも言うことを聞かせるよ。この子を引き取ってくれると約束してくれるまでね」

「……」

突然敵意を剥き出しにしてきた。それに対応する様に後ろに大きく跳び、日輪刀を抜刀する。

でも…なぜだ。殺意は一切ない。

「いくよお…血鬼術はないけど…そこそこ強いからねえ」

「ああ…そうかい」

ゆつくりと力を込め、獲物を待つ。

鬼はゆつくりとこつちに歩いてくる。

…集中を、しろ。隙を見逃すな。

「……いくよおー！」

「毒の呼吸…蜘蛛ノ型・大欄蜘蛛」
オオツチグモ

間合いに入った瞬間に飛びつく。まずは前から日輪刀を突き刺す。避けられるが関係ない。左手に隠し持っていた小刀でさらに追い打ちをかける。日輪刀を投げ捨て右手でも小刀を持ち、まずは脚で鬼の体を挟み、さらに両腕で抱きつく様にして小刀を背中に突き立てる。

鬼は驚き戸惑っていたがもう遅い。小刀の柄を思い切り押し込み毒を注入する。体細胞を溶かすタイプの毒だ。溶かした上でそこから更に毒を入れる。

暴れられたから一旦飛び退く。

日輪刀の方に飛び退き、刀を拾う。

「はあ、はあ…驚いたよ。まさか毒を扱う剣士とは…」

「毒の呼吸…蜂ノ型・大雀蜂」
オオスズメバチ

間髪入れず日輪刀で斬りつける。多少動きが鈍くなり斬りつけることができた。

「…うん？慣れたかな？毒、弱いんじゃない？」

そう言うてはいるが、まあ想定内だ。この刀に染み込んでる毒は、そこいらの雑魚鬼

も一回斬る程度じゃ死なないから、まあそう言う反応されるだろうね。でも…

蜂ノ型は、これで終わりじゃない。

「…ふっ！」

更に追撃をする。何度も何度も、斬りつける。首なんてものは狙わない。ただ毒を入れることだけに集中する。

2回、3回、4回……十数回斬った辺りで一度距離をとる。

…これだけやればいくら元下弦の壱とはいえ効いてくるはず。

「はあ…本当に…めんどくさい人だね。首は斬らないのかい？」

「…必要、ない。もう…お前は、終わりだ」

「…?」

「知ってる…? 蜂に何度か刺されたらね…3回目を超えた辺りで死ぬ可能性が人にはあるんだ。確か…アナフィラキシーショックって言ったかな。鬼の体の構成は…人間とほぼ同じだ。僕の刀で一回斬りつければ大雀蜂っていう最大種の蜂の毒を更に強力にしたものに5回くらい刺されたのと同じだ。…さて、君は何回、刺されたかな？」

それを聞いても鬼は余裕の笑みを崩さない。…まあ、遅効性の毒にしたから…仕方ないか。

こつちに笑みを浮かべながらあるいてきて、二歩目あたりで鬼の体が傾いた。

やつとか。下弦の壺相手でこれだけ毒を入れないとダメか。…やつぱりしのぶさんの毒はすごい。

「どう？ 苦しいよね…。中毒を無理矢理引き起こしてるんだ…。普通の鬼ならもう死んでるんだけど…。君もいずれ死ぬだろうし、可哀想だから首を斬っておこうか。できるだけ苦しめない様にね」

「ははっ…。それはありがたい。もう鬼でいることにも…。つかれたからね、…。じゃあ、柱よ。鬼殺隊よ。あの幼子を…。頼むぞ」

「……あ」

そういえばそんなこと言ってた気がする。やつぱり忘れてた。どしよ。

「ふふ…。僕の血鬼術はね、軽い催眠みたいなものだよ。永らく人を喰ってないから威力は全盛期と比べて蚊ほどだけど…。認識をごまかすことくらいは…。できるのさ。…あの子を、頼むよ」

ああ、そうですね。血鬼術にかかってたんですね。それならしょうがない。うん。僕は悪くない。

首を斬られる時まで笑みを浮かべながら元下弦の壺の鬼は死んでいった。

…。鬼を斬ってこんなに罪悪感があるのは何でだ。

というよりも、殺した、というよりはわざと殺された様に感じる。

……わからん。

いや、前向きに考えよう。下弦の壺相手にも毒が通じるのがわかった。でも蜂ノ型でも相当時間がかかったから毒を要改良だ。

藤の花に頼るのは…最終手段。

「…さて、どうしよう。この子供…」

鬼はもう死んだし、このまま放っておけば確実に死ぬ。………しのぶさんに相談するか…。

くそして冒頭に至るく

「…というわけでして」

「なるほど…。それで引き取ってきたと」

「後味が…悪いので」

「まあそういうのもシノエらしいです。では…そうですね。アオイに任せましょうか」

「わかりました。では…」

「しのぶ！悪いけどしばらく居させて！あんのクソ親父！ほんつと許さ……」

突然大声で入ってきたのは武蔵さん。いつものちよつと派手な格好をしてる。

んで僕たちを見て一瞬固まっていた。

「え、あー、うん、その……おめでとさん！」

「待つてください武蔵さん。今何を思いました？」

「いや別にいい？ただようやく二人とも……私より大人になったなあ、と。ほれほれ、いつものまに仕込んでたんだい？その子の幼さ的にかなり最近でしょお？ほれほれ」

「いえこの子は違いますよ。しのぶさんも何か言つて……」

武蔵さんが何かを思ったのかすごい茶化してきたから慌てて否定する。しのぶさんにも求めようとしのぶさんの方を向くとすごい顔赤くしてた。

何これ可愛い。

「えっ、その……シノエくんとの……その……」

「武蔵さん、しのぶさんが可愛すぎて僕やばいです」

「わかる。しかも自分の世界に入っちゃってるから余計可愛いわ」

「しのぶさん……戻ってきてください」

「ハッ!?？」

「はっはっは。しのぶう、君もなかなか可愛いねえ」

「もう……やめてください。」

…それはそうと、武蔵さんどうしたんですか？二天屋敷に帰ったのでは？」

「あー！そうよ！あんのクソ親父に腹立ったので家出して来ました！てことでしばらくここに居させてくださいな！ちゃんと働きますので！」

「…それはまた。でしたら炎屋敷に行ったらよろしかったのでは？あちらにはあなたの…」

「わーわー！それ以上言わないで！」

……？

「まあいいでしょう。ですが…まだ機能回復訓練をしてる子達いるので変なことをしないでくださいね。この間は道場をめちゃくちゃにしたと聞いてます」

「う……善処します」

伍・才能の差を見せつけられましたbyしのぶ

「あら、しのぶから手合わせを望むとは珍しい」

「はい。偶にはやってみるのもいいと思ひまして」

家出をしたという武蔵さんを捕まえて手合わせを申し込んでみる。

「武蔵さん：鉄製の扇を扱う鬼と戦ったことが、あるんでしたよね？」

「えー？まあ、うん。あるわよ。それがどうかした？」

「：今から、本気で私はあなたに挑みます。ですので：正直な感想を言ってください。私でその鬼に勝てるかどうか」

「あー、そゆこと」

何かを悟ったのか武蔵さんは頭をくしゃくしゃとかいた。：相変わらず綺麗な髪をしている。が、本人が何も気にしていないのか時々ボサボサになってるのは本当にもつたいたいと思う。

「構わないわよ。でも本当のこと言えばいいの？」

「はい。お願いします」

「でもね、もしそれで勝てないって判断になったらしのぶが相討ち覚悟で他の誰にも相

談せず、みたいなことになりそうだから悪いけど私は何も言わないわよ?」

「……。何故ですか」

「そりゃあ死んでほしくないからよ。私はしのぶを死なせる為に……しのぶの自己満足のために試合をするなんて真っ平御免よ」

……全てを見透かされたらこうも居心地が悪くなるものなのだろうか。

「別に仇討ちが悪いとは言わないわ。憎^そしみ^いの感情^のは人の原動力に違いないもの。でもね……しのぶ。貴女みたいなね、自分の命に代えても、っていう考えが私は死ぬほど嫌いなよ」

「……あ」

「ん?」

「じゃあどうしろって言うんですか! 私は……私は!」

武蔵さんの言い分に思わず感情的に叫んでしまう。

家族のことが……カナエ姉さんのことを思い出して。

それ以上に理不尽な怒りを武蔵さんにぶつけてしまったのもわかっている。あの時……死ぬギリギリで助けてくれたのも武蔵さんだったから。

「…カナエのことは悪いと思ってるわ。でもね、自分の命と引き換えなんて考え、早々に捨てたほうがいいわよ。でないと…直ぐにしのぶもカナエの後を追うことになるわよ」

「っ！」

最後の言葉で思わず突きを繰り出してしまふ。

怒りのまま、武蔵さんの首めがけて……

「危ないわねえ。話を聞きなさいよ。…侮辱をしてるわけじゃないわよ。私はね、復讐に身を燃やした人間を、鬼殺隊の人間を何人も見てきてるから。しのぶが心配でならないのよ。あんた…シノエにも隠してるでしょ？死ぬ気にいるのを。私のことすら隠してたのがいい証拠よ」

「……だからなんですか」

「私ね、そーいう人に時間はあんまりかけたくないのよ。人間なんていつかは死ぬつてのに自分からそこに向かって進むような人、ほんつとうに嫌いなものよ。」

「……ま、いいわ。しのぶの望み通り試合してあげようじゃない。そーねえ……。アイツを真似するのほんつと嫌だけど……しのぶ、ここ扇ある？」

「え？あります？」

「それ二つ用意してちょうだいな。…何をするかは、わかるでしょ？」

それを聞いた私は何をしようとしてるのか理解をしなくなかった。

「うー…あんな変態の真似…思い出したくもないけど…背に腹はかえられん。……」

扇に硬い木の板を貼って強度を力サ増したものを持ちながら武蔵さんは延々と唸っている。嫌ならばやらなければいいのにと思ったが武蔵さんがわざわざやってくれるというのだからここは素直に甘えよう。

「……よし。それじゃあ…しのぶ。やろつか」

「はい」

蝶屋敷から離れた、あたり一带に何も無い場所で武蔵さんと向き合う。

次の瞬間に武蔵さんの顔が、なんとというか無機質な？笑みになった。

「こんなかんじ…かな。やあやあ！いつでもかかってきなよ！」

「蟲の呼吸…」

「二天の呼吸…」

「うんうん！いい攻撃だったよ！とても速い！……で、そろそろやめてもいい？この真

似、もうやりたくない」

「はあ、はあ……え、ええ……。私の……まけ、です……」

結果として、私は攻撃をかすらせることどころか、息を切らせることすらできなかった。

どうしてもものりくらりと躲され、時々砂埃を巻き上げられ扇で圧された。

斬られた、ではなく圧された。普段の武器を使わないだけでなくこちらを気遣うという余裕ぶり。

嗚呼、本当にこの人の才能は羨ましい。私もこの人のように体術、技術、力が秀でたら。

「これ、扇使いの鬼の戦い方を私なりにアレンジしてるからあまり参考にしないほうがいいわよ。血鬼術は砂埃で代用したけど。はーあーマジで！あの変態の真似なんてもう二度としない！かーペっ！」

武蔵さんはまだ先代と共に活動をしていた頃に上弦の式・肆・伍の三体と纏めて戦ったことがあるというが……それでも五体満足で生きているということはそれだけ武蔵さんが強いということなのだろう。

「はいしのぶ、大丈夫？」

「え、ええ……けほっ」

「砂埃吸った？ならちやんと治療しなよ？」

「…武蔵さん、教えてください。私は…扇を使う鬼に…上弦の鬼に勝てますか？」
「……」

武蔵さんに肩を貸してもらい蝶屋敷へ帰る途中で聞いてみるも武蔵さんは口を閉ざす。

「…相打ち覚悟なんて、もうしませんから教えてくれませんか？」

「ほんとに？」

「本当です」

けどそれでも武蔵さんは渋る。…そんなに信用がないんですかね。

初対面で偽りの笑顔なことも見抜かれてますし。武蔵さんは相手の心情を読み取るのが上手いのかしら。

「結論から言うと、しのぶ一人だと絶対に無理。でもそもそも話、上弦の鬼…特に弐。こいつに関しては柱が一人で勝てる相手じゃない。柱複数人でようやくやく対等。だから、しのぶが無理なんじゃない。一人で勝つのは今の柱全員にとつて無理。まああり得るとしたら岩柱、風柱くらいじゃない？上弦の鬼とやりあうなら最低でも柱二人だと思っただ方がいい。はい、これで満足した？」

「…ええ」

つまりは、私一人では絶対に復讐は果たせないという事。

「何でもかんでも一人で背負い混みすぎてるのよしのぶは。シノエとか、他の柱達、隊員達も頼りなさいよ。私はね、もうこれ以上仲間が死ぬのを聞きたくないわよ」

それはカナエ姉さんのことを言ってるのだろうか。

……そういえば、姉さんとの会話をほとんど聞いたことがない。武蔵さんは姉さんとどんな風に会話をしていたんだろう。

「いった……」

「大丈夫？」

まさか自分の屋敷で治療される日が来るとは。

「そういえば……武蔵さん、なぜ家出を？」

「親父殿に腹が立ったから」

「何故腹が立ったのですか？」

「……」

「あらあら、私のことはあんなに言っておいて自分のことは何も言ってくれないんですね。屋敷に置いてあげてるんですから教えてくれないですか？」

「……」

「そんなにだんまりなら煉獄さん呼びましょうかね」

「だーわかった！わかったから！」

相変わらず煉獄さん呼び出されるのには弱いらしい。

さつきまでの他人に優しい態度が嘘のように顔を赤らめながら武蔵さんは叫んだ。

「……。親父殿、しのぶも見たことあるでしょ？」

「ええ。何度かこの屋敷にも来られたのを見たことあります。すごい上背があつた方ですよね」

「そ。6尺（180センチ）くらいあるの。…今は二天屋敷で引きこもってんだけどね、こないだ屋敷に帰った時に親父殿、まーた酒飲みまくっててね。まあそれはいつも通りだからいいんだけど。あのクソ親父、未だに自分の腕と左眼を斬った鬼を…讚えてんのよ。それがどーにも腹立たしくてね。まあわかるわよ。自分より強い相手を讚えたくなるのは。でも親父殿の腹立つのは自分で越えようとしなのよ。ゼー…んぶ、私に任せ！とか言いながら…」

それから武蔵さんの愚痴がかなり続いた。しかし武蔵さんはよほどお父さんのことが大好きなのがわかったただけでも良しとしましょう。

それを指摘したらすごい赤面したのも珍しかったですね。

翌朝、武蔵さんはもう山に修行に向かったらしい。

どうやら1日山籠りをしてくるらしい。置き手紙にそう書いてあった。

さて…今日は伊織さんが薬を取りに来るそうですから準備をしないと。

「そういえば炭治郎君達の方は機能回復訓練はどうなってるんですかね。順調ならいいんですけど。」

「すいませーん。 蟲柱さん。 7代目の薬をもらいにきましたー」

「はーい」

噂をすればなんとやら。伊織さんが到着した。

「ご無沙汰します、しのぶさん。本当は8代目が受け取る所を申し訳ありません」

「いえいえ。家出した経緯も聞いてますので。それで…7代目はお元気ですか？」

「はい。腕がないなら足で持てばいいじゃねえか、とか口で持てばいいじゃねえか、とか意味不明なことを言ってますよ」

「あらあら」

相変わらず規格外な方だ。注射器の針が筋肉がありすぎて通らないとかいう凄いなだった。

「まあ伊織さんも相当ですけどね」

「私は生まれつき筋肉がつきやすい体質だったので。7代目は全部努力ですよ。私には真似できません」

「頑張れ俺！」

世間話をしながら薬を梱包していると庭からそんな声が聞こえる。

「…あの声は？」

「多分竈門炭治郎君ですね」

「ああ、あの鬼を連れた隊員ですね。8代目から聞いてます。なんでも鬼がとても可愛らしい子だって」

…一体どういう風に伝えたいんだろう。

「せっかくですので見ていきますか？」

「はい。鬼の方に興味はありませんが竈門炭治郎には興味あります。何度か鴉使って『お前の許嫁候補見つけたわ』って言われてたので」

本当に何を言っただろうあの人の。

庭を覗くと炭治郎君と三姉妹のきよ、すみ、なほと話していた。瓢箪に息を吹き込ん

で破裂させることについて話しているから全集中・常中のことだろう。

「懐かしい。剣技の前にまずコレでできるようになれって言われたことです」

「私もカナヲにやらせてましたね」

三姉妹の話を聞いて、よりやる覚悟を炭治郎君はしていた。

「ふーむ…でも確かに可愛いのはわかる…。いやでもなあ…どつちかというと師範の方がもらった方がいいのでは…」

おっと炭治郎君を婿に貰う気満々ですか。ですが武蔵さんは多分無理ですよ。

あの人、恋愛関係苦手なのに自分の心に決めた人以外眼中にありませんから。

「では、そろそろ失礼しますね。7代目のお世話をしないと」

「はい。伊織さんも怪我をしたら来てくださいね。…いや、できるだけ来ないでくださいね」

「わかりました」

そうして伊織さんとも別れる。

「さて…お昼の用意しませんと。シノエ君ももうすぐ帰ってきますし」

お館様に呼び出されたらしいが詳しい話は何も聞いていない。…大丈夫だとは思いますがあの子は時々変なことを言うから心配だ。

「…はっ、いやいや。お館様があの眼を嫌う訳がありません。というよりシノエ君も特

に気にしていないはずですし。いや、でも……」

陸・天才？んな訳。私は凡人ですby武蔵

私は才能がない。

元々無いな、とは思っていたがそれを直に感じとった時には刀を捨てようかと思つた。

天才は色々と見てきた。

刀を握つて2ヶ月で柱になるような人間もいた。

盲目でも体格に恵まれて力に恵まれている人間もいた。

自らの血が特別で怪我を負つてしまつてもそれを有利に働かせてしまう奴もいる。

聴覚に優れていて戦況を見るのが上手い奴がいる。

薬学に精通している人もいる。

力はなくとも技術がものすごい奴がいる。

由緒正しい家柄の奴もいる。

骨格、筋肉の密度に恵まれているものもいる。

こないだ柱になった子は眼が特殊で、毒に精通している。

他にも恵まれている隊員は山ほどいる。

じゃあ私は? 体格もない。筋肉もない。技術もない。五感の一つが突出して優れているわけでもない。

相変わらず思う。ああ、この人達は私なんかとは違うと。

特に柱になって継子を取った時には本当に己がただの凡人であることを知らしめられた。

宮本武蔵の名を継承してからというもの、皆は私を天才剣士だのなんだの色々というが、私は歴代宮本武蔵みたいに己の剣技というものを作れなかった。どれもすでにある技をいじくったものばかり。

なんとか私が作り出したのは感情に全て身をまかせるといふ剣術とは到底呼べないもの。

二刀流も戦国の世ならまだしも今となっては自我流の二刀流も沢山いる。

そんな私が柱という位置付けに立つために

努力して努力して努力して努力して、とにかく死ぬ気で努力して鍛えた。

実際に何回か死にかけたし。

盗めるものは全て盗んだ。五つの呼吸の育手の元は全て回ったし柱ともなんども手

合わせをした。

初代が残した五輪書というのも暗記するほどに読み込み、実践した。

私が天才達の横に並ぶには、努力をする以外方法などなかったのだから。

「スウーーーーーハアーーーー」

二天の呼吸・壱貳混合ノ型クズシ『剛雷二閃・穿ち裂き』

最後の大木へ向けて居合抜刀の構えから足に全神経を集中させ爆速で駆け抜け、すれ違い様に一太刀。通り過ぎた後に再度足に全神経集中させ真反対に駆ける。

今度は二本の刀を木に突き刺しまず縦に裂く。そこから刺した場所に刀を戻し今度は真横に裂く。

「ふう。薪はこの程度でいいでしょう。さー！飯だ飯！」

山籠りから一月。素手で入っても意外とかなるものね、

え？刀？いやアレ木刀です。自分で木を切り倒して作ったやつ。

さ！それはそうと、焚き火に薪をくべまして：火打ち石で：はい焚き火の完成。

お次は予め仕留めておきました熊を解体しまして。皮は色々使えるのでとっておきます。さー！飯！飯！

腹ごしらえを終えて、荷物をまとめ下山の用意をする。しのぶには手紙を置いてあるし大丈夫でしょう。

と、思っていたのだが…

なんで蝶屋敷に着いた瞬間に正座させられたの私。

「さて武蔵さん、なぜ私が怒ってるかわかりますか？」

「いえ、全くさっぱり」

「はあ…カナヲ、あの手紙を」

「はい」

「武蔵さん、この手紙にはですね。一日、とあります」

「え」

うそん。一月って書いたも思うけど。

手紙をよく見させてもらおうと確かに一日と書いてあった。

…テヘツ。

「カナヲ、武蔵さんの夜のご飯抜きにしてください」

「まってしのぶ！それだけは後生ですからやめて！」

「知りません。心配した私たちの身にもなつてください。炭治郎君達も相当心配していただきますよ。伊織さん達は全く心配していませんでした」

ま、でしようね。

にしても相当おかんむりだ。しばらくは真面目に頑張ろう。

炭治郎達にも謝つとかないとね。

「あ、炭治郎君達はもう体が回復して機能回復訓練も終えたので今朝に任務へ向かいましたよ」

「マジでか!? あ、でも終えたつてことは全集中・常中もみんな習得したのね」

「ええ。我妻善逸君と嘴平伊之助君が少々苦労しましたが」

「やつぱりしのぶは凄いわ。教えるのめっちゃうまいもの」

「あ、武蔵さんも任務が来ていますので。場所的に煉獄さんの任務の場所と近いですよ」

「だーかーらー! なんでそこで杏寿朗を引き合いに出すかなお館様は! 行くけどさ!」

「行くんですね。今日中に終わらせれたのなら夜のご飯はご褒美に出してあげますよ」

そりゃ、お館様からの任務を蹴る訳にはいかないでしよう。

てかしのぶ言つたね? そんなじゃ本気で片付けてきますよ。

え? 下心? イエアリマセンヨ。

「あ、刀置きっぱにしてたけどどこにある?」

「それでしたら道場に」

「ありがと。昼餉は適当に途中の村とかで食べてくるわ」

「はい、お気をつけて。十二鬼月かもしれないからね」

「わかつてるー」

しのぶと別れ道場に向かう。そこにはちゃんと整備されている私の刀が置いてあった。……なんだかんだ言ってもしのぶはやっぱ優しいわね。

「よし。…にしても嫌な予感するわね」

なんとも言えない、本当に嫌な予感がする。カンなので根拠も何も無いが。

「…まーいいやー考える前に動こう!」

道着の着付けを改めて直し、帯をしつかりとしめる。その上から紅いお気に入り羽織物を着る。

そして腰に帯刀。

うん、気合い入るわね。

「そんじやしのぶ、言ってくるわね。伊織やクソ親父殿がもしきたらここでご飯食べた後に帰るって言っておいて」

「はいわかりました。お気をつけて」

「はーい」

「えーと…宗教？そこで人が消えてる？なんじゃそりゃ」

目撃者の話によるとある宗教団体の支部みたいなどころに人が入ったきり一切出て来ず。隊員が何人か潜入するも全員帰って来ない。もしかしたら鬼かもしれない…と。

…はあ、そんな鬼が教祖だが高んたかやつてるわけでもないし。そんな物好きな鬼がいるわけじゃないじゃないの。そんなめんどくさいこと。

「…夜になると思ったけど急いだら意外と早く着いたわね」

その問題の村に着いた。大体酉の刻（午後6時くらい）だろうか。

…さて、気を引き締めないと。

「二刀三拝。修練の果てに無限に至る」

旅人を装って世間話をしつつさり気無く情報収集をしていく。今はもう寅の刻（大体朝四時くらい）に差し掛かるくらいだろうか。

その過程でわかったのは消えていった人間はどれも若い人間だという。旅人、現地の人間わず宗教の人間のいる屋敷に入った人間は誰一人として帰ってきていないらしい。

その人達曰く、旅人はちゃんと返しているらしいとか。

…胡散臭いわねえ。

乗り込んでもいいけどあんまり騒ぎを大きくしたくはないし。

食事処で貰ったおむすびを頬張りながらいい案はないものかと考えを巡らせる。でもどうしても『後日真夜中に襲撃』に辿り着いてしまった。

「んぐっ!」馳走様!それじゃあ引き続き調査を…」

「やあやあ!こんな真夜中にどうしたんだい!凄い綺麗な顔だね!」

「っ!」

突然後ろから手を回され気持ち悪い声を耳元で吐かれた。

思わず裏拳を叩き込むも感触はない。

「危ないなあ。急に手をあげないでくれよ。あつ!それよりさ君お茶しない?いい茶屋を知ってるんだ!あつ俺の教団をコソコソ嗅ぎまわってるって教えられたんだけどそれも君かな?」

その姿は白椽色の長髪に血をかぶったかのような赤黒い模様が浮かぶ細身の若いイケメン。瞳は虹色。

服装も髪と同じ血のような模様が描かれた赤と黒の服を着込んでいた。

そして両の瞳に刻まれるは『上弦・弐』。

「んん？ おやおや、君どこかで見たことあるぞ」

「ええ、そうでしょうね。童磨^{どうま}」

「俺の名前を知ってるのかい。んー何処であつたつけなあ」

童磨はのらりくらりと体を揺らしながら考えている。

…相変わらず腹が立つ。

自分の中に生まれた怒りを静かに殺しながら童磨に言う。

激情に身を任せていいことなんかないから。

「よく言う。7代目宮本武蔵の腕と眼を奪つておいて。忘れたとは言わせない。お前は

…(ここ)で殺す」

「宮本武蔵……ああ！ 10年前くらいに半天狗殿と玉壺殿^{ぎよつじ}と共に殺そうとした鬼狩りだ

ね！ 確かあの時もう一人15歳くらいの子供がいたけど……もしかして君か！ いやあ！

あの時はとても弱かったよね！ 今はもう凄いね！ 柱なのかい？ よく努力したね！ あの

時は日光のせいで逃げざるを得なかったけど今回は絶対に殺すよ！ もうあの時みたい

に庇つてくれるお父さんはいないからね！」

「ああ、そうね。……でも関係ない。今この場で、お前は、私が殺す」

「いやあ多分無理じゃないかな?」

「じゃあやってみましょう。親父殿の両腕と眼を斬ったツケ、払ってもらわよ。8代目宮本武蔵の力、その目に焼き付けて死ね」

もう突然すぎて色々グチャグチャだ。

親父殿を狂わせた鬼が出てきて。

怒りに身を任せても良いことなんかないのはわかってる。でもどうしても抑えきれない。

「二天の呼吸・壱ノ型『剛雷二閃』」

「おっ、速いねえ」

一閃目は普通に避けられた。二閃目を繰り出すも扇でいなされた。

「二天の呼吸…」

「あー! 猗窩座殿も近くに來てる! え、何しにきたんだろ!」

「肆ノ型『阿修羅ノ舞』」

「おっ、おっ?」

童磨に接近し、ひたすらに斬りつける。一撃ごとに威力が上がっていく技だ。一撃目

の勢いを使い二撃目を。二撃目の勢いを使い三撃目を。四撃目あたりで童磨はうけきれず段々と傷を負い始めた。

「血鬼術・粉氷」

「見たことあるわよー！」

この血鬼術、血を凍らせて肺を殺すとか言う根本的に呼吸と相性が悪い技だ。

「二天の呼吸・肆ノ型クズシ 『阿修羅ノ舞・暴風』」

刀を振り上げる向きを真上に向けながら風を起こす。それでもなお童磨の頸を狙う。けどどうしても届かない。

「へえー！それ風の呼吸の技に似てるね！さっきのもそうだ！雷の呼吸とかもあったよね！色んな呼吸を基にした呼吸法なのかな？」

しかも正確に解説されるという屈辱ものだ。

血反吐を吐きながら努力して身につけたというのに。

「二天の呼吸……」

「うーむ、とりあえず君の動きを止めないとなあ。君の加速なかなか興味深いからそれについて教えて欲しい！」

ドオン！

「!?」

「わあ、猗窩座殿もう来たのか!はやいなあ。俺もこうしちやいられない。あの方のために柱は狩らなきゃね!」

遠くで何かが爆ぜるような音がした。やたらうるさいなと思っていたが…童磨の言葉ではつきりした。向こうにも上弦の鬼がいる。多分童磨と親しい鬼…上弦の肆や伍はそんな名前じゃない…。壺も違う。なら…参か陸?」

だがそれ以上に聞き逃せない言葉があった。

俺も…?柱を狩る…?

事前に教えられてた情報だとこの近辺で任務に出ている柱はたった一人。

炎柱の煉獄杏寿朗だ。

「…っ!チツ!二天の呼吸・壺ノ型クズシ『剛雷二閃・乱舞』」

「あれえ!逃げるのかい?逃がさないけどね!」

構うな。もう二度と私の周りの人々を殺させてたまるか。それに比べたら私の怒りなど些細なものだ。

僅かに血鬼術を吸ってしまつて肺が痛むがなんとか動ける。

脚を動かせ。全て向かうことに意識を集中させろ。
もう二度と喪つてたまるものか。

「ねえねえ！そつちは 猗窩座殿がいるからやめた方がいいよ！2対1になつちやうよ
！」

構うな、鬼の戯言など無視しろ。

「あーもう！ 猗窩座殿に怒られちやうじゃん！」

「……見えた！」

列車が横転しててその側で炭治郎と杏寿朗がいてそこに一人の鬼が襲いかかってい
た。

杏寿朗と鬼が戦闘を起こしているがどう見ても鬼の方が強い。

「二天の呼吸・壱ノ型……」

「だからあ！行かせないつてば！」

童磨の血鬼術で蓮の花のようなものが出てくるが一閃目を蓮の花を避けるように木
に向かつて行い、二閃目を杏寿朗の元へ。

「！」

「むっ!?？」

「二天の呼吸・式ノ型『穿ち裂き』」

杏寿朗と戦っていた鬼に向かって強引に型を変えて突きをするも一本しか右肩に刺さらず、裂けなかった。

「ふん!」

「つ!」

鬼からの攻撃を刀で受け止めると同時に跳んで威力を軽減させる。でも完全に殺せず背中を強打する。

「お前も柱か。今日はなんといい日だ。…ん?なぜあいつが…」

「猗窩座殿ー!すまない!俺だけで片付ける予定だったんだが!君が来たのを察してこっちに向かってしまった!」

「……」

猗窩座と呼ばれた鬼の両の瞳に刻まれるは『上弦・参』。

…こりやますますやばいわね。

「杏寿朗、大丈夫?」

「うむ!少々まずかったが武蔵殿のおかげで事なきことを得た!…して武蔵殿は大丈夫か?」

「あつたりまえよ。こんなの朝飯前よ。…にしても、相当消耗してるわね。…杏寿朗で

すらそうなるレベルか」

鬼は何やら話しているがこちらは全回復してしまっている。

加えてこちらは柱二人とはいえ手負い。しかも炭治郎達もいるから死なせないためにも逃げるわけには行かない。

「…日光が出るまで、大体半刻（一時間）くらい…ねえ杏寿朗、まだ動ける？ 全力疾走、行ける？」

「む？ うむ！ 勿論だ！」

「ならねえ……」

「まあまあそれより 猗窩座殿！ 先に柱を殺すことが先決なんじゃないのかい？」

「…いいだろう。だが俺の邪魔をするなよ」

「当たり前じゃないか！」

ただでさえ一匹でも厄介なのに二匹に増えた。まともにやり合えば二人とも死にかねないわね。

「杏寿朗、私が時間を稼ぐから、炭治郎達を全員避難させて。避難させたらできれば貴方も逃げて」

「む！ それはいくら武蔵殿とはいえ承知しかねる！ ここで武蔵殿一人に任せてしまうのが一番ダメだ！ 流石にそれは俺でもわかるぞ！」

「はーあ、そりやそう言われるのはわかかってるわよ。でもここで一番重要なのは一人でも死なせないこと。で、手負いの杏寿朗と私だと私の方が生き残れる保証が大きいから言ってるの。わかる?一番最悪なのはここで杏寿朗が残ってしまったて一人とも死んで、他の隊員も全員死ぬことよ」

「…むう」

「何を言ってるんだい?逃がすわけないじゃないか!」

「おい、杏寿朗は俺と戦っているんだ。余計なことをするな女」

「だいじょぶよ。私、生きる事に定評のある8代目・宮本武蔵ですよ。それにね…杏寿朗、少しくらい好きな人を守らせてくださいな」

「?それ…はっ!?」

「行け!」

一瞬戸惑った杏寿朗を炭治郎の方に蹴り飛ばす。

私が一喝すると杏寿朗もようやく諦めたよう炭治郎を担ぎ何処かへ行つた。

「逃がすか!」

「二天の呼吸・参ノ型『霞ノ舞』」

上弦の参が杏寿朗を狙い撃ちしようとしたのを会話中にしてた気配を殺したのをより濃くし、最大限殺した状態から一気に脱力。踵から踏み込み上弦の参の右腕を斬りと

ばす。

「ふむ……杏寿朗を逃されて腹立つがお前も杏寿朗と同じ柱だな」

「うんそうだよ　猗窩座殿！あの宮本武蔵の一族だ！俺が殺し損ねた7代目の娘さんだ！今は宮本武蔵を継いで8代目の宮本武蔵らしい！」

「お前には聞いていない。お前に素晴らしい提案をしよう8代目宮本武蔵。お前も鬼にならないか？」

「断る。なる気もない」

上弦の参、猗窩座から急にそう言われる。

んなもん誰がなるか。

「今日は良き日だ。至高の領域に近い人間を二人も見ることができた。しかもお前は杏寿朗よりも近い」

「ねえ、お前ごときがあいつを呼び捨てにしないでくれる？虫唾が走る」

「そうか。では8代目宮本武蔵。お前がなぜ至高の領域に足を踏み入れることができないか教えてやろう」

「あん？人間だからとか言うわけ？お前、初代を知らないだろ。文字通り武神と言われ、戦国の世最強と謳われた初代宮本武蔵は今の上弦の壱と引き分けてる。朝日が近かつたせいで仕留め損ねたらしいけど、初代の書き残した書物曰く確実に仕留めることは出

来たらしいわよ?アレエ?おかしいなあ。鬼なのに至高の領域に踏み入ることのできない人間にあんたら鬼の中で一番強い上弦の壺を狩ることができるとだつてさ」

「…」

「まあそりやそうよ。あんたらの頭でもあるあの臆病鬼の血をより濃く引き継いでるもんね。そりや臆病になつて当然よあんたら」

「黙れ。もう交渉はやめだ。死ね、宮本武蔵」

「おっと!俺も加勢するぜ! 猗窩座殿だけだともしかしたら死ぬかもしれないしな!」

予想通り鬼舞辻無惨の事を貶すと冷静を保つてはいるが僅かに怒った。さつきより冷静でなくなつてる。

「ああ、かかつてこい醜い鬼ども。私の二天一流を、お前らに見せつけてやる」

漆・絶対に誰も死なせない by 煉獄杏寿朗

武蔵殿があそこまで焦っているのを見たのは初めてだった。

だがそれ以上に武蔵殿に足手纏いと思われたのがとても悔しかった。

確かに鬼と同化した列車が脱線し無理矢理死人を増やそうとした際に相当消耗し、その後急襲してきた上弦の参と戦った時に負傷した。

それでも共に戦えると思つて昂ぶっていた己がいた。

だが現実是非情だ。武蔵殿にも自分一人の方がいいと言われ俺は逃げに徹することになった。

蹴り飛ばされその勢いで竈門少年を拾い上げ今度は列車の方に行く。普通の人も沢山いるからそれらも助けなければ。

「まつ…まつてください！煉獄さん！武蔵さんを…助けないと！」

「無理だ！竈門少年では足手纏いだ！無論俺もだ！だが心配するな！武蔵殿は何があつても生き残ると豪語していたからな！今回もきつと…」

「違うんです！武蔵さんから嘘の匂いがありました！武蔵さんきつと…自分の命と引き換えに…」

「何!?」

「武蔵さんと煉獄さんが…話してた時、覚悟を決めてたのと…嘘の匂いが…きつと武蔵さん…」

「むう…だが君たちをまずは安全な場所に避難させる。俺は武蔵殿を信じる! きつと俺が戻るまで耐えてくれるとな! 案ずるな! きつと俺が助ける!」

そうと分かれば早く武蔵殿の助太刀に行かねば!

「竈門少年! 匂いで乗客のいる場所を教えてくれ! 君は動くと致命傷になるからな!
いのがしら猪頭少年は俺と共に乗客を助けるぞ! 黄色い髪の少年もだ! 一刻も早く救助を終わらせるぞ!」

「は、はい!」

「うおお! まかセロオ!」

むむつ、思った以上に時間がかかってしまった。一番近場の村に避難は終わった。早く武蔵殿の所へ加勢に行かなければ。

「皆はここに待機だ! 鴉を二天屋敷と蝶屋敷へ飛ばしてくれ! 8代目宮本武蔵殿が危う

いとな！では！炎の呼吸・壱ノ型『不知火』！」

壱ノ型を使い武蔵殿の元へ駆ける。一分と経たずに武蔵殿のいた場所が見えてくる。轟音が鳴り響いているということはまだ戦っているということだ！

再度壱ノ型を繰り出し加速すると武蔵殿を視界に捉えることができた。が、鬼に攻撃をされかけていた。

「炎の呼吸・弐ノ型『昇り炎天』！」

上弦の参の拳を最初に縦に真つ二つに斬つてやった技で今度は横から肘に命中させ斬り落とす。

「武蔵殿！」

「むむっ！あの柱も帰ってきたぞ！これは殺すチャンスじゃないか！なあ猗窩座殿！」
「黙れ」

「…っ！杏寿朗、なんで戻ってきたのよ…ゲホッ」

武蔵殿は明らかに重傷を負っている。血を吐き、右眼が負傷していて武蔵殿の特徴でもある青い道着も赤く染みていた。左腕も少々変な歪み方をしている。

「竈門少年がな！武蔵殿が嘘をついていると言っていた！嘘の匂いがするとな！だから戻ってきた！貴女を死なせるわけにはいかないからな！それに俺に愛を伝えておいて先に死ぬなど俺は許さん！」

そう伝えると余計に武蔵殿の顔が赤くなった。むう、余計体調を悪くしてしまったか？

「ふー。まあ来たのはしょうがないわ。どうせ戻ってくるでしょうね、とは思ってましたから。…せつかくいい雰囲気だけど、まずは目の前の鬼を滅殺しましょう。炎柱・煉獄杏寿朗」

「うむ！もちろんだ！武蔵殿は殺させはしない！貴女も守ってみせよう！」

「守るのは私だったはずなんだけどね…ゲホッ！がほっ…」

「む！大丈夫か！」

さつき血を吐いていてまた血を吐いた。内臓を痛めているのか？

「ゲホッゴホッ…大丈夫よ。…杏寿朗、私に命を、預ける？」

「無論だ！元よりそのつもりだ！それに、だ。かの宮本武蔵と肩を並べて戦えるというのは素晴らしいことだ！特に俺は貴女を心の底から尊敬している！柱は皆を尊敬しているがその中で1、2を争うくらいにな！」

思ったことをそのまま伝えると余計に顔が赤くなる。む、やはり血鬼術をかけられている？

「それくらいにしておきなよお。その子、悶えて死んじゃうぜ？」

「杏寿朗、気が変わったか。鬼になる気になったか？ならその女など放っておいてこつ

ちに来い」

「断る！それに俺は君たちが嫌いだからな！……さて少しは回復したか？武蔵殿」

「ええ、ゲホッ。まだ内臓は痛むけどね。しのぶから貰った麻酔が効き始めたからいけるわ。……まあでも、右眼はもう見えないでしょうね。けれどもシノエに貰ったとつておきもあるし、万策尽きたわけじゃない。さつきは使う暇すらなかったけど杏寿郎が来たから使えるでしょう」

とつておき？シノエとは確か新たに柱になった少年の名だな。もう仲良くなったのか！

「鬼にならないならお前も殺す。柱を二人も葬ったならばあのお方も喜んでくださるだろう」

「さあさあ！いくぜ俺と猗窩座殿の息のあつた攻撃！武蔵ももうちよつとは頑張つてくれよ！まだ見せてない型もあるだろう！型が4つなんて少なすぎるからね！もつと俺を楽しませてくれよ！」

「杏寿朗、私が伍ノ型使うときだけ、離れてね。味方すら巻き込みかねない技だから。それ以外は……私のことなんか気にするな。思う存分、好き勝手に暴れて。私が補助するから」

「承知した！俺は！俺の責務を全うするでしょう！では……参る！」

まず先に狙うは上弦の式。こちらは呼吸と相性最悪とのことだ。こちらから狙うべきだ。その間は武蔵殿が参を抑え込む。

しかし…のらりくらりとよけられる。

「炎の呼吸・肆ノ型『盛炎のうねり』」

「わあ！炎の呼吸の使い手は初めてだよ！楽しませてくれよ！」

一気に距離を詰め、渦を巻くように剣撃を叩き込む。上弦の式は少し驚いた表情を見せただけで氷のようなもので壁を作られた。

それを叩き割ると急に氷？が解けた。

「杏寿朗！それを吸うな！」

「お前は俺に集中しろ、宮本武蔵！」

武蔵殿の声でとっさに壱ノ型を真後ろに向けて使い吸うのを回避する。

「まだまだいくよお！それ！血鬼術・粉吹雪！」

「炎の呼吸・伍ノ型『炎虎』！」

血の吹雪を繰り出してきて伍ノ型で相殺する。

「二天の呼吸・参肆混合ノ型クズシ『霞阿修羅ノ舞・暴風』」

「お！すごいすごい！味方の邪魔をせずに的確に俺の血鬼術だけを吹き飛ばしたね！し

かも猗窩座殿と戦っていたというのにまるで気配がなかった！さつき2対1で戦った時もそうだね！急に気配が消えた！いやー本当にすごい！」

押されかけたところで武蔵殿がきて血鬼術を共に吹き飛ばしてくれた。

武蔵殿がきたということは上弦の参は…。

もしや倒したのか！

「むー猗窩座殿は何してるんだい。もしや俺と共に戦ってくれるのか！」

「無駄よ。あいつ今頃夢見てるんじゃない？」

上弦の参をみると頸を切っていたわけではなかった。しかし、様子がおかしい。拳を振るってはいるが何もないところに振っていて、一人で戦闘を起こしてる？みたいで、時々足がもつれている。

「むむつ、もしや毒かい？でも普通の毒であんな風にはならないと思うけどなあ。どんな毒を使ったんだい？」

「教えるとも思うう？ゲホツ…はーあ、こうしなきやならない自分に腹がたつ。かつこよくお前ら全員の頸を斬れたらいいんだけどね」

「無理はするな武蔵殿！俺がきた時より傷が深くなってるのがわかるぞ！」

「うんうん、それに俺の血鬼術で肺胞がそこそこ死んでるはずだから息をするのもつらいよね！血が肺に入ってゴロゴロしてる音がするよ。辛いよね。だから…俺が救済し

てあげるよ!」

「はっ、看取られるならお前じゃなくてお館様に頼むわ。誰がお前なんか。…杏寿朗、ちよつとだけ、一分だけ時間稼いでくれない? なんなら倒してくれてもいいんだけど」

「承知した! 任せられよ!」

武蔵殿がそういうからには一撃必殺の技があるのだろう。ならばそれを信じて時間を稼ぐだけ!

「じゃあ、任せたよ。杏寿朗」

武蔵殿が納刀し仁王立ちをしたのを見て上弦の式に攻撃を仕掛ける。

まずは壱ノ型『不知火』で距離を詰めると同時に今度は肆ノ型『盛炎のうねり』で追撃する。

「一分だね! ならその間に倒すよ! 頑張るぞお!」

「させん! お前は俺が倒す!」

そう意気込んだものの、あと一步が届かない。

そして相手は氷の粉を散布してくる。着実に動ける場所をなくしてくる。

「なら…纏めて扶るだけ! 炎の呼吸・奥義…」

「猗窩座殿! いつまで幻覚見てるんだい! 早くこつちを手伝ってくれよ!」

上弦の参は意識を取り戻しかけている。先にやらねばこちらがやられる。

「玖ノ型『煉獄』！」

「あーもう！血鬼術・冬ざれ氷柱！」

灼熱の業火のように猛進し、上弦の式に迫る。

氷柱が落ちてくるがそれを意に介さず、多少傷を負おうとも必ず斬る！

鬼は血鬼術で止まらなかったのが意外だったのか少し初動が遅れていた。

「破壊殺・乱式」

だが、届く直前に横から衝撃派が体を叩いた。

これは上弦の参か！くそ、あと僅か…だったのに。

「が…」

急に吹き飛ばされた為、受け身が取れず背中から岩に激突してしまふ。肺の中の空気が一気に出たような感覚になり、息が一瞬できなくなる。

「猗窩座殿！いいタイミングだったよ！ありがとー！危うく斬られるところだったぜ！」

「はあ…くそ。変な毒だった」

「はあ、はあ…」

「宮本武蔵の方はどうしたんだい？」

「あいつにもやっておいた」

武蔵殿の方になんとか首を回し見ると、仁王立ちしているのは変わりない。だが明らかに傷がより深くなっている。頭からも血を流し、生気が感じられない。まさか……

「貴様あ！」

「ふん、あのような女にかまけるからだ。くだらない。そんなだからお前は至高の領域にたどり着けないんだ杏寿朗」

「おいおい待ってくれよ！あの宮本武蔵を追い詰めてたのは俺の血鬼術だぜ！偶々猗窩座殿がトドメを刺しただけだよ！猗窩座殿の手柄みたいにするのはやめてくれよ！」

怒りで体を無理やり起こそうとするも上手く動かない。

脚をやられたせいか。

だが！

「ものはいでだ！君に逃げられても困るし脚を凍らせておこうか！」

「やめろ。それでは意味がない」

「えー？意味って？」

「ぐう……！」

脚を無理やり動かそうとすると出血が酷くなる。

「だが……武蔵殿を殺した罪は……ここで償ってもらわなければ困る！」

そうだ、俺のせいで武蔵殿は死んでしまったも同然だ。だからこそ……

「何を言っている？ 弱いのが悪い。戦国の世から我ら鬼を脅かした一族と聞いているが……あれでは拍子抜けだ」

「まあそこまでしたのは俺の血鬼術のお陰だけどね！ ちよつとめんどくさかったけど本気の宮本武蔵は中々強かったよ！ 今まで戦った柱の中で一番だ！ でも死んでしまったね！ これは次の宮本武蔵に期待するしかないな！」

「いつか万全の宮本武蔵と戦ってみたいものだ」

俺のことなど気にせず二匹の鬼は喋り続ける。二匹にとって俺はもうすでに脅威ではない、ということか。

それでも、ここで鬼を討ち取らねば……武蔵殿の家族に合わせる顔がないではないか！ 「まあまあ猗窩座殿！ 喧嘩する前に先に柱は確実に殺しておこう！」

「それだけには賛成してやる。杏寿朗、これが最後だ。鬼になると言え。そうすればお前は生き残れ、剣技を極めれる」

上弦の参は再度俺に鬼になれと言ってくる。

だが答えなど決まっている。

「断る……俺は、鬼にはならない！」

「そうか、ならば……死ね」

目の前まで上弦の参が迫ってくる、刀を振るおうとすると腕が凍った。上弦の弐の血鬼術か。万事休す……か。

「二天の呼吸・陸ノ型クズシ『静寂ナ逆鱗・二閃』」

その瞬間だ。急に鬼二匹が袈裟斬りにされた。頸を切り落とすには至ってないが、それでも体を真つ二つに斬り裂いた。

「たつく……誰が死んでるって？ 死にかけに間違い無いけど。にしても……陸ノ型すら僅かに逸らされた。逆八文字にしてやる技なのに……。しかも上弦の参のせいで片腕もう使えない物にならないじゃ無い。……で、杏寿郎は……大丈夫そうね。よかった……」

「う、うむ！俺は良いが……武蔵殿はもう動いてはダメだ！」

それは死んだと思っていた武蔵殿だった。だがもうどう見ても死にかけだった。文字通り死ぬ気で鬼を斬ってくれたが、もう回復しつつある。

「武蔵殿！早く逃げるんだ！」

「大丈夫よ。もうどちらにしろ終わりだから」

「それは？」

「ほれ、鬼どもはもう私たちに構ってる余裕なんてないわよ」

手の氷を砕いてくれて鬼が回復してるのに目もくれず武蔵殿が指したのは東の方角の空。そこには、僅かに陽の光が見えてきていた。

「わあやばいよ不味いよ！早く逃げなきや猗窩座殿！」

「黙れ！わかつている！」

鬼二匹は陽の光に当たらない場所へ焦って逃げ出した。鬼を狩れなかったのは非常に不本意だが…。

「えー、逃げんのかんたら？こんな死にかけ柱二人残して？卑怯者ねえ。いつだって鬼殺隊はあんたらに有利な夜に戦ってるつてのに。生身の人間が、失った手足の戻らないただの人間が、なんの能力も持たない只の人間が、奇天烈な技を使うお前達と、回復能力に長けたお前達と戦ってる。

お前達は得意げに人間を殺すが…お前達がやってるのは道端に転がる虫を殺して粹がつてるだけの、ただの醜いバケモノだ。

だが、人間をなめるなよ、バケモノ。私たちは、常にお前達の頸を狙っているぞ」

とても通る声で、大きな声で逃げてる鬼に聞こえるように、言い放つ。それと同時に夜が明ける。

「……」

「武蔵殿！」

武蔵殿が倒れたのもまた、同時だった。当たり前だ。あんな状態で立っていたことの方が奇跡だ。

「絶対に死なせません！待ってろ！すぐに蝶屋敷に連れて行くからな！」

最低限の止血を施し、背負って蝶屋敷へ向けて走った。

どうか生きてくれ！

捌・ずるい人ですbyしのぶ

「カアアア……二天柱ガアア……上弦ノ鬼二匹ト……対峙！ 炎柱ト……共闘ヲシテイル！
最後ニ確認シタ限リ……二天柱ハ……トテモ重症！ 重症！ 至急治療スル準備……！ 準備……！」

鴉から任務に向かったはずの炭治郎君達から伝達され蝶屋敷は今までになく荒れていた。

上弦の鬼と対峙するだけでも相当なのに重傷を負っているという。

任務に出たばかりのシノエ君も急遽呼び戻しどんな傷を負っていてもすぐには治療できるだけの準備をする。

他の患者もいるがそれら全て後回しだ。

「カアア……続ケテ伝達！ 鬼ヲ追イ払イ！ 炎柱ガ二天柱ヲ背負イ此方ヘ向カツテル！ モウ
スグ！ 到着！ 到着！」

「しのぶさん！ すいませんん玄関ちよつと壊します！」

「構いません！」

シノエ君は玄関をぶち壊した。正確には扉のみを蹴って破壊した。

いつでも入れるようにとのことだろう。

西洋医学というものの道具を、片っ端から一室に運び込む。この辺はシノエ君の専門だから私はよくわからない。

「しのぶさん！後はありったけの布を！きよちゃん達も！アオイはとにかく湯を沸かして！しのぶさんが運んでた器具を布含めて全部お湯潜らせて！カナヲはアオイを手伝って！」

「はい！」「わかりました！」「は…はい！」

シノエ君がここまで大声で喋るのも本当に珍しい。よほど焦っている証拠だ。

「失礼！胡蝶殿！武蔵殿を助けてほしい！」

「煉獄さん！土足で構いませんのですぐに此方へ！」

「うむ！」

それから半刻（一時間）ほど経つと煉獄さんの声がする。

背負っている武蔵さんは遠目から見ても重症なのがわかる。

「吐血とかはしていましたか？」

「うむ！とにかく事あるごとに吐血していた！鬼の話では血鬼術を吸って肺胞？が壊死しているとか言っていた！他目立った外傷は右眼と左腕だ！片腕が使い物にならないとか言っていた！左腕が変な歪み方をしているように見えた！」

「ありがとうございます！」

今まで、幾度と重症な隊士を見てきたが今回の武蔵さんは聞く限り群を抜いて重症だ。

「煉獄さん！ここから先は入らないようにとのことです！」

「う？うむ！承知した！」

シノエが作った手術室なる部屋の前で煉獄さんには止まってもらう。そして武蔵さんを代わりに受け取り中に入る。

「シノエ君！連れてきました！聞いた限りだと内臓、右眼、左腕が特に重症です！」
「わかりました！」

それからの一刻半（三時間）は本当に大変だった。一瞬も気の休まる時がなかった。武蔵さんの呼吸が止まった時は本当に血の気が引いた。

だけどシノエ君の奮闘のおかげでなんとか治療は終わった。

が、右眼は失明。左腕は何でも肩の神経ごとやられてるから二度と動かないのと。直す技術はシノエ君も知らないらしい。

肺に至ってはボロボロとのこと。しばらく…少なくとも一年は絶対安静。戦うなんてもつてのほからしい。

シノエ君は絶対に薬が足りなくなるからと調達に向かった。

煉獄さんは煉獄さんで怪我を負っているので治療がたら休んでもらった。

「…はあ、疲れました。最近武蔵さんのせいで…本当に…」

麻酔は切れているはずなのに未だに目を覚まさない武蔵さんを横目に思う。

振り回されて、屋敷の食料は食い尽くしてしまうし。道場は壊されてしまうし。せつかく貰えた非番も武蔵さんのせいで潰れてしまいましたし。武蔵さんのために用意していたおうどんも無駄になってしまいました。

…他人には命に代えても、なんてのはやめろというのに、自分はやるんですね。

例え、好きな人を守るためとはいえ、それでもその殿方と共に在る為に生き残ると言っていたのに。

一体どの口が『生き残ったもん勝ち』なんて言ってるんですかねえ。本当に。

…本当に、心配した。姉さんに引き続き、また大切な方を失うのかと…。

「ヒナア！」

突然、だれかが大声をあげて入ってきた。そういえば扉は開け放していたかしら？

「…びつくりしました」

「つと、すまねえ。もうとにかく焦っていたもんで…。つと、久しいな胡蝶殿。お元気そうで何より」

入ってきたのは両腕がなく、左眼に眼帯をしている6尺（180センチ）は超えてる上背の男。

たしか…

「いえいえ、此方こそご無沙汰しています。7代目宮本武蔵さん」

「やめいやめい。俺アもう宮本武蔵じゃねえ。レンと呼んでくれや。それはそうと…ヒナ。無事だったんだな…よかった」

7代目宮本武蔵さんともいレンさんは武蔵さんの顔を見て安堵していた。

それはもう、本当に心の底から安堵しているのがわかった。

「胡蝶殿、ヒナはどんな容態で？」

「…武蔵さんは、右眼の失明及び左腕はもう二度と動かさせません。なんでも神経ごとイカれているそうなので。後は肺ですね。相当ポロポロになっています。他は全身打撲

に脚骨折、肋も数本やられています」

「そうか…命に別状はないんだよな？」

「ええ。それは大丈夫です。…いつ目を覚ますかはわかりませんが」

「…ヒナを治療してくれたのは胡蝶殿だけで？」

「いえ、私だけではありません。シノエ君…私の同期の子と他2名の隊士が治療の手助けを。他に炎柱の煉獄杏寿朗さん、後は竈門炭治郎という隊士のお陰で助かったようなものだと思っています」

「そうか…。幸運だ。こんなにもヒナが恵まれている。本当に…幸運だ。…その治療をしてくれたシノエ殿は？後は2名の隊士というのは…」

「シノエ君は今薬の調達に行っています。2名の隊士はこの屋敷で今休んでいます。呼んできましようか？」

「そうだな…お願いしてもよろしいかな？」

「はい」

レンさんの要望によりアオイとカナヲ、きよ・なほ・すみの三姉妹を呼びに行く。

アオイは特に疲れていたが嫌な顔せずきてくれた。

相手が7代目宮本武蔵だということを伝えるとあからさまに緊張していた。

カナヲはよくわかっていなかった。まあしようがないわね。

「レンさん、連れてきましたよ」

「おう、恩にきる」

レンさんの元へ連れてくるも、大変だった。三姉妹はレンさんを見た瞬間に怖がつてしまつてカナヲもなぜか緊張して固まつていた。アオイも言わずもがな。

「つと、怖がらせてすまねえな。ほい。これでいいかな？お嬢ちゃんがた」

レンさんは器用にその場に正座をした。

この人、腕がないはずなのにそんなの気にしていないかのようにさつきから振舞つて
いる。

「ほれ、菓子はいるかい？この腰の袋に入つてるやつだ。ヒナもよく屋敷で食つてたやつだ。ちよこれいとして言うんだがな。ほれ、好きに取りな」

腰についていた袋を、何故か座つたまま腰を切つた？のか宙に浮かせてきよちゃん達のところへ落としていた。……器用すぎる。

「つと、話がズレちまつたな。来てもらつたのは他でもねえ。

しのぶ殿、アオイ殿、カナヲ殿、きよ殿、なほ殿、すみ殿。

今回は俺の愛娘、ヒナを助けてくれて感謝する。本当に、ありがとう」

全員がきちんと正座したのを見計らい、レンさんは頭を下げた。

「本当ならそれ相応のお礼をしたいんだが生憎今は金やらなんやらの手持ちが一切無くてな。また後日伊織にでも持って来させる」

「いえ、お構いなく。元よりここは治療をするための屋敷でもあるのですから」

「だけどな、それだと俺の気が収まらない。…あと、非常に勝手な物言いしてるのはわかっているんだが、しばらく泊めて貰えるだろうか？せめてヒナが目を覚ますまでは」

「ええ、構いませんよ」

「感謝する」

武蔵さんを見るのを三姉妹に任せ、レンさんをベットののあるところまで案内する。患者用になってしまいが仕方ない。だがレンさんは快諾してくれた。

「あ、煉獄さんと炭治郎君も確かこの部屋に…」

部屋に入ると煉獄さんは既に起きていた。炭治郎君はまだ寝たきりだが。それと我妻善逸君？こちらが大変だったと言うのにまた食料を無断でとったんですか？いい度胸ですね？伊之助君は…まあ寝てますね。

「レンさん、こちらが煉獄杏寿朗さんでこちらが寵門炭治郎君です」

「君たちが…。どうも元二天柱・7代目宮本武蔵です。今はもうただのレンなのでレンと呼んでくれや」

「こちらこそ！7代目の噂はかねがね聞いております！お会いできて光栄です！」

「こ、こちらこそよろしくお願いします。その…寝た状態ですいません」

「構わん構わん。見た感じお二人さんも深い傷負ってんな。まだ安静にしとけよ。それはそうと煉獄殿。父上…槇寿朗はお元気で？」

「はい！元気にやっています！」

「そうかい。なら槇寿朗のバカに伝えといてくれ。近々伺うつてな」

「はい！」

「それと…お二人とも、俺の愛娘のヒナを助けてくれて、感謝する。本当にありがとう」
それから暫くレンさんは謝り倒すのが続いたので放っておいた。

夜、煉獄さん達の様子を伺いに行く。

でも扉に手を掛けたところで中で話している声が聞こえた。

思わず耳をすませて聞いてしまった。だって…聞き間違いないかなければ……。

「本当なら俺が助けに行つてやるべきだった。腕がねえ？足で刀を持てばいい。どのみち俺ももう50だ。この先も短い。ヒナの盾になることくらいはできたはずなんだ。だが鴉が来た時、ヒナなら大丈夫だとタカをくくっていた。

その後再度鴉から伝達が来て己を呪つた。ヒナに過度な期待をしすぎていた己を。…そんな勝手な身で虫のいいことを言っているのはわかつている。

煉獄杏寿朗！ウチのヒナを嫁に貰つてくれないか！」

ですよねー！嫁云々の話でしたよね！びっくりしましたもう。

「何をバカなことを言ってるんですかレンさん」

「バカなことではないぞ！煉獄殿の父上とは柱時代に面識があるからな！あいつは押しつけて押しつけて押しつけていける！」

「いえそういう問題では無くてですな」

「俺は構いません！元よりそのつもりです！」

「ほらな！」

「……」

宮本武蔵一族とはめんどくさい人しかいなかったのだろうか。

く半月後く

「ん……あれ……」

「おうヒナ。やつと起きたか寝坊助」

「……つて！なんで起きて最初の景色が親父殿なの！私を枕にすんな！離れろっ！」

「……この分だと心配いらなさそうですね」

ずつと寝たきりだった武蔵さんがようやく目を覚ました。それにとても安堵した。起きて早々、レンさんと口喧嘩をする元氣があるならば大丈夫だろう。あれだけ心配したのがバカらしくなってくるほど武蔵さんは元氣に騒いでいる。この人、肺をやられてるはずなんですけどね。

「だー！何となく重傷負ってここにいるんだらうけど親父殿！離れろって言うてんの！」

「断る！」

「断んな！」

「俺がどれだけ心配したと思ってるんだこのやろう！」

「知ってるわ！ずーっ！と昔から、会った時から心配性なのは知ってるわ！私がどれだけ鬱陶しがってるのかも知れ！」

「何を！ならお前の好きなちよこれいと買って来んぞ！」

「構わんわ！私一人でも買える！いつまでも子供だと思ふなよ！」

「はいはい。レンさんはひとまず部屋の外へ。起きたのなら色々やることがありますので」

「おう！いやあよかった！本当に……よかった」

確認もしなきゃならないし、やるところは山積みだ。

「武蔵さん、息苦しくはないですか？」

「うーん、そんな事はないかな。しつかしまあ、上弦2匹と殺し合って生きてるのが奇跡だわ」

「本当、武蔵さんが運び込まれた時戦場でしたからね？」

「感謝してます。危うく死ぬところだったわー」

ケロツとした雰囲気です。武蔵さんは言うが、それが無性に腹が立った。

「ねえ武蔵さん」

「ん？」

「貴女、今回死ぬ気でしたよね？」

「……違うわよ」

一瞬黙り、顔も強張ったから本当だろう。それに炭治郎君も生き残ると言う言葉の時

に嘘の匂いがしていたと言っているし。

「ほんつとうにずるい人ですね。私には相討ち覚悟なんてやめろと言っていたのに自分はするなんて。自己欺瞞ですねえ。あれですか？好きな人を命懸けて助ける私かっいいい、ですか？それはそれは、かっこいいですよねえ」

「うぐ……」

「……。すいません、言い過ぎましたね。でも今回の件で貴女は大切な人が側にいると自分の命すら差し出してしまおうと言うのがよくわかりました。結局は、貴女も私と同じだと。……でも本当に、生きててよかったです」

「うん、ありがとうしのぶ。私を助けてくれて。……杏寿郎にもお礼言っておかないと。多分連れてきてくれたの杏寿郎でしょ？」

「はい。あと治療に一番貢献したのはシノエ君ですよ。彼がいなければ本当に死んでいたかも知れません」

「なるほど。わかった。あ、私の体どんな感じ？」

「右眼は失明。左腕は二度と動かせない。肺を少々やられていて全身打撲に右脚骨折です」

「かー！やっぱ左腕もうダメか！二刀流できなくなる！」

……。ああ、レンさんの言う通り本当に刀を持てるかどうかの心配でしたね。

「ま、起きたばかりで元気なら良いです。私はお館様や他の心配していた柱、隊員に武蔵さんが目を覚ましたことを伝えてくるので。いいですか？絶対安静です。起きる時も必ずアオイか私、きよ・なほ・すみの三姉妹を呼んでください」

「はーい」

「おーい！ヒナ！お前、煉獄杏寿朗との結婚を決めといたからなー！」

「……？え、ちよつと待って親父殿。もう一回。もう一回言つて。聞き間違い？」

「え？だからお前と煉獄杏寿朗との結婚を決めといたぞ。心配するな、杏寿朗殿も乗り気だし向こうの父親にも言つてある」

「なにしてくれてんじやあああああ
!!!!」

玖・もつと強くなりたいby炭治郎

「はっ……はっ……」

武蔵さんが、目を覚ました。それを聞いた時にいてもたってもいられなかった。

身体中が悲鳴をあげてるがそれでも……御礼をまずは言いたかった。

武蔵さんが寝ているであろう部屋に……なんとか……

「よし覚悟しろよ親父殿！今日という今日は我慢の限界じゃない！」

「はっ！両腕ないからって舐めんなよヒナ！足で満身創痍のお前ごとき完封できるわ
！」

「やれるもんなら……」

「はいその辺で。武蔵さん、安静にと言ったばかりですよ？あとレンさん、それはお伝えするのは煉獄家へ共に行った時にしてくださいと言ったはずですよ」

「まって、ねえ。しのぶ、止めてくれなかったの？」

「ええ、止める理由がありませんもの」

……なんだこの場面。武蔵さんが片足で立ちながら刀を持って、片足で刀持ってるレンさんと鏢迫り合いをしてる。

「あら炭治郎君? どうしたんですか? 君もまだ安静にしてなきやダメなんですよ」

「その…武蔵さんが目を覚ましたと聞いて、いてもたってもいられなくなつて…とにかく俺たちを助けてくれたお礼が言いたくて」

そう伝えると武蔵さんたちが刀を綺麗の上に跳ね上げ、武蔵さんは右手でキャツチ、レンさんは腰にある鞆を落下場所に置いて納めていた。

「炭治郎、気にすることはないわよ。私がしたかったからやっただけ」

「ぶつちやけ煉獄がいたから行つただけなんだがな」

「親父殿オ、それ以上余計なこと言うなよ?…助けに入ったのも私の自己満足。それにね、御礼を言われるほど立派なもんじゃ無いわよ。怒りに身を任せて、死ぬ可能性が限りなく高いことへ無闇矢鱈に足を踏み入れたんだから。炭治郎たちが生きてたから良かったものの、これでみんな死んでたら目も当てられなかったわ」

「いえ、それでも言わせてください。武蔵さん。俺を…俺たちを助けてくれて、有難うございました!」

思い切り頭を下げる。その後何かを言われると思いついていたが…何も言われな

い。
感じたのは…なんだろう、嬉しい匂いのような…なんと言うか、嬉しい匂いも感じるけど…何か違うような。

「無理……こんな直球で何か言われるの慣れてないの……」

「おうおう、いい子だなあ。それにあのヒナを真正面から恥ずかしがらせるとはやるじゃねえか坊主ウ。見所あるねえ。こりやヒナが伊織の婿に進めるのも納得だ」

「え？」

婿？婿つてあの婿？いや、それよりも……お願いしたいことがあるのを忘れてた。

「あ……武蔵さん。レンさん。まだ蝶屋敷にいるんですか？」

「んー、私はもうどう足掻いてもここに……何月？かいなきやならないし。親父殿は強制送還するけどね。伊織に引き取ってもらいに」

「ま、そうさな。ヒナが無事なことがわかれば俺あ引き続き引きこもるだけさ。俺なり
の二天の呼吸も極めれてねえわけだし」

「親父殿はとつとと嫁もらって引きこもりなつての」

「馬鹿言うなお前、俺みたいないなジジイ、誰がもらうかつての」

「あの一もしよろしければ俺を鍛えてくれませんか！」

そう言うくとレンさんも武蔵さんも目が点になっていた。

「ふーむ、本当に見所ある坊主だなあ。だが……お前さんの呼吸は水なんだろう？だから俺は教えられねえ。俺の二天の呼吸は雷と岩の呼吸を元に作ってるからな」

「私も、水の呼吸は漆ノ型と玖ノ型しか取り入れてないからねえ。一通り型は使えるけ

ど完成度そんなに高く無いし」

そう言いながら謙遜してるけど実際に上弦の参と煉獄さんとの間に割って入った時はすごかった。だからこそ……今度こそ誰も喪わないために。

今回は、俺の実力不足のせいで、煉獄さんも、武蔵さんも喪うところだった。

「ま、と言うわけで私よりかはしのぶ、他だと……蛇柱とかその辺さね。柱じゃ無いところと言うと、伊織だね。けど伊織のところに修行させてもらえるってことは宮本武蔵一門に下るってことになる」

「それでも……強くなれるのなら、構いません……今回で、上弦の鬼が出てきて、俺自身の実力が圧倒的に足りないことを自覚しました。……何か一つできるようになって、またすぐ目の前に分厚い高い壁が……出てきて」

あの時、もし一瞬で強くなれる方法があったら。

もつと俺が強かったら。

そんな後悔がずっとグルグル頭の中を渦巻いていた。

それは伊之助や善逸も同じみたいだった。

「……」

すると、頭に何かが乗る感触がした。そしてわしやわしやと撫でられた。

「ほんつとにいい子だね、炭治郎。うん、そうさね。技の精度とかは私にはどうにもなら

ないけど、基礎なら叩き込んであげれるよ。あ、武蔵一門云々は嘘だから気にしなくていいよ。まあ、体が治つたらだけ。それまではしっかりここで機能回復訓練をやつときな。私はそれまで：おいこらクソ親父。とつとと煉獄家へ行くぞ。お前のせいでやこしいことになってんじや」

「はっはっは！てこたあ結婚のご挨拶か！親同士で取り決めたただけだもんな！よっしやいくか！」

「あんた一回本気でしばいたるか？」

「あ、よろしければ車椅子をどうぞ。シノエ君が色々なものを参考にして作ったものだと思います」

「かたじけない胡蝶殿。よかつたら小僧も来るかい？火の呼吸だがなんだかで知りたいことがあるって言つてなかつたか？生憎伊織のやつは任務に出てるからな。車椅子押してくれると助かる。道すがら、火の呼吸に関して知つてることなら話してやるよ。二天屋敷でそれらしき手記があつたしな」

「え？いいんですか？もしよろしいなら是非！」

煉獄さんにも俺の使つてる舞踊のヒノカミ神楽についてわかるかもしれないから一度来るといいと言われていたし、いい機会だからお邪魔をすることにした。

「てことだからしのぶ、ちよつと出かけるついでに炭治郎借りてくわね」

「はい。お気をつけて。炭治郎君にはあまり無理させないようにお願いしますね」
「そら！とつとと避ける！座れないでしょうが！」

武蔵さんが車椅子に座りレンさんは笑いながら先に外へ向かった。

「よし、お願いするわね」

「はい！」

「…あ、私の着物やら羽織は？」

「それでしたら換えのものを伊織さんが持ってきてくれますよ。破れていましたし、ほとんど血に染まっています、あとは治療の際に破いてしまったので。今はしまっていますけど、持ってきてみましょうか？」

「うん、お願い。炭治郎、私たちもゆっくり外へ向かいましょう」

「わかりました。では…」

しのぶさんが着物を取りに行った後にゆっくりと、できる限り振動などを伝えないように移動する。…そういうえば、目を覚ましたばかりなのにあんなに大声を出したり動いたりして大丈夫なのだろうか。

「武蔵さん、体の方は大丈夫なんですか？ここに運び込まれた時、とても重症だと聞いていましたけど…」

「あー、うん。そうねえ…普通に息する分には問題ないけど全集中の呼吸やったらすご

い痛むわね。あとは……まあそれほどでも、って感じね」

「そうですか。よかったです。シノエさん達の話では後遺症が残るかもって……」

「まあ、残った時はそんなときやそんな時。片腕と脚さえ自由に動けばどうとでもなるしね」

武蔵さんは怪我をそんなに気にしてないそぶりだった。

でも強がりなのがわかった。なんどか咳き込んでいるし、我慢してるような……そんな匂いがした。

「……辛くなったら、いつでも頼ってください。絶対に、助けます」

「おーいうねえ。じゃ、そんなときは頼らせてもらおうかね」

武蔵さんが屈託のない笑顔を見せる。

すごい……美人だなと改めて思う。しのぶさんもそうだけど鬼殺隊の女性の人は皆美人だ。

「はい武蔵さん。道着と羽織です」

「ありがとしのぶ。……ちと肩貸してくれない？炭治郎」

「はい！」

武蔵さんが片足で立ち上がり、右腕で俺の肩を掴む。

そこからまずは青い道着をしのぶさんに手伝ってもらいながら着てその上から紅い羽織を着た。

「…うりや」

「!?」

「あらあら」

すると突然武蔵さんに引き込まれた。なにやら、すごい柔らかいところに。

場所に気づいた瞬間、頭が爆発したような、そんな感じになつて思わず暴れてしまつた。

「んぐつ!? んんつ!」

「おーおー、新鮮新鮮。というか、これが普通の反応よね。うんうん安心した。やつぱり蜜璃とかがおかしいだけよね」

「いやそもそもそんな行為をするのがおかしいのでは?」

「気になる男にやつてみなつて。一撃で落ちるわよ? ほら、しのぶもシノエに…:…いえなんでもありませんごめんなさい」

しのぶさんと何かを話してただけど豊満な…:その、胸に塞がれてよく聞こえなかった。なんとか武蔵さんから離れるも武蔵さんからいたずらに成功したような笑いが聞こえてきた。

「あつははは! 純粋なのもいいわねえ。ますます伊織の媚に欲しくなつてきた。どうよ炭治郎。ウチの継子に嫁がない?」

「普通嫁ぐなんて言わないと思いますが……炭治郎君、無視していいですよ」

「そ、その……伊織さんという方がどのような方かわかりませんが……今俺はその……婿とかそういうのになるのは考えられないので……また後日！お願いします！」

話が飛躍しすぎていたがなんとか自分の考えをまとめようと武蔵さんものぶさんも目が点になっていた。なんでだろう？

「あつはははははは！はー笑った笑った。ひひっ、私の戯言にここまで真面目に返してくれるのは初めてだよ。ひひっ……いったい……」

「大丈夫ですか!?？」

「うん、大丈夫大丈夫。はー、よく笑ったことだし、親父殿も待たせつばなしだからそろそろ行こうか。それじゃあね、しのぶ。今日の夜か明日には帰ってくるわ」

「はい、わかりました。それではお気をつけて」

「ヒノカミ神楽っていうのは聞いたことはねえが『日の呼吸』なら初代が書き残した書物に乗ってたな」

「あ、それ私も見たことあるわ。確か二天の呼吸を作るきつかけになったのがその日の

呼吸の使い手だっけ？」

「そうなんですか？」

「多分坊主が思ってるのは燃えてる方の『火』だ。初代のきつかけになったのはお日様のほうの『日』。なんでも悪鬼滅殺のために生まれた呼吸の、始まりの呼吸」

「あとは痣持ちだとか書いてた気がするわ。…まあ、初代はとにかく斬るのが好きで、言うなれば斬れたら人間だろうが鬼だろうがなんでもいいっていう超やばい人だからね。呼吸を使ってもないのに上弦の壺の鬼と引き分けるところか呼吸まで使えば勝てるとか断言してるし」

「凄い人なんですね！」

道すがらたくさんの話を聞いた。ヒノカミ神楽や火の呼吸については詳しいことはわからなかったけどこのお二方の話は聞いていて飽きなかった。戦国時代最強と謳われた剣豪宮本武蔵の色々な話を聞いた。

他には今の武蔵さんの話やレンさんの話も。

どうやらレンさんは先代の炎柱…煉獄さんのお父さんや他の元柱の方々と面識があるようで、俺の師匠でもある鱗滝さんとも面識があるらしい。今度また話を聞いてみようと思う。

「お、到着だ。ここが煉獄家だ。先日も来たばつかだが…あのバカ、まーた酒を呑みま

くつてんな」

煉獄さんのお家に到着した。玄関には煉獄さんをちよつと小さくしたような子がいた。

「よう千寿朗。また来たぜ」

「あ…レンさん。こんにちは。…その、来ていただいてありがとうございます」

「わかっている、また酒飲んでんだろ槇寿朗のやつ。こないだ来た時に一発シメといたんだけど。治らなかつたか。あ、紹介するぜ。こつちが8代目宮本武蔵。幼名はヒナ。まあ武蔵でもヒナでも好きな方で呼んでやってくれ」

「できれば武蔵でお願いね。ヒナって名前は大事だけど呼ばれ慣れてないのよ」

「んでこつちが竈門炭治郎。前に杏寿朗殿と話してたやつだ」

「あなたがたが…。みなさん、初めまして。煉獄千寿朗と言います炎柱の…兄上がいつもお世話になっております」

千寿朗君が丁寧挨拶をしてくれ、俺も丁寧に挨拶をする。

「お世話になったのは俺の方です。杏寿朗さんには、命を助けられました。お礼をしたいの俺の方です」

「そいや杏寿朗殿はどちらに？…おいコラ、逃げるなヒナ」

「離せ親父殿！恥ずかしくて合わせる顔がないんだっつーの！あんたのせいでなんか気

づいたら結婚の約束取り付けられてるしさ！あーもうやだ！なんで私がやってないのに私が一番恥ずかしがらにやならんのだ！」

「うっせえ！お前が杏寿朗殿にどれだけ思い寄せてたかは粗方暴露してるから諦めろ！」

「待ってそれ初耳。親父殿、本気で斬り飛ばすよ？」

「ちよつ、二人とも落ち着いて」

「そ、そうですよ…。武蔵さんがどれだけ兄を慕ってくれてるか聞いて、凄い…嬉しかったです。兄は、こんな凄い方に好かれるほど、凄いのだと」

「……………っ！」

あ、武蔵さんの顔が真っ赤になった。

そんなことを思っていると玄関が思い切り開いた。

「うるさいぞ！家の前でガヤガヤと！」

「おー榎寿朗。お前何また昼間から酒に溺れてんだ。自分の無力さに負けるのもその辺にしとけよ。そんなだからなあ…」

「っ、何の用だ宮本武蔵」

そこから出てきたのは煉獄さんを大きくしたような、そんな人だった。手には酒を持っている。

「何って愛娘の結婚についてのご挨拶。前来た時その話したろ？」

「ふん！そんなものしに来なくていい！第一大した才能も…」

そこから何かを言おうとした時に俺を見て止まった。

「お前…そうか、お前…」

「？」

「おい槇寿朗？」

「!?？」

「『日の呼吸』の使い手だな！そっだろっ！」

「…？日の呼吸？なんのこと…ですか。俺は…」

答えようとした瞬間に首根っこを持たれ地面に叩きつけられた。

「が…」

「おい槇寿朗。いい加減にしとけ」

「…っ！」

「炭治郎、大丈夫？」

でもその押さえつけもすぐに解かれた。レンさんが何かをしたのは見えたが速すぎ

て何も見えなかった。

「かはっ…はっ、はっ」

「いきなりどしたんだお前さん」

「…その坊主は、俺たちをバカにしているだろう?」

煉獄さんのお父さんから言われたのはその言葉。思わず反論する。

「なんでそうなるんだ!何を言っているのかわからない!言いがかりだ!」

「お前が『日の呼吸』の使い手だからだ。その耳飾りを俺は知っている。書いてあった」

日の呼吸?まさか…ヒノカミ神楽のこと?

「槇寿朗、それ以上妄言を垂れ流すんじゃないやねえ。見苦しいぞ」

「黙れ!日の呼吸は始まりの呼吸!一番初めに生まれた呼吸、最強の御技!そして全ての呼吸は日の呼吸の派生!全ての呼吸が日の呼吸の後追いに過ぎない!日の呼吸の猿真似をし劣化した呼吸だ!炎も水も風も全てがだ!お前も知っているだろう宮本武蔵!二天の呼吸も始まりの呼吸の使い手と同じ時代の剣士、初代宮本武蔵が作ったのだからな!」

「あー知らん。てかどうでもいいわ。呼吸が最強だとかなんだとか。俺の持論としては強さの強弱を技に関していうのが俺の理念から外れてるからな。結局はそれを使いこなせるかどうかだ」

何を…言つて。ウチは代々炭焼きだ。家系図もある。いやそれよりも…そんなことよりも…

「日の呼吸の使い手だからと言って、調子にのるなよ小僧！」

「乗れるわけないだろうが！俺が今自分の弱さにどれだけ打ちのめされたか！」

「…全員、一旦黙れ」

怒りと後悔のまま、榎寿朗さんに頭突きをしに行こうとした時だった。急に胴体を斬り落とされたような、そんな錯覚に陥った。

「はい、一旦落ち着いた？先代炎柱殿。8代目宮本武蔵。現二天柱をさせていただきます。今日伺ったのは親父殿が結婚の取り決めをしたことに対しての私の言い分を言いたかったのと、後は貴方にお礼が言いたかったからです」

「聞かん！とつとと帰れ！杏寿朗も欲しければくれてやる！」

そう言つて榎寿朗さんは屋敷の中へ戻つていった。

「…その、申し訳ありません皆さん。せっかく来ていただいたのに…」

「構やしないわよ。…てか、え、なに。結婚してしまうのはもう必然？いや別に嬉しいっちゃ嬉しいけど…ブツブツ」

「あー。気を悪くするなよ坊主。榎寿朗は本来もつと優しいんだ。あいつ、柱時代にちよつとな、心に深い傷負つてんだ。それからあんなになつちまつてな」

「は、はい……」

レンさんにそう言われる。…考え得る限り最悪な出会いになってしまった。

「千寿朗君、もし良かったら伝えておいてくれない？ 私は貴方の息子のおかげで命拾いをした。貴方の育てた息子のおかげで。もし杏寿朗がいなかったら今頃私は死んでた。私だけじゃない。大勢の命まで奪われてた。貴方も…貴方の息子も、立派な人だ、つてね」

「は、はい。分かりました」

「さーてと帰りますか。親父殿は二天屋敷へ、強制送還で。悪いね炭治郎。せつかくついで来てくれたのに」

「いえー！日の呼吸…ヒノカミ神楽がどういったものなのか少しでもわかっただけでも良かったです」

「あの…その、日の呼吸に関しては分かりませんが…父がよく読んでいた書物に心当たりがあるので、それを読んでみてまたわかったことがあれば鴉を使って連絡をします」

「はい！お願いします！」

こうして煉獄家でのちよつとした波乱な一日は終わった。

…ヒノカミ神楽がそんなに凄いものなら、あの時…

拾・偶にはお館様と一緒にby武蔵

煉獄家で一騒動起こした後、親父殿と一度二天屋敷に戻った。その最中に鴉をお館様に向けて飛ばして。

「えーと…確か…炭治郎、その柵に置いてある左端のお酒とその隣にある…確か紅茶とか言つたつけ。それ取つてくれない？あとはその下の段の右端にあるやつ」

「はい！これですか？」

「うん、ありがとう」

「カァー！二天柱！お館様ガ！御許可ナサレタ！隠ヲスグニオクル！」

「おつ、やったね。久々にお館様と一緒に呑める」

お館様は体を弱めておられるけど、このお酒は度数自体も1%程度の、いわゆるお酒を飲んでするような気分が味わえる程度の、酒とも呼べない代物だが、お館様にはこれくらいがちょうどいい。

日本酒とか持つて行きたいが、それだと悪化させかねない。

「炭治郎の護衛は…伊織！いるんでしょ！」

「はいはい、大声出さなくても聞こえますって」

「三つくらい隣の部屋から伊織が渋々やってくる。格好から見ると：書道でもやっていた？」

「伊織、この子は竈門炭治郎。私はお館様のところに用事があるから蝶屋敷まで護衛しただけ」

「わかりました。：そういうえば師範。貴女これからどうするんですか？」

「ほ？どうするとは？」

「柱ですよ。その体でどうするんですか。あと宮本武蔵の名も」

「もちろん続けるわよ。どっちもね。片腕潰れた程度で剣の道をやめるかっての。柱も、宮本武蔵も、あと10年は続けてやるわ」

伊織は呆れた顔をしてため息をついた。おい、仮にも私は貴女の師匠だぞ。

「ああ、やつぱりな、という意味のため息です。やつぱり貴女は刀バカですよ」

「刀バカ!?？」

酷い言われようだ。これでも甘味処にも目がないのですが。

「あ：甘味処で思い出した。桜餅持って行こつと。蓄えまだある？」

「はい、恋柱様が来た時用のものがまだ数箱。近日中に遊びにくると知らされていたので」

「よし、そんじゃ10個ほど包みに入れて。それも持っていくから」

「はい。最後に師範」

「ん？」

「…本当に、本当に良かったです。あなたが生きておられて。鴉で知らされた時、師範だからどうせ大丈夫と、そう思い加勢に行こうともしませんでした。あの時の私は、人生で一番の恥です。本当に申し訳ないです。これからも、貴女の元で精進します」

「んーまあ、はい。あんま気にしなくていいわよ。でもまあ、『失敗した』と自分の中で認識できてゐるならそれはそれでよろしい。伊織、貴女は紛れもなく天才よ。肉体的な才能から技術的な才能まで。おそらく私や親父殿なんかよりもね。でも天才が故に失敗を知らなさすぎる。失敗のなさはこの先の油断につながる。…まあ、私が怪我を負う程度で伊織がそう感じれたならいいわ。ほんじゃ、炭治郎は任せたわよ。その隠の人。もう大丈夫よ。出てきて」

庭で隠れてた隠の人を呼ぶとたいそう驚いて出てきた。

え？なんで分かったって言われても気配隠れてないとか言えない。

だからそんな人外を見るような目はやめなさい。

「それじゃ、お願いします」

「はい。お任せください」

炭治郎を伊織に任せ、私は隠の人に背負ってもらい（もちろん女の人です）お館様の

いる産屋敷まで向かった。車椅子なるものも運んでもらってるから相当大変だと思うので本当に申し訳ない。

「着きました。二天柱様」

「おーご苦労様です」

車椅子に座らせてもらい、目隠し、耳栓、鼻栓を取るといつものお館様の家が。

ああ、柱合会議以外で久々に来た気がする。

「ようこそ、二天柱・新免武蔵守・藤原玄信殿。お待ちしておりました」

入り口から出てきたのはあまね様。お館様の御内儀（妻）だ。

「そんな堅苦しくしなくていいですよ。どうか、幼少の頃のようにしてください」

「…それでしたらこちらもです。ヒナ、どうか昔のようにしてください」

「はい」

あまねさんに車椅子を押ししてもらいながら耀哉さんのところへ向かう道すがら、世間話に花を咲かせる。本当は自力でも動かせるのだがあまねさんがやってくれと言っ

てくれたのでお言葉に甘えることにした。

「お館様…耀哉さんの体調はどうです?」

「今日は元気なほうかと。ヒナが意識不明だと聞いた際、ひどく取り乱していましたが」

「う…それは申し訳ない。上弦の鬼複数とまた鉢合わせるとは思いもしなかったので」

「それでも『生きてるだけ儲けもの』…でしたっけ?」

「はい。あと甘味があれば最高」

「ふふ…やはり剣に目がないとは言えど貴女も女ですね」

「どういうことですか?」

「私はあまねさんに何と思われていたのだろうか。」

「あなた、ヒナが来てくれました」

「ああ…よく来たねヒナ。君が死ぬかもしれないと伝令をもらった時は、本当に心配し

たよ」

「ええ、御心配をおかけしました」

御息と御息女に支えられながら耀哉さんが立ち上がる。

うん…柱合会議の時よりもちよつと体調良くなってるのかな?

「今日はまた、どうしたんだい?」

「ええ、たまには一緒に…一杯、どうですか?あまねさんや息子さんたちも一緒に」

「…これは、お酒かい？」

「まあ、酒もどき、みたいなものです。度数も1%あるかないかなのでとても飲みやすいですよ。本当は日本酒とか私オススメのお酒も持ってきたかっただんですが、耀哉さんの体を余計に悪くしてしまつては元も子もないので。あ、息子さんたちにはこつちを。二天屋敷で取れた果実を使った飲み物です」

耀哉さんとあまねさんには持つてきたお酒もどきを注ぎ、御子息さん達には果実を使った飲み物を注ぐ。

「…うん、美味しい」

「本当です。凄く飲みやすい」

「これ、甘くて美味しい」

「うん」

「それは良かったです」

みんなに好評でよかった。これで口に合わなかったら目も当てられない。

「そしてこれは桜餅です。恋柱の瑠璃がよく好んで食べてるものです。私もお気に入り

の甘味です。多少甘さは抑えますがお酒のつまみにはちょうどいいかと」

みんなで飲みながら桜餅をゆつくりと味わいながら食べてゆく。

嗚呼……心が安らぐ。

「そういえば、継子の伊織はどうだい？まだ譲らないのかい？」

「あつたりまえですよ。伊織が天才とはいえ、私にまだ勝てないうちは譲りません。何より私も今回の件で余計にやめられなくなりましたし」

「上弦の弐、参と対峙。そして生き残り誰一人として被害を出さずして終わる。……素晴らしいよ、ヒナ。君は私達の誇りだ」

「やめてください。恥ずかしながら、我を忘れていたのです。とにかく杏寿朗を生かすことだけを考え、更に怒り、憎しみという感情に身を任せたのですから。冷静に対処さえすれば逃げ切ることなど造作もないはずでした。弐、参の二人はとにかく仲が悪かった様子なので」

「そうか……それがわかるだけでも十分だ。……今の柱でこれだけ上弦の鬼に遭遇してるのは君とレンさんくらいだろうね。これも宮本武蔵の一族の宿命なのかな？」

「どうでしょうね。歴代の宮本武蔵は初代が上弦の壱と引き分け、そこから幾度となく鬼狩りをして上弦の鬼を潰してきていましたから。鬼舞辻にとつては宮本武蔵は目の上のたんこぶだったんでしようし。だからこそ、親父殿を上弦の鬼三匹を使って殺しに

きた」

「そしてレンさんはそいつらを退けた」

「正確には増援を呼びまくっていただけなんですけどね。あと持久戦をひたすら。陽の光および増援が大量にくると悟った鬼どもは尻尾を巻いて逃げただけのことです」

「ヒナ、これだけ上弦の鬼を見てきた君から教えてくれないか？今の柱達は、上弦の鬼に通用するかい？」

「はっは、お館様ともあろう方がなにをそんな気弱に考えてらつしやる。大丈夫ですよ。今のメンツなら、上弦の鬼は潰せる。誰一人欠けることなく、ね。まあ、私…というよりは宮本武蔵一族の目的は上弦の壺を斬ることなので。他の上弦の鬼は皆に任せますよ」

「上弦の壺もかい？」

「ええ、しのぶ達蝶屋敷の人がきつと成し遂げてくれますよ。そういえばシノエと改めて会ったんでしたっけ？彼、どうでした？」

「とてもいい子だよ。眼が特徴的だが、それ以外は普通の、恋する人そのものだ。眼は、怪我をした際に虫が入り込んでしまっただとか、そんなことを言っていたね。海の外にも何回か言ったことあるらしくて面白い話が多かったよ」

「へー。ダチュラって言うアサガオの毒とか確か海の外のものって言ってたっけなあ」

「今回ヒナの治療にも一番貢献したのはシノエとしのぶと聞いているからね。また近いうちに褒めようと思ってるよ」

「相変わらずお優しい」

「ヒナ、こちらの飲み物は？」

「紅茶っていうものです。瑠璃にもらったものなんですけど、ドーにも私の口には合わなくて。英国でよく飲まれてるものらしいですよ。あまねさん達のお口に合えば、と思いますして。飲んでみますか？」

「はい。是非」

「それでは僭越ながら……はい、どうぞ」

「ありがとう。……甘くて、美味しいですね。でもちよつと甘過ぎるのかしら？」

「確かに……ヒナが苦手というのも頷ける」

「桜餅とかおはぎならいけるんですが、この紅茶つてのは元から甘いのにそこから更にお砂糖とか入れるそうなので、一度瑠璃の飲んでるものもらったんですが、思わず吐き出しちゃいました」

「確かに昔から味の濃過ぎるものは苦手だったね。……そういえば、ネズミはもう平気かい？」

「づつ……その、触る程度なら……まだ、なんとか……。ただ、あの記憶がドーしても……」

「ああ、確か髪の中に……」

「それ以上は言わないでください。天元の飼ってるネズミも未だに苦手なんです」

「はは、でも他の小動物はいけるのだろうか？」

「それはもう。犬猫とかもう至福です」

「ごめんね、私の体が悪いせいで、叶えてやれなくて」

「構いませんよ。耀哉さんのお身体が悪いのは承知してますから。拾われた身とはいえその程度は承知してます」

「……ああ、もう無くなつてしまつたか。まだ楽しみたかつたんだけど……」

「またすぐにお伺いしますよ。次は別のお酒を持ってきましようかね。次会うときはもっと体調をよくされてるでしょうから？」

「ああ、勿論だよ。次会うときは完治させておくさ」

「言いましたね？私、約束事にはうるさいですよ？」

「ふふ、私が約束を違えたことがあるかい？」

「ありませんね」

「だろう？心配はいらないさ。ここは優秀な子達を守つてくれているし、もし鬼舞辻無惨が自らきたとしても君が守つてくれるんだろう？」

「私だけじゃないですよ。他の柱もみんな駆けつけます。耀哉さん、貴方はそれほど今

の柱に慕われているのですから。それに：私はもう二度と仲間を、家族を殺させる気は無いので。私の救える命には限りがありますが、それでもこの手が、足がある限り守ってみせますよ」

「ふふ、期待してるよ。それにしてもヒナ、なんで柱合会議をサボりがちなんだい？」
「ぐつ…：そこでそれを聞きます？」

「ああ。ヒナが遊び歩くのが好きなのは知ってるが、あまりにもサボるだろう？」

「…今の柱の子達が優秀なので私がいなくても大丈夫だろう、と」

「本当は？」

「ただ、杏寿朗と顔を合わせた時に感情を誤魔化すのが辛いのとあとは蛇柱が嫌いというかなんというか…」

「ふふ、正直だね。わかった。伊黒にも言っておこう。けどヒナも周りにしつかりとやってる態度を示そうね。遊んでるわけじゃ無いのはわかるけど、他の者からみたら不真面目に見えるからね」

「わかりました。…それじゃあ私はこの辺で。楽しかったです耀哉さん」

「こちらこそ。また来ておくれ。家族一同で歓迎するよ。次は伊織やレンさんも誘ってね」

「親父殿はともかく、伊織は考えておきますね」

拾壹（11）・特訓開始by武蔵

（柱合会議）

「みんなよく来てくれたね。また顔ぶれが変わらずに行えて嬉しいよ。さて…今回の議題だけどまずは先に杏寿朗、ヒナ」

「はい」

「今回の任務、本当にご苦労様。君たちのおかげで数百人もの命を救えた。対峙した上弦の鬼はまた襲ってくるかもしれないから、注意しておくようにね。それと…ヒナはこの先、どうするんだい？シノエによると左腕はもう動かないだろうか？」

「右腕が残っております。それに策がないわけではありません。今の呼吸を少し変え、今の状態で扱えるようにしていきます。刀の方は二本とも無事なため、宇髄と同じような形態へ改良してもらおうよう専属の刀鍛冶には言いつけております。シノエによると後数月もすれば前線へ出られますので、それまでは十分休養をとり修練を積みます」

「そうか…無理はしないようにね。それと杏寿朗」

「はい！」

「ヒナと婚姻を結んだんだって？」

「はい！武蔵殿から告白をされましたので受けました！ただ、夫婦となるには鬼を全て滅殺してからと約束をしております！」

「ちよおおお!!それ秘密だつて！みんな秘密だつていったじゃん！なんでえ！なんでえ！お館様あ！杏寿朗もなんでバラすのよお！」

「いやなに、いいことだと思つてるからね。それに守るべきものが増えれば人はその分強くなれる生き物だと私は思つてゐるからね。鬼殺隊の中で恋愛を禁止してゐるわけでもない。みんなは鬼殺隊員である前に一人の人間なんだ。だから…この二人のことで反対はあるかもしれないが、認めてあげておくれ。それに君たちにも大切な人を作ることを、私は推奨したい。今は無理でも、いつか必ず、素敵な人と出会えることを、祈つてるよ。私とあまねみたいにね。」

…さて、それでは本題に入ろう。まずは…」

↳柱合会議後

「…」

「どつたのさ、さみね実弥。そんな気配殺しちゃつて」

「いや…その武蔵さん。前回の柱合会議の時は、すみませんでした」

風柱の傷だらけの男、不死川実弥が開口一番でそう伝えてくる。

まあ前回は分からなくはない。柱のみんなならばお館様のすぐそばに鬼がいるとなればああなる。

この子は、根はとても優しい子なのだ。

「構やしないわよ。私だつて、前もつてお館様から容認されてるといふのを知らなけりや実弥以上に手早くぶつた斬つてたわよ。それにしてもすまないわね。手合わせしてあげるつて約束だったのにな」

「それは構いません。…御身体の方は？」

「左腕二度と動かず右眼視力二度と復活せざらしいよ。あ、それはそうとこの眼帯かっこよくない？自作したんだけどさ」

藤の花を象つた眼帯を指差しながら言うとお実弥も笑いながら答えてくれる。

「…はい。俺もそう思います」

「ニシシツありがとね。ああ、実弥に教わつた風の呼吸、今回実に役に立つたよ。ありがとうねえ」

「それは、何よりです」

く蝶屋敷までの道く

「あーっつつかれたあ」

「脚も完治していないのによくもまああの姿勢を貫きましたね…」

「流石は武蔵さん。規格外ですね」

「まっつ、しのぶに至っては軽くバカにしてきてない？」

「いえいえ？そんなことはありませんよ」

帰り際、もう脚が限界を迎えていたので隠の人と別れてからは車椅子を使わせてもらった。

あと数週間もすれば脚は完治なので、行きと会議の間は耐えていたがとうとう悲鳴をあげた。

…こんな調子で大丈夫かね。しばらくは伊織も共に柱合会議の場に出して私に万が一があつてもすぐ交代できるようになっていう計らいはしてくれたけど。これ…戦線復帰予想よりかかりそう。

「…言っておきますが、貴女の回復速度は異常ですからね。本当なら呼吸を使って剣を振るうことすらあと一月は最低でも安静にしてなきやならないはずなんです。それを貴女は…」

「目を覚ましてたつた3週間で立ち上がり呼吸を用いて剣を振るつた。それを鑑みて完治までの予測を測り直したところ一年から半年へ」

「それに関しては私も何が何やら。いっぱい食べて思う存分寝たから？」

「…それでそこまで完治が早くなるなら苦労しませんよ…」

シノエが呆れた眼で見ってくる。いや、そう言われましても。傷が治りやすいのは昔からでございまして。

「なんか…また屋敷が…騒がしい」

「アオイは頑張ってますね。また今度お休みをあげないと」

屋敷の方では…確か善逸？だっけな。その子の声とアオイの怒声が響いている。

いつもどおりなら、また善逸が盗み食いをしてアオイに見つかって辺りだろう。

「はー…流石にそろそろシメた方がいいかしらね。私がありがとうとか言っちゃつたせいもあるだろうし。あの子、可愛い女の子と自分自身に対してだめちや甘くなるし」

「そうですねえ。…なんですか武蔵さん、その邪悪な笑みは」

「え？何でしょうかしらねえ」

言ったらあの子耳いいしすぐバレるからね。今は内緒。

「ただいまー」

「帰りましたよ」

「…帰った」

「おかえりなさいませ皆様！夕餉の用意ができてます！」

「ありがとうございます」

「いえ、カナヲも手伝ってくれました！」

「あらあら。ありがとうございます」

まず出迎えてくれたのはアオイとカナヲ。しのぶがアオイとカナヲを撫で、二人は顔を赤くしていた。

眼福眼福。

「ん…カナヲ、手、どした？」

「そ、その…料理中に、切ってしまいました」

「そうか…まずは治療から。そのくらいの切り傷でも処置をしつかりしないと後々痛い目見るよ。ほら、こっちに」

「は、はい」

カナヲの指に巻かれた不恰好な包帯に気づいたシノエが、別室へカナヲを連れて行っ

た。

「さて…夕餉が終わったら…楽しい時間さね」

「っ!?」

武蔵が笑った時、炭治郎と善逸は寒気がしたとか。

「はー食った食った！美味しかったよアオイ、カナヲ」

「ありがとうございます！」

「（ペッコツ）」

「さーて、腹ごしらえも済んだとこだし、炭治郎たちのところに行ってくるわ」

「何をなさるんです？」

「炭治郎からお願いされてるのよ。特訓してくださいってね」

「……」

まった、何でそんな不安そうな目を向ける。

「聴きたいですか？」

「やめとくわ。なんか心に傷を負いそう」

「わかりました。あの子達も重症患者だったのであまり無理させないようにしてくださいね？」

「シノエとしのぶいるから多少無理しても大丈夫よ。それじゃ行ってくるわ」

手すりを持ちながら何とか自分の足で炭治郎達のいる部屋へ向かう。

やっぱりもうちよつと安静にしてるべきかしらね？

「それはそうと、炭治郎、善逸。いる？」

「あ！武蔵さん、お帰りなさい！」

「ただいま。さて、炭治郎が言つてた特訓なんだけど、今日から始めようと思うの。
いっしょ。」

「はい！俺は構いません！」

「待てや炭治郎！お前いつの間に武蔵さんとそんな約束してたんだお前！ふつぎけんな
よー！」

おそらく、私と鍛錬できることを羨ましがってるのだろう。聞くとところによると、初めてやった機能回復訓練の時もアオイ達と戯れている（ボコボコにされている？）炭治郎を羨ましがっていたらしいし。

そんなにやりたいならやらせてあげましょう。

「そ。それじゃあ善逸も一緒にやると言うことでいいわね？ いやあよかったよかった。善逸も誘うつもりだったから。しのぶにも頼まれていたしね」

「え？ 武蔵さんそれはどう言う……」

「身に覚えがない？ ほら、一発シメといてと、言われましたのでね？ まあ、やるなら有意義なものをした方が良いでしょう。それじゃあ炭治郎と善逸は刀持つて庭に集合！」

「はいー」

「いや、ちよ…俺やるなんて…」

「面白そうだな！ 俺もやる！」

「おうおう、伊之助も是非来なよ。きつと面白いよお〜」

「こうして3人もまとめて見るこことなりました。」

「特訓内容は単純明快。実戦形式。以上。ただし私と1対1^サ1^シだけどね。何でも使ってきた。私から一本取れたら合格。もし取れなければ明日さらにキツツイ特訓を課すからね。まずは炭治郎から」

「はいー」

「嫌だ、嫌だよ……何をする気なんだ!?!?」

「ふん! 絶対に勝つてやる! 屈辱は晴らすぜ!」

まず炭治郎は水の呼吸を使ってきた。ヒノカミ神楽はやらないのかね? まあいいけど。

「……雷の呼吸・壱ノ型『霹靂一閃』」

「え?」「へ?」「ん?」

私の二天の呼吸・壱ノ型の元となった技を繰り出し、炭治郎の足を掬い上げ、転倒させる。

「いったいなあ……でも何とか……。さて、まだまだいけるわよね? どんどんきなさいな」

「は、はい!」

「すごい……」

「紋逸が使つてたやつじゃねえか」

「水の呼吸・漆ノ型……」

「風の呼吸・式ノ型……」

「さー善逸くん? 君は一発シメといてとのお達しなので炭治郎以上に厳しく行くよお」

「ひうつ!?」

ありや、炭治郎がへばった後に善逸の方を向いて、殺気をつよーく込めて言うど気絶しちゃった。…どうしましょ。

「…ん?」

なんて思ってたら善逸は起き上がった。そして構えるは雷の呼吸の壺ノ型。

「へえ…最大限まで雑念を消した時だけこの威圧。いいねえ…。そんじゃあこちらも…水の呼吸…」

「アーー痛い痛い!善逸やればできるじゃん!いいねえ!それじゃ最後伊之助!全力できなさい!私も二刀流らしく、二天の呼吸でやってあげるわ!持ち方ちよつと違うけどね!」

「おう!目に物を見せてやる!」

伊之助相手は、刀を二本、柄を同時に持ち上下に刃が伸びているように持つ。実際は柄の末端同士が鎖でつながっているのだが。

結果は：まあ言うまでもないとは思うけど全員不合格。てことで全員山籠りしてもらいましょか。

ただ、色々な呼吸法を矢鱈と使いまわしたからすぐに体にガタがきた。具体的にはもう立てない。

「む、武蔵さん。大丈夫：ですか？」

「ん？あー、ちよつと手伝つてくれると嬉しいかな」

復活した善逸君がこつちを見て心配そうに声をかけてくれたのでそれにあやかり、肩を貸してもらおう。

車椅子に座らせてもらい、そのまま蝶屋敷の中へ運んでもらおう。

あと私の胸がどうかしたのかね？

「それはそうと：元鳴柱殿の桑島慈悟朗さんはまだお元気で？善逸君、桑島さんのところで修行してたでしょ？」

「え？何で知ってるんですか？」

「まーうん。癖？というか、桑島さんのところで修行してた子、わかりやすいのよ。満遍なく伸ばしてるんじゃないくて、得意なことに特化させた育て方というか。善逸君はすごいわ。杵ノ型をあそこまで極めてるの私見たことないもの」

「え？いやいや、何をいつてるんですか。俺なんかが…」

「ほーう？私の頬に傷をつけたのはどこの誰かなあ？」

「いやそれ絶対炭治郎か伊之助ですって！俺じゃないって！」

まったく、善逸は自分のスゴさを自覚したほうがいい。

「いい？善逸。呼吸なんて一つの型を極限まで極めれるだけでも凄いよ。使いやすさで言えば水の呼吸、風の呼吸とその派生。雷の呼吸は私の体感だけど一番難しい。その中でも壺ノ型『霹靂一閃』は全ての型の基礎であるが故に一番難しい。それ一つだけ使えりや万々歳なのよ。それにね…善逸。あんたの壺ノ型は今いる剣士の比じゃない。

断言してやるわ。今いる雷の呼吸の中で善逸の壺ノ型が一番いい」

それを伝えると善逸は明らかに照れていた。うーん。私の胸と会話してるかのような目線じゃなけりや可愛かったのにな。

「あ…じいちゃんと面識あるってことは…武蔵さん、あの…かいがく 獺岳って人、知ってますか？」

「獺岳？えーと…確か柱になった後に御礼を申し上げに行つた時にそんな名前が出たよ。うな。えー…ああ！思い出した。やつたら自慢されたわね。獺岳はすごいって。悪さはするけれど努力は人一倍する子だつて。獺岳を初めみんなわしの誇りじゃ、とか言つてたかしらね」

「…そう、ですか。ありがとうございます」

「?なぜ善逸君が御礼を?」

「その…なんとなく…兄弟子が褒められてるのを聞くと…うれしいというか」

「あーなるほど」

確かにその気持ちはわかる。私も伊織や親父殿が褒められるとうれしいもの。

「さ、それはそうとみんなを蝶屋敷に運び込むわよ。私は車イスで戻るから、善逸君はアオイたちを呼んで運ぶのを手伝いなさいな」

「はい、わかりました」

(ヒナ、炭治郎たちを、あの子たちの世代をよく見てやってくれ)

(…?どういうことですか?)

(あの子たちは、きつと今の流れを変えてくれる子供たちだ。そんな予感がしていてね。今の柱の子たちももちろん信用しているよ。特別扱いするつもりはないけれど、あの子たちの面倒を、よく見てやってくれ。きつとヒナも得られる物があると思うよ。カンだけどね。あの子たちなら、無惨も倒せるかも知れない)

（……）

（ヒナ？）

（…はい、わかりました。お任せください）

「……」

夜、縁側で瞑想をする。最近、修行にも雑念が入りすぎているから初心に戻るという意味でもより繊細にやらねば。

「やあ武蔵殿！体調はいかがか！」

「んー、普通。ただやっぱりいきなり型を変えたから体が追いついていないわね。で、何の用？杏寿朗」

「親方様からな！武蔵殿がもしかしたら落ち込んでるかもしれないからと言われてな！
励ましに来た！励まし方はよくわからないが！」

…相変わらず、杏寿朗らしいというか。

それでも私の方が年上なんだけどなあ。

「そ。ならちよつとだけ付き合いなさいな。なに、単なるお姉さんの愚痴よ」

「うむ？俺でよければいくらでも付き合おう！」

「ありがとう。」

…前にね、お館様のところで一杯、やってきたのよ。と言つても、軽いお酒とか、桜餅とかを囲んだだけなんだけど。その後、お館様に、言われちゃったのよ。

『炭治郎達の世代を、よろしく頼む。きつとあの子達なら、無惨を倒せるかもしれない』つてね。

…それを言われた時に

どうしようもなく

悔しくて

悲しくて

自分を責めたのよ」

本当に、くだらないと思う。それでも、自分を責めずには

上弦の鬼数匹を、また逃してしまったことを、責めずにはいられなかった。

きつとそんなことはお館様は思つてすらいないだろうに。

こんな下らない愚痴を聞いても杏寿朗は真摯な顔で、黙つて聞いてくれている。

「私自身、鬼の滅殺は、鬼舞辻無惨の滅殺は、ある意味目標の一つでしかないのよ。

私の夢は、初代宮本武蔵すら超えるほどの剣士となり、名を轟かせたい。日本中だけ

じゃない、海の外にすら、私という存在を、最強の剣士として、轟かせたい。

その一環で、初代宮本武蔵が引き分けたという上弦の壺の鬼の滅殺を第1の目標。それすら超越していると思われる鬼舞辻無惨の滅殺を第2。そう決めてるんだけどね。

…要は、自分の弱さが憎い。

上弦の壺どころじゃない。弐や参ですら、手こずっている今の現状が、とてつもなく憎い。

しかも右眼と左腕が欠けるおまけ付き。

お館様にも、期待をしてるって言葉を、投げかけてもらえない。

…ねえ、杏寿朗。どうしたら、強く、みんなに頼ってもらえるような、そんな風になれるのかな」

そんな私の声は、虚空に消えた。

まあ当然だ。

いきなりこんなことを言われて直ぐに答えられる方がすごい。

…幻滅、されたかなあ。

その日は、手短にお礼を言って、杏寿朗の前から私は姿を消した。

もう今日は顔を見られなくなかったから。こんな醜い私を。

拾貳（12）・みんなで山籠りだそうですby炭治郎

「はい、みんな小刀持った？持ったわね？よし、今から山籠り生活行ってみよー！」

「山なら俺に任せろお！」

「ねえなんで？なんで山？」

「（本格的に特訓してくれる…！気を引き締めないと！）」

どうやら小刀一本で山籠りをするらしい。特訓はこれだという。

「はいー！」

「ええ…まって、俺に死ねっていつてるようなもんじゃん」

「いい度胸だ！山の王の俺が返り討ちにしてやるよ！」

伊之助は山育ちということもあってすごい自信あるようだ。俺も鱗滝さんの所で山の修行はたくさん積んだし、家も山の中だったから山籠りは慣れてる。

「そう邪険にしなさんな善逸。山籠りって言っても期間無期限なわけじゃない。山から降りれば終わりよ。まあ、最長でも一月だけど」

「ええ？」

「はあ？」

武蔵さんの言葉に俺も善逸も伊之助も疑問の声を上げてしまった。だって。山から降りれば終わりって……。

「ま、簡単に降ろすわけないわよ？ 伊織ー！」

「そんな大声をあげなくても聞こえてますよ」

武蔵さんが呼んだのは以前蝶屋敷へ帰るまで護衛をしてくれた人。確か武蔵さんの継子で、宮本伊織さん。武蔵さんの装いの色が逆転していて、紅い道着に青い帯を巻いている。腰に帯びているのは二本の刀で、柄の末端同士が鎖でつながっている。黒よりの茶色い髪を肩までの短めの髪にしている瞳の色は、深い藍色。

前会った時もあったがやっぱり綺麗な人だ。

「伊織、あんたは今から門番。この3人を山から下ろしたらダメ。日輪刀は、まあ念のため持つのは許可するけど基本使わないこと。鬼が来た時のみ使うことを許可します。一月の間、この3人を山から降ろさなかったら伊織の勝ち、降りられたらこの三人の勝ち。無論、敗者にはそれ相応の罰を与えます。わかった？ もちろん褒美もあります。勝った方に好きなものを与えましょう。そうね…私のお給金で揃えられるものに限定はされてしまうけど」

「はこ」

「はこー！」

「ええ……」

「おう！」

「尚、出口はここのみ」

そうして武蔵さんが示すのは、看板が立っている一本道。

「3人は最終的にこの道を通ればどんな手を使っても構わないわ。それは伊織も同じ。下ろさないためなら日輪刀以外の全てを以つてこの3人を下ろさないこと。いいわね？」

「はい」

「おう！」

「……」

今だに善逸だけは怯えているが、これをこなせたら強くなれる、そう信じる事ができた。だからこそ、本気でやらないと！

「で、8代目。これからどこに？」

「音柱のときさね。岩柱のときでもいいけど、私は音柱の方がやり方的にも、考え方的にもあつてる」

「そうですか。それならば丁度良かったです。7代目から言伝です。『ちよつくら現岩柱に会つてくる』だそうです」

「はいよ」

そうして武蔵さんは山を下っていった。

「玄弥、今日の修行はここまでだ。今なら身なりを整えなさい」

「え？」

「今から客が来る。粗相のないようにせねば」

「客？それって一体……」

「名は聞いたことあるだろう。宮本武蔵だ」

「っ!? それって戦国の世で最強と名を轟かせていた!?？」

「そうだ、その宮本武蔵の7代目がもうすぐ来ると連絡があった」

「……!」

「む、噂をすればなんとやら、だ。玄弥、で迎えに行こうか」

「は、はい!」

「お待ちしておりました、7代目宮本武蔵殿」

「やめいやめい。相変わらず堅つくるしい。もつと気楽にしてくれや。それにオレアもう宮本武蔵じゃねえ。単なる剣士のレンだ。今日はご指導ご鞭撻のほど、宜しく頼むぜ？ 岩柱殿」

「こちらこそ、かの有名な宮本武蔵の名を背負った方と手合わせをしていただけるとは、恐悦至極。ああそうだ。武蔵……レン殿。こちらは私の継子の玄弥です」

「は、初めまして！お、お噂はかねがね！」

「おうおう、初めましてだ。オレはレンってんだ。宜しくなあ玄弥殿」

「は、はい！」

「それじゃ、早速だが始めさせてもらうぜ。岩柱殿」

「ええ、いつでもどうぞ。玄弥、武蔵殿をよく見ておくんだ。きつとお前に足りないものをわからせてくれる」

「はい！」

「ちーつす、天元」

「おう、よくきたな武蔵。で、またか？」

「そうそう。ほら、とつと日輪刀抜きな。私の相手しろやい」

「そう急かすなつての。定期報告がもうすぐ来るはずなんだよ」

「ああ、なんだつけ。どつかに嫁さんを3人も送ったんだつけ？」

「ああ、花魁のところにな。……だが、定期報告がつい先月途切れた。今まで途切れさせたことなかったあいつらが」

「……3人中、何人が？」

「全員だ」

「……そ。無事を祈ってるよ。もし助けに行くなら、私は無理だけど継子の伊織は連れてって構わないわよ。あの子は、もつと実践を積んだほうがいいからね。現柱のあんたとなら、いい勉強になるさね」

「俺がかあ？冗談はよせ。お前のとこの継子の方がよっぽど強え」

「強い弱いはこの際どーでもいいのよ。あの子は命を懸けた現場に居合わせなさすぎ

た。これからは、もつと前線に出すべき人材なのよ。そうしていたならば、きっと今の宮本武蔵は、あの子が継いでいる」

「はっはっはっ……」

「あら、逃げるのですか？私、ここから一歩も動いていませんが」

「逃げるか！一回退いただけだ！ケダモノ獣の呼吸！三ノ牙！」

「二天・岩の呼吸。壺ノ型」

一度態勢を立て直している間に、伊之助が伊織さんめがけてまっすぐ走り抜ける。それを伊織さんは何をしたのかも分からなかったが、伊之助を床に叩きつけていた。また一歩も動かずに。

「くそお！なんでだあ！」

「まだまだ動きが発展途上なんです。まだ猶予はあるのですから、今夜降りるのは諦めてしばらく特訓をしては？それにお友達は隠れてしまったようすし？」

「ああ!? 紋逸のやろお!」

「師匠があなた方3人に課した理由を考えれば、彼が必要だという理由がわかると思いますよ。貴方達2人では、私には勝てません。諦めることです」

「ぐぬぬ……」

確かにいう通りだった。伊織さんは一步も動かずに、しかも素手で日輪刀を持つている俺と伊之助を圧倒している。攻撃を受け流され、真正面から受け止められ、終いには何をされたのかよく分からないまま吹っ飛ばされた。

「ふああ……ですが挑み続けるという気概は素晴らしいです。師匠が認めていただけのことはあります。ですが、下弦の鬼ごときに手間取っていたようではまだまだ。下弦の鬼程度は圧倒できるようならねば。でなければこの先、生きて行けませんよ? ……お腹すきましたね。そろそろ食料確保しておかねば」

そういう伊織さんは、その場から離れて森の中へ行ってしまった。

「ああ! なんて離れたんだあいつ! 今のうちに抜けようぜとんじろう!」

「炭治郎だ。いや、そんなことしてもいいのか……?」

「構うかよ! あいつが勝手に離れたんだよ!」

そう言いながら伊之助は伊織さんが先ほどまでいた道を通ろうと、走り出した。

「甘い」

「ふがつ!??!」

「伊之助!??!」

「私も師匠からの褒美は気になるので、とうか欲しいので通しはしませんよ? 悪いですが、私も本気ですので」

急に伊織さんが出てきたかと思うと、伊之助をその場で回転させて地面に叩きつけた。思わず俺も伊之助も叫んでしまった。

待って伊織さんどこから出てきたんだ。向かった方向と逆側から出てきたぞ。

それに、肩には鹿が……鹿?

「伊織さん、その肩にかけられてるのって……」

「鹿です。さつき捕らえました。これでしばらく食料は安心です」

「さつき……?」

「はい、そこから入ってすぐのところでしたので。あとは、素手でこう、首をへし折りました」

「素手!?? 罨とかを貼っていたわけではなく!??!」

「はい」

この人、森に入って10秒くらいしか経っていないはずなんだが……。

「基本自給自足なので頑張ってくださいね。私は貴方たちの食糧問題は見る気は無いので。自分で狩り、自分で調理してください」

「……何の用ですか？ 挑戦するにすれば、やけにやる気が感じられませんが」

「いえ……お話を、してみたいと思ひまして」

「話？ 私と？」

「は？」

俺は伊織さんの真正面に正座して伊織さんを見る。……横に解体された鹿があるが、それはいいだろう。

「まあ、構いませんよ。それでお話しとは？」

「……伊織さんは、何故鬼殺隊に入ったんですか？」

「鬼殺隊に……ですか。ちよつと説明が面倒ですね」

俺の問いに、伊織さんは唸った。

俺がこれを聞こうと思つたのは、鬼殺隊の殆どの人が持っている憎しみの匂いが、一切伊織さんからしなかつたからだ。

今この時も、伊織さんからは憎しみなどの負の感情のこもった匂いはしなかった。

「そもそもこの話、前提が違うんですよ、みなさんと。」

私は鬼に憎しみを抱いていない。別に、私と、私の周りに何かをしないのならば別段、何も思うことはありません」

鬼殺隊に入った理由としては、宮本武蔵家へ弟子入りをさせていただいた際の条件が『鬼殺隊への入隊』だったから。それだけです」

淡々と伊織さんは語り続ける。

それをじつと、耳を傾け続ける。

「宮本武蔵一族が、そもそもが特別すぎる存在なのです。表向きには政府は民に刀を持つことを禁じています。が、鬼殺隊は秘密裏に許されている。」

しかし宮本武蔵一族は違う。いうなれば、唯一政府から『刀を持つことを容認されている一族』なんです。簡単に言えば、表向きにも刀を携帯することを、政府から許されている存在。

それに初代宮本武蔵が鬼殺隊に入った理由も至極単純だそうですよ。

初代は『人間を斬るのは飽きた。それに鬼と斬りむすんだ方がより早く上達できる』という考えから鬼殺隊に協力することにしたそうです」

内容が突飛すぎて、ついていけない。

「それに堂々とわっかりやすいところにとでかい屋敷がある理由もわかりますか？」

隠れる必要がないからですよ。あの館には、現役の宮本武蔵の師匠であるその先代の元宮本武蔵。今で言うところと7代目ですか。それにあの家の使用人などは全てが歴代宮本武蔵に鍛え上げられた人間達です。

つまり、下弦の鬼程度ならば何匹こようとも蹴散らせるのです。

むしろみなさん、歴代宮本武蔵は御館様にこう言っています。『むしろ来てほしい。暇だから』って。

……笑ってもいいんですよ？

師匠があんな調子だから忘れているかもしれませんが、宮本武蔵一族と、その周りは基本皆、斬り合いが、喧嘩が大好きな輩なのです。

無論私も含めてね。

でなければ表向きには平和な世の中、好き好んで宮本武蔵の元へ弟子入りなんてしませんよ。10年に一回ほどの割合で、弟子を取っています。無論周りの平民はかの有名な宮本武蔵に会える、剣を教えてもらえると嬉々として門を叩きます。そうですね、私の方は大体200人くらいでしたか。

その中で鬼殺隊で言うところの最終選別に残れたのは私含め3人。

うち2人は喧嘩だか剣道だかが村一番、と噂されていたほど素人の中では強い方でし

た。

が、人の形をしたモノを斬ることに、生き物を刀で斬る事への抵抗を捨てきれなかった。唯一、初めから何の抵抗もなしに、生き物を、鬼を斬れたのは私だけでした。

それに3人の中で一番強かったのも私でした。

師匠はそこを買って私を次の宮本武蔵にすると考えてくれたそうです。そして宮本伊織の名を与えてくれた。

あ、他の2人も今は屋敷で働いておられますよ。それに表向きは剣道の先生として働いておられます。無論、鬼殺隊にも身を置いている以上、2人とも今は鬼を斬る事にも躊躇いなど持っていないません。

屋敷の警護を担当しているので任務などに積極的に行ってはいるわけではありませんが実力は折り紙つきです。

私や師匠、7代目もいなかった時に下弦の鬼三匹ほどによる襲撃があったそうです。が、その2人で斬り伏せたそうです。

炭治郎さん、忘れてはいけません。

宮本武蔵に深く関わっている人間は、剣を教わっている人間は1人残らず皆、斬ることが、刀を振るうことが大好きな人間です。

相手が鬼だろうが人間だろうが関係はないのです。とにかく、刀を、劍を振るえたのなら何でもいい。

ただ、公に人間はぶつた斬れない。だから公にぶつた斬れる鬼を斬るために鬼殺隊に身を置いてある人間が殆どです。

人間よりも、鬼は普通強いわけですから。

弱い相手をいたぶるよりも、強い相手と戦った方が、強くなれるでしょう？

……話過ぎましたね。今夜はこの辺で。炭治郎さん、頑張ってくださいね。私はここを通す気は無いので」

「はい！お話を聞けてよかったです！ありがとうございます！」

「こんな話を聞けてよかったなんて、変わってるねえ。まあこんな話でよかったならいつでもしてあげるよ」

拾参（13）・それでも私は宮本武蔵なのです b y 武蔵ちゃん

「はあ……はあ……流石だな。隻腕とはいえ宮本武蔵の名に恥じねえ強さだ」

「今日はもう無理だわ……体動かん」

「あたりめえだ。お前まだ治って一月も経ってねえだろ。無理しすぎなんだよ」

「身体動かしてないと落ち着かないんですもの」

「はは、確かにな。お前に暇だとか落ち着くとかは絶対似合わねえわ。で、どんな感じ

よ」

宇髄は私の左腕ではなく私のそばに落ちている日輪刀を見て言う。

「私の体の心配はなしかあ！あんた怪我人に本気で打ち込んできたくせに！」

「お前に体のことで心配する必要すらねえからな。今回で改めて認識したわ」

「さいですか。そーねえ。試作品としては悪くないわ。流石は代々宮本武蔵に仕える鍛冶職人。試作品といえど完成度は凄まじいわ。扱い方も天元のを何回も見てたからずんなり行けたし」

「よく言うわ。俺がその型を身につけんのにどれだけ苦労したと思ってやがる」

「そもそもアンタみたいに剛力でブンブン振り回す方法じゃないからよ」

「そもそも天元の日輪刀の形を参考にさせてもらっただけだしね。」

「でも扱い方は刀の形が似ているからどうしても天元とも似てくる。」

「……で、これからどうすんだ」

「どーしよーかしらねえ。御館様からはお休みを頂いてはいるけれど、結局体動かしてないと暇なのよね」

「だろうな。なら、俺の任務に付き合わねえか？」

「？」

「俺の嫁を探すつー任務だ」

「いや、それは無理だわ。私個人でいま鍛えてる奴らいんのよ。その子たち見ないと」

「お？珍しいな。伊織じゃないんだろ？」

「ええ。ほら、柱合会議の時にいたあの子。鬼を連れた隊士。それと他数人。御館様からのお願ひもあつて目をかけてるのよ。……今はね」

「ほーん。お前がそこまで言うとはな。気になつてきたわ」

「今は大したことないわよ。今はね。私の訓練真面目にやれば下弦程度なら圧倒はできるようにはなるわよ。私が保証するわ。真面目にやれば、だけど」

「特にあの雷の呼吸を扱う子とかはいつ逃げ出してもおかしくはない。」

まあその時はその程度だったと言うことだ。

「ま、そう言うわけで嫁救出は悪いけれど自分でやってくださいな。もし手が空いたらその時は手伝うわよ」

「おう。そんな時は遠慮なく連れ回してやらあ」

「はいはい。それじゃあ私はこれで。今日はどうもありがとね。忙しい中わざわざ。これはお礼」

「おう。いつでもこいや。お前とは一度ゆっくり話してみてえしな」

天元の横に二天屋敷で取れた果実を置き、炭治郎達の元へ向かう事にした。

「……で、成果は？」

「私の負けです」

「そ、手エ抜いたわけじゃ無いのよね？」

「剣に誓って」

蝶屋敷には既に伊織と炭治郎、善逸、伊之助がいた。今は昼餉の最中らしい。

今の伊織との問答が嘘でないのならいい意味で予想外ね。

「アオイ、この後この四人とも借りるわよ」

「は、はい！……師範が、程々に、とだけ言っていました」

「あら、行動先読みされてたか。なら話は早いわ。皆、日輪刀を持って昼餉を食べ終えたら庭に集合」

「はい！」「おう！」「え……せつかく解放されたの？また？」

「了解しました、師匠」

天元との訓練で体にガタは来てるが、四人まとめて相手することくらいはなんとかなるでしょう。

多分。

縁側でゆつくりとお茶を飲みながら、想いを馳せる。

私は明らかに、前よりも弱くなった。

当たり前と言っちゃ当たり前だが、それでも私にとつては許容ができない。だからこそ今の体になれるよう、体を言い訳にしないよう、訓練を始めた。

「けど結局、前ほど動けるわけもなし、と」

片腕でも二刀流ができるよう考えはしたけれど、問題は私自身の筋力等の、身体的な問題がほとんどを占めている。

「……うだうだ考えるのはやめ！私は私なりにやるだけさね！」

さ、そうと決まればあの子たちを徹底的に鍛えるところでしょう。

「じゃあ、伊織からみた3人の感想を、どうぞ」

「そうですね。息があっているのがあっていないのかよくわかりませんでした。が、皆さんの動きが奇跡的に噛み合った、と言えばよろしいのでしょうか。極々僅かな一瞬でしたが……背筋が凍りました。

その結果が私の敗北でした」

「ほお」

それだけ聞くととても頼もしく聞こえる。

一人は無理でも3人なら下弦の鬼は圧倒できる可能性がある、ということだ。今は、ただこれだ。

願望を言うなら一人で下弦程度は圧倒できるようになつてもらいたいわね。

「自分の負けを素直に認めてんならそれはそれでよし。例のやつは時間は半分程にしと

きましようかね」

「……はこ」

その瞬間伊織の目がゲツソリとしたのを見逃さなかった。
休憩なし打ち込み稽古だけでしように。

「それじゃまずは炭治郎」

「はい！」

「伊織と戦って何か感じたことは？」

「……改めて自分の実力不足を痛感しました。」

実は、煉獄さんに『柱になり皆を支えてやるんだ』と、激励を貰っていたんです。その為に、どんな苦難も受け入れて、努力をしようと思いました。

でも今回の伊織さんとの特訓でいかに自分が弱いのかを思い知りました。そして武蔵さん達がどれほど高みにいるのか。

俺は、今の俺の実力では武蔵さん達と共に戦う以前の問題です。

単なる足手纏い……」

あれ、炭治郎でこんなに悲観的ない子だっけ？私の予想通りなら

「でも、それでも俺は諦めません」

「それでも君は、諦めない」

口に出すと、ちよūd炭治郎の言葉と被った。

やっぱり、予想通りね。

酷く驚かれたが君の人柄を考えると当たり前の答えだよ。

「そう思っているならよろしい。善逸と伊之助は？」

「……俺は、彌豆子ちゃんを守りたい。その為には、もつと強くないと」

「俺ア！つええ奴をぶつ飛ばして俺が一番だと証明したいだけだ！その為にはお前らにまず勝たなきゃいけないからな！強くなつてやるよ！」

伊之助はともかく、善逸ですらちよつと覚悟ができていた。

伊織は何をしたのやら。

「各々の覚悟は感じました。では、ここから本題です。主に君達に深く関わる事です。

伊織、あんたも関係あることよ」

「[[[c~]]]」

「現在、君たちの代で柱もしくは継子になっていないのは君達だけ。伊織は特別だけで、私は御館様からこう言い渡されています。

『君たちを気にかけてやってくれ』と。

今回の特訓も、その一環です。

……長つたらしくなつたけど簡単にいうと、君達は私の管理下になつた、ということ
です。今朝に御館様から正式に通達されました」

「師匠。それはつまり？」

「全員私の継子みたいなもんになつた、ということ。ビシバシ鍛えるからそのつもりで。
特に伊織は鍛え直しさね。私の見立てだとまだまだ上に登り詰めれるから、これまで以
上に厳しく行くつもりだからそのつもりで」

悲鳴をあげてるのが一人。ゲツソリしたのが一人、やる気に満ち溢れているのが二
人。

三者三様の反応で結構結構。手を抜く気はない。

「ああ、いい忘れてた。伊織、あんたは近々音柱と共に任務へ出てもらう。まだ予定は未
定。音柱曰く女手が複数欲しいらしいから」

「はあ」

「現段階で伝えることはこれくらいかね。……さあ、堅苦しい事はやめにして

全員日輪刀を構えて。こちらら堅苦しい空気を作つて疲れたので、無性に体を動かし
たいのです。全員で、かかつてきなさい」

その時の、武蔵の無邪気な笑顔に四人一同、何故か怖くなつたとかなんとか。

「二天ノ呼吸……」

「獣ノ呼吸！」

「ヒノカミ……」

「雷ノ呼吸……」

予想通り真つ先に肉薄してきたのは伊織。

幾万回とその技は見ているのでどんな技かはわかる。いなすのも容易い。

けど今回はその後ろと私の左右から飛び込んでこようとしている3人が少し邪魔だ。

本身を抜かせているので変に同士討ちさせると大怪我を負いかねない。

普段なら関係なく、死ぬ直前までしばき回すけどそうしたらこつ酷く叱られた挙句に

ご飯抜きとかいう暴挙をしてくる未来しか見えないので。

誰からって？もちろんしのぶからよ。私の生命線はしのぶが握っていると言っても

過言じゃないわね。

まずは伊織の足を引っ掛ける。転ぶわけなどないがほんの少し姿勢を崩せればそれ

で十分。

その隙に思い切り姿勢を低くし、右から来ている伊之助の足元に、自らを障害物と化

す。

もちろん飛び越えられるが、そんな無防備なのを見逃すわけもない。

伊之助の足を右手で掴み、それを左から来ている炭治郎の前に来るよう地面に叩きつける。炭治郎はそれを見て軌道を変えてきたが、伊之助を挟むように立ち回ると攻めあぐねていた。もちろんその間も伊之助の体のどこかを右手で押さえ込み、動けないようにする。

いくら威力の大きく隙の無い技であっても仲間ごと斬るわけにはいかないもんね。

こうなつてくると大体伊織は私の後ろを取ろうとしてくる。

善逸はこういう集団戦だと技の相性が酷く悪い。だからしばらくは無視しておけばいい。

きつと今も、針の穴よりも小さい僅かな隙を死ぬ気で探してるでしょうから。

初代はこの数の比ではない1対多をやつて、その上で天下無双の名を知らしめていたのだから、本当に尊敬する。

「癖が抜けてないわよ、伊織」

「っ!?」

伊織らしい太刀筋をほんの少し軌道を逸らし腹を蹴り飛ばす。

頬に傷が入ってしまったのは私の実力不足。

「霹靂か一閃！」

「ほっ」

ほんの僅かな隙があつたのか、善逸の霹靂一閃が飛んできた。

音が鳴った時にはもう目視をしようにも遅すぎるので見ずに、音の方向だけで居場所を把握する。

思い切り脱力し、膝を抜く。踵を起点に思い切り踏み込み、善逸に向けて体当たりする。

刀は柄で側面を殴り無理やり避ける。

が、結果として羽織ごと伊織の時より深い傷が私の右腕に入った。

「……はい、終了。よくやりました」

それを皮目に一旦切り上げる。負ける気はしないが、体が悲鳴をあげかけている。

「そうさねー、全員経験が足りない。圧倒的に足りない。3人は特にね。特訓が足りない訳じゃない。死戦を潜つた回数が圧倒的に足りない。……だから、ひたすら任務をこなすしかないかもね。技術面は私は教えることはできないから。タイマンならいつでも受け付けるわよ。死にたい……じゃなかった。挑戦したい子はいつでも大歓迎」

「師匠、口が滑るといふ問題ではないかと」

「私ができるのは殺す気でぶつかってあげるくらいだから間違つては無いわよ」

そもそも、死ぬ可能性のない特訓ほどぬるいものはない。血反吐を吐いて、互いに死ぬ気の特訓が一番効果がある、と思う。

私の場合には死ぬ気じゃなくて「絶対に生き残る」の方が強いけど。

「あ……そろそろ限界だから、伊織、3人は……任せた」

「はい。ごゆっくり体をお休めくださいね。師匠が早死にしたら宮本武蔵の名を継げませんので」

「ちよつとは私の体を心配してくれないの？」

「貴女にはどちらかというと貰い手の心配の方が」

「どういう意味よ!?？」

いちおう杏寿朗と婚姻結んだんだからな！実感いまだにないけど！

「あ、あ、あ。極楽だったあー」

少しガツツリ寝て、散歩がてら温泉に浸かりに行つた。

普段は早風呂の方だけど、今日は長風呂をして、体の芯まで温まった。

しかもおうどんまで食べれたということもありかなり上機嫌。

不届き者さえいなければ、だが。

「で、何の用よ」

「ひっ……」

気配の殺し方的に、ただの一般人だろう。でも、明らかに私を狙っていた。

いきなり前に現れたことにたいそう驚いていたが、敵意を持って接してきた以上、情けなど不要。

「おっと、それ以上動かないでね。お前がしていいのは、私の質問に答えることだけ。それ以上動くと、斬るわ。返事は？」

首に刀を当て問うと、この男……20歳くらいだろうか？コクコクと涙目で頷いた。「じゃあ質問。何の為に私を尾けてた訳？十秒以内に答えてね」

「……っ、ば、化け物に、お前を、連れて、こいつて。殺してもいいが、お前には無理だろう、って」

「化け物？どんな化け物よ」

「目、目が、六つある化け物だ。侍のような、格好をしていた。お、俺は悪くない。俺は

……」

その瞬間、今までにない寒気がした。

上弦の弐や参と対峙したときとは比べ物にならない。

それよりも、格上の存在。

「二天の呼吸・肆ノ型……」

「ふむ……悪くない」

声がしてようやく、後ろをとられていたに気づいた。

振り向きざまに刀を抜くが、そこに声の主は既にいなかった。

「悪くない……だが、まだお前は……未熟だ」

「……急に出てきたと思っただら何様よ」

そいつは、さっきの男をいつの間にか斬り伏せていた。

……嫌になってくるわね、ほんと。

「で、何の用よ。今から殺し合いしたいってなら付き合うわよ」

「そう……急かすな。今宵は……確かめに来ただけだ。」

上弦の鬼二人と立ち会い、生き延びた剣士をな

目の前には、六つの目。そして武士のような格好。腰に帯びているのは刀。

両の眼に刻まれているのは『上弦 壱』

気配が今までに出会ったどの鬼よりも濃く、今の私だけでは絶対に勝てないというところがはつきりと感じ取れた。

この世の神様は、とことん私を嫌っているらしい。

こうまでして私の心をへし折りたいたいのだろうか。

「あ、そう。で、感想は？」

だから、虚栄を張ることではか、自分を保てない。

不適に笑って見せるが、未だ寒気は収まっていない。

「期待外れ……。その程度で宮本武蔵を名乗ろうとは……。その程度ならば、いずれ死ぬだろう。『患者』でもないのだから……。」

その後、上弦の壱は溜息を一つだけつき、暗闇に消えていった。

『期待外れ』

その言葉のとんでもない重圧だけを私に残して。